

# 東方地底生活記

Cr.M=かにかま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地霊殿、そこには心を読むさとり妖怪や、心を閉ざしたさとり妖怪の妹や、死体を集めてくる猫や、核融合を操る八咫鳥が住まう大きな屋敷

その屋敷に最近幻想入りした少年が様々な成り行きで居候するところとなる

幻想郷の地底で語られる幻想入りした少年が奮闘する物語

## 目次

|  |    |
|--|----|
| 一／何事も最初が肝心って言うよね？                                | 1  |
| 二／何気ない日常が幸せだと、これほど感じたことはない！                      | 6  |
| 三／いつ、何時でも避けては通れない道がある!!                          | 12 |
| 四／人生何でも上手くいくという考え始めたのはどこの誰でしょうね!?                | 17 |
| 五／地底の正しい歩き方なんてものはない！                             | 22 |
| 六／人の短所は笑うもんじゃない、いつかイジメに繋がるよ！                     | 26 |
| 七／人の話はキッチリと聞きましょう、大切なコトを聞き逃してしまいますよ！             | 32 |
| 八／偶然という言葉ほど、恐ろしく恨めしいモノはない！                       | 36 |
| クリスマス特別編　く地霊殿の聖夜く                                | 41 |
| ⑨／知人が多いといいつて言うこともあるけど大半はろくでもないことで終わることが多いんだよね！   | 49 |
| 十／何もかも人に責任を押し付ける奴ほど器って小ちやいモノなんだよ！                | 53 |
| 一一／やはりこの世界は平等には成り立たないのが必然なのかもしれない！               | 58 |
| 一二／機械の便利さを知る前に食べることのありがたさを知るべきだ!!                | 62 |
| バレンタイン特別編　く鍍蒼鳶の受難く                               | 66 |
| 一三／人は決して見た目で判断してはいけないんだよ！                        | 81 |
| 一四／掃除をすると心が綺麗になるって言うけど根が腐ってたらそれはもはや修復できないものなんだ!! | 85 |

一五／後先考えずに行動することが迷惑なのは結果的にいい方向に進むなんてことはほぼ確実にないからだよ！

一六／過ぎ去った日々は戻ってこないけど過ぎ去った日々を取り戻すことはできると思うんだ！

一七／人は誰でも空を飛びたいか思っていると言われているけど高所恐怖症の人からしたら何を考えているかわからないモノなんだよ

!!

一八／親しき友にも礼儀ありつていうこの言葉を考えた人は本当に天才だと思っている！

一九／基本的に勧誘販売やセールスの類やその他怪しげな宗教団体へのお誘いはお断りしています！

二十／現地のごときは現地の人に聞くのが一番だけど勝手に盛り上がられて会話にならない時つてよくあるよね！

二一／友達の友達と二人きりになることほど気まずいことはないと思うんだ、これならまだ知らぬ他人の方がマシだと思えることもある

!!

二二／何をするにしても気分転換は必要なんだと思うんだ!!

二三／興味を持つのはいいことだけど、ほどほどにね!!

幕間／霊鳥路空の思うこと

146

139

133

126

119

114

108

103

98

91

一／何事も最初が肝心って言うよね？

幻想郷…

そこは人々から忘れられ、幻想になったモノが流れ着く異世界  
何百年という歴史を持ち、そこでは人、妖怪、神、仙人と言った様々  
な種族が絶妙なバランスを取りながら同じ世界で共存するというと  
ころが実現している楽園とも言える場所

しかし、種族の本質は変わることはなく妖怪は人を襲い、人は妖怪  
を畏怖するという関係に変わりはない

幻想郷の管理人、八雲紫と博麗神社の巫女によって先述述べた幻想  
郷のパワーバランスは保たれており、基本的には平和で退屈な毎日  
を送ってるのが日課であつたりもする

これはそんな幻想郷に流れ着いた一人の外来人の物語…

※

「……………熱い」

俺は目を覚ました第一発言が熱いとは何とも珍しい発言をしてし  
まった

しかし事実なのだから仕方ない！

それは否定したくても否定できない真実だからね！

俺の名前は鍔蒼鷲（くろがねそうたつ）

名前の由来は一切不明だ、親に聞いても教えてくれなかつたし  
な…

俺は今から半年程前に、この何でもありの非常識だらけの世界に流  
れ着いてしまった

お陰様で親に名前の由来を聞くことが出来なくなってしまったこ  
とに悲しさも無念さも何も感じない！

…… さつきから俺は一体誰に説明しているんだろう？

画面の前の読者とかそんなオチじゃないよな？

もしかしたら寝起きで頭が正常に働いてないのかもしれない、とり  
あえず俺は冷水で洗顔を行い目を覚ますことにした

そして鏡に自分の顔が映る

オールバックになった少し長めの黒髪に所々にピアスと獣のような鋭いツリ目

……相変わらずの悪人顔だからって凹んだわけじゃないもんね！

そしていつもの白いカッターシャツを直接羽織り、自分で言うのも何だが不気味な模様が刺繍された赤いバンダナを巻き、首に地味に細かい装飾が施された銀色のチョーカーを装着する

ちなみにカッターシャツの下には何も着ていない、だって熱いんだもん

唯一身に着けるモノと言えば腰に巻くサラシくらいだ、毎日ちゃんと替えてるし、洗濯もしているから決して不潔ではない！

あまりにもいつも通り過ぎる一連の流れを終え、皆はまだ寝ているであろうがキッチンへと繋がっているリビングへと足を向ける

「今日の朝食は何にしようかな〜？」

途中道行く所々で此処で飼われている動物達とスキンシップを取りながら俺は深いため息を一つ吐いた

地霊殿の居候、俺こと鏡蒼鳶の一日は始まったばかりである！

……今日の俺ホントに独り言多いな

※

「あ、蒼鳶」

「おはよう〜」

俺がリビングに着くといつもこの時間にはいないはずの二人がソファでゆるりとくつろいでいた

「おくう、お燐、今日は早いな」

「今日は死体が全然落ちてなかったからね〜、あたいホント残念だよ」  
「俺としては平和でいいと思うんだけどな」

俺の言葉にむくつと頬を膨らませる

赤い髪に二本の尾、頭にある二つの猫耳と人間の耳というつけ耳か本物かよくわからない耳をピコピコと火焰猫燐（かえんびょうりん）、

通称お燐は猫又ではなく火車という種族に分類されており「死体を持ち去る程度の能力」という役に立つのかよくわからない能力を保持している

怨霊や死体と会話する力もあるらしく、初対面で全力で殺されそうになったことは今でも忘れることの出来ない、いい思い出となっている

それでも今は打ち解けあい、そこそこ仲良くさせてもらってる

そして、背後に何やら凄まじい威圧感と危機感を感じる…

「メガフレア!」

「殺す気かアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

俺はゼロ距離の熱砲撃を全力で回避する、我ながら中々の反射神経だと褒めてやりたいほどだ

「いきなり何すんだ、おくう!」

「憎かった、私をボツチにしてお燐とイチャイチャしてる蒼鳶が無性に憎かった、パルパルパルパル…」

「その台詞はあの嫉妬を操るアイツだけで十分だ!頼むから理不尽な理由で俺に制御棒まで出して攻撃するんじゃない、人間ってかなり脆いから!」

「蒼鳶なら大丈夫、人外だから」

「お前にその台詞を言う資格はない!」

全く、コイツはホントいつも油断ならない!

彼女、霊鳥路空(れいうじうつほ)、通称おくうは太陽の化身、八咫鳥と呼ばれる種族だ

緑と白を基調とした服装をしており、背中には大きな黒い翼でその上に裏地が宇宙柄のマントを羽織っており、実は取り出し自由と最近気がついた右手の物騒な身の丈程の制御棒が特徴的で「核融合を操る程度の能力」という何ともチートで人類が力で挑んでも絶対に敵いっこない力を保持している

更に言えばかなりの鳥頭で、俺の名前を完全に覚えるだけで二ヶ月程掛かったことに驚きを隠せなかった

ちなみに先程の攻撃が核融合で放たれた一撃なら俺は命どころか

体の原型すら留めていなかったであろう、それを証拠に壁が少し焦げた程度で被害は済んでいるのだから

…… 十分な器物損害に思われるがこの幻想郷では常識に囚われてはいけないことをどうか覚えておいていただきたい

「そういうやおう、もう間欠泉地下センターの仕事は終わりか？」

「すつぽかしてきた」

『今すぐ戻れ!!』

俺だけではなく、お隣までも突っ込んだ

「うにゅ、面倒くさいよ」

面倒臭いかという理由であそこを放っておくわけにはいかない!

何やら世にも恐ろしいと評判の山の神様から依頼されていることらしいのでとても重要な案件だ!

というかコイツは神様の頼みを堂々とすつぽかして来たことに何の疑問も迷いも見られないから尚更質が悪い!

「あ、そういうえばお腹すいた」

「あたいも」

「そーいや朝飯作る為に下りて来たこと忘れてた」

俺はうつかりしたという様子で頭をわしゃわしゃと掻き上げる

時間帯的にそろそろさとり様もこいし様も起きてくる時間っぽいので少し急いだ方がいいかもしれない

「じゃあ、急いで朝飯作ってくるよ」

「私も手伝うー!」

「お前は間欠泉センターの仕事を終わらせてからにしろ!」

「ええ〜」

おくうは渋々と言った様子も見せずリビングから動く素振りすらみせない

お隣はお隣でさとり様がそこら辺から拾ってきたペット（主に猫）と戯れちゃってるし……

「お前が帰ってくる頃には朝食は完成してると思うからさ、早く間欠泉センター……に……」

俺はおくうの背中を押そうと手を出したのだがそれは空振りに終



わかってしまう

おくうが俺の視界から消えていた、その代わりになにやらキッチンから爆発音にも似た轟音が聞こえてきた気がする…

「うにゆううううううううううううううううううううううううううううううう!?!」

「キツ チン で メ ガ フ レ ア 使っ て ん じや  
ねえええええええええええええええええええええええええ!!」

俺はこれ以上の大惨事を防ぐべく急いでキッチンへと急行した

二／何気ない日常が幸せだと、これほど感じたことはない！

ヨッ、俺鉄蒼鳶！

年齢はあえて内緒の一応人間だ、俺は今地霊殿から外出する形で旧都と呼ばれる街まで来ている

なぜなら朝飯を作るはずだったが、熱かい悩む神の火ことおくうがキッチンの河童特製最新式のコンロの付け方がわからないまま使用しようと、何故か右手の制御棒をコンロに向けてメガフレアを割と全力で放出したものだから居候先のキッチンは大惨事な状態となってしまった！

一応生きている食材を確認したかったが、ここ幻想郷にはまだ外の世界の生活するのに必要不可欠の三種の神器の一つ、冷蔵庫が幻想入りしていなかったため殆どの食材は非常に不本意だったのだが⑨の協力で手に入れた氷で保存をしていたのだが、その氷ごと食材の九割が駄目になってしまっていた

お隣は気がつけばどこかに行ってしまった、おくうはおくうで逃げるように間欠泉地下センターに今更戻って行った

そして、現在に至る

未だ眠っているさとり様とこいし様を置いて地霊殿を留守にするのは非常に不本意だったのだが、お隣が外に出掛けていないことを祈りつつ俺は最低でも朝飯を作る程度の食材が欲しかったので旧都に食料調達に来ている

本音を言ってしまったえば行くなら人里が良かったのだが、時間が掛かりすぎるし何よりも遠い

それに長年の地底生活の為に太陽の日差しも月の明かりも最近ではまともに浴びていない上に、地底では朝の感覚で行動しているが地上が朝とは限らない

もう時差ボケとかそんなのでは済まされなくらい体内時計と生活習慣が滅茶苦茶になってしまっている、そんな俺が地上に行ってし

まえば何か負けた気分になる気がする

…… まあ、本当のことを言えば幻想入りして半年の間、地上には何度か行ったことはある

博麗神社で開かれた宴会の時や、香霖堂という外の道具を取り扱う店に足を運んだり、妖怪の山付近にある河童の工房に行ったりと、時間の流れもある程度はわかるが本当にそうなのかはわからない、俺は所詮小心者だよ、笑いたきや笑えよ!!

そして、旧都には別の用事もある

おくうがキッチンをニユークリアフュージョンしてしまったため、修理もしないといけない

そこで旧都に住む鬼の力を借りる

彼等は力が強く、こういう仕事などもすることが多いらしい

過去に博麗神社を襲ったという大地震で倒壊した神社を建て直したのも彼等と聞く

鬼には一応知り合いもいるためなんとかなるであろう、何しろ俺一人の力ではキッチンのあの惨状をどうすることもできない……

他力本願がここまで役に立つ四字熟語だと思ったことはないかもしれない

そんなこんなで歩き続けること早20分ちよつと、やつこのことで旧都が見えてきた

旧都は地霊殿よりも灼熱地獄から離れている場所に位置しているため、やや涼しめの快適な環境となっている

まあ、人間の俺にとつてはどちらにしても熱いという感想しか言うことはできないわけだが

俺はとりあえず何を買うかを考えながらあいつが居そうな酒場に向かつてゆつくりと旧都に足を踏み入れる

旧都は地上の人間や妖怪を嫌う者達の集まり、というか大半が妖怪のため俺は少し浮いてしまうがそんなことを気にしてはここでは生きていけないので、そこら辺は適当に対応するしかないだろう

焼き鳥屋の前を通って朝から焼き鳥はちよつとな、と苦笑いしながら他の食材を探していると、

「ギャーーーーー!!」

「グワァーーーー!!」

…… 何やら近くの酒場から複数人の叫び声と爆音が響き渡った  
もしかしたらあいつ、また暴れてるんじゃない……

俺は内心不安になりながらも食材探しを中断して騒ぎのある酒場  
に行ってみる、そこには……

『申し訳(ご)いませんでした!』

「わかりやいいよ、わかりや」

…… おそらく鬼と思われる大の男十数人が一人の女性に土下座  
していた、というか彼女も鬼の一人だと額から生える赤い大きな角で  
わかった、というか顔見知りということも同時に判明した

彼女は星熊勇儀（ほしぐまゆうぎ）

長い金色の髪に手首には鎖が千切れたような手錠、女性とは思えな  
い豪快な肉体こそが彼女の強さと存在感を表している

一通り落ち着いたところで俺は彼女に声を掛ける

「勇儀さん」

「お、蒼蔦久しぶりだな」

「勇儀さんは相変わらずツスね」

「まあな、それより何の用だ？」

※

数分後……

「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい! 星熊の姉御に人間が  
勝負を挑むよ!」

やたらテンションの高い酒場の店主が客寄せの為にわざわざメガ  
ホンを使い、辺りの鬼や妖怪達に声を掛ける

俺と勇儀さんの周りには既に百を越えるギャラリーが集まってお  
り、テンションも最高潮に盛り上がって……

「……ッて、ちよつと待ていッ!!」

「ん、どうした？」

俺の叫びに勇儀さんは酒を飲みながらキョトンとした表情で尋ね

返す

「何でこんなことになってんすか!?俺はただ勇儀さんにキッチンの修理を頼んだだけだった気がするんですけどー!？」

「私が一勝負しよう、って言ったからお前が応じたんだろ？」

「酒瓶差し出して勝負って言ったからってつきり飲み比べかと思っただすよ!なんで実力勝負なんですか、俺が勝ち目あるわけがないじゃないツスカ!」

「最初から諦めんな!私はそういう軟弱者の頼みは聞かないよ!!」

「詰んだ!？」

俺の矛盾を勇儀さんは見事に論破する、クソウ口喧嘩でも勝てる気がしねえ!

なんかギャラリイもいい感じに盛り上がっちゃってるし、これ完全に逃げ場なしじゃん!

「それに前々からあんたとは戦ってみたかったんだよ、蒼鳶」

「俺みたいな力もない人間をそんなにサンドバックにしたかったのかよ」

「嘘だね、蒼鳶は戦う力は持つてるだろ?しかもその力は普通の人間よりも遥かに高いはずだ」

「なっ……!?!」

俺が戦えることがバレた!?

今までそんな振る舞いした覚えはない、あくまでも普通の人間を装ってこの半年間生活してきたはずだ

地霊殿の皆には話しているが、それ以外に話した覚えもない……

「……なんで俺が戦えるってわかったんですか?」

「勘」

「ええ!？」

この人、やはり侮れない!

「それと今回は見逃すが次は気をつけな、私ら鬼っていう種族は嘘とかそういうのが大っ嫌いなんだ、蒼鳶は私に対して嘘をついた、これで戦う理由もできたんじゃないかい?」

「……いい感じに纏めてますけどそれはあくまでも鬼の見方ですよ

ね？」

「当たり前だ」

勇儀さんはやる気満々な様子で拳をポキポキと鳴らし始める

「俺もそろそろ覚悟を決めた方がいいかもしれない、勇儀さんから逃げることがおろか、この流れに逆らえるわけでもない！」

「勇儀さん、一戦お願いします！」

俺は勇儀さんを真っ直ぐ見つめる

今まで以上に目をツリ上げて

「いい眼だ、先手は貫うよ！」

勇儀さんは酒を飲み干すと、とてつもない殺気を纏いながら真正面からこちらに突っ込んで来る

勇儀さんの能力は「怪力乱神を持つ程度の能力」、あらゆる力において彼女を越えることは不可能であろう

能力以前に種族の差がある、俺はそんなハンデキャップを背負いつつも勇儀さんの一撃を間一髪所で避ける

俺はそのまま右ストレートを勇儀さんに向かって放つ

勇儀さんはそれを軽々と受け止め、カウンターのキックを繰り出す  
俺は勇儀さんの一撃を一発でも喰らえば戦闘不能になってしまう

だろう

だからこそ、俺はどんな姑息な手を使っても回避に専念する

まずは勇儀さんに自由を奪われている右手を思いっきり引っぱり、  
右腕から右手を外す

そして蹴りの範囲外に転がり込み攻撃を回避することに成功する  
「え…？」

当の勇儀さんは目の前で起こった現実について行けていない様子だ

そのまま自分の持っている俺の右手を確認する

「あ、ああああ、わ、悪い、お、おとお前の右手…」

「勇儀さん、とりあえず右手返してください」

「いやいやいやいや、とりあえず治療だ！くつつくかはわからないが  
永遠亭の医者にも見せれば、」

ガチャ☆

俺は勇儀さんから右手を取り返し再び右腕にくつつける

「ハア!？」

勇儀さんは驚きで俺の右手と右腕を何度も見直す

まあ、この驚きは当然だが勇儀さんは少しオーバリアクションな  
気もする

「蒼鷲、あんた一体…。」

「そうですね、俺は確かに人間ですけど少し違うんですよ…。」

俺は再び右手を右腕から外し、勇儀さんに俺の正体を明かす

「俺は… サイボーグだ!!」

三／いつ、何時でも避けては通れない道がある!!

サイボーグ、いわば俺は改造人間という括りに当てはまる人外だ  
この幻想郷の中でたった一人の存在であり、イレギュラーな存在  
俺がサイボーグだと幻想郷内で知っているのはさとり様、こいし  
様、お隣、おくう、八雲紫、河城にとり、森近霖之助、そして勇儀さ  
ん…

しかし、サイボーグと言つても体の作りはとても中途半端で右腕と  
左上半身（具体的に言えば首より下、肋骨より上）であり、それ以外  
は生身の人間と何ら変わらない構造となっている

何故そんな中途半端な作りになってしまったのかは灼熱地獄より  
も深い深い理由があるのだが、今語ることはないだろう

まあ、中途半端は中途半端なのだがサイボーグはサイボーグだ  
しかし、いくら体を鋼鉄並みの強度の材質を使っていたとしても、  
いくら人間離れた力を使えるとしても、所詮本質はただの人間であ  
る

そして俺と今戦っている相手、星熊勇儀は女性とはいえ鬼である  
更にいえば勇儀さんは鬼の四天王と呼ばれる括りの一人に分類さ  
れており、鬼の中でもかなりの手練れであることになる

普通の鬼にすら勝てるかわからない俺がそんな実力者と戦えばど  
うなるかなど、チルノでも理解できるであろう  
つまり、俺が一体何を言いたいのかと言うと…

「勝ったのは星熊の姉御、星熊の姉御に賭けてた人は大当たり！そこ  
の人間に賭けてたやつは残念だったな出直せこのヤロー！」

「おい立てよ人間、ガッツ見せろよー！」

「お前を信じてやった俺が馬鹿だったよ！金返せー！」

「細胞具とかいってても所詮は人間って訳か…」

… 手加減なしにボコボコに叩きのめされました

※

「ちくしょう、酷い目にあっただぜ…」



その後、俺は勇儀さんとギャラリーの鬼たちに拉致られる形で酒場へと連行された

そして飲むこと一時間半、やつとのことで解放された俺は片手に五つの弁当を袋に入れて旧都を後にし、地霊殿へと向かっていた

そのどさくさに紛れて勇儀さんにキツチンの修理をお願いするこゝとに成功し、今すぐは無理なので後から地霊殿まで来てくれるらしいこれならボコボコにされた甲斐はあったかもしれない

……決してマゾヒストとかいう変態ではないので、そこは誤解しないでいただきたい

それに時間帶的にもさとり様もこいし様も起きてるだろう、おくうも戻ってるだろうし、お燐は、まあいいか、一番暇そうだし

俺は全身を勇儀さんの一撃で痛めてしまったので急ごうにも急ぐことができない

サイボーグとは言えど体力の回復まですることはできない、というかできたなら今すぐやってると思う

俺はやつとのことで地霊殿に到着し、心の準備をしながら扉を開く……何の準備かはわからないが何となくしとかなければいけない流れだったりするのは気のせいだろうか……

ちなみに玄関に入ると大きな広間に出ることになり、その奥がリビングとなつている

広間にもペット達は集まつており、こちらに歩み寄つて来る動物も少なくはない

半年も暮らせばこういう環境にも慣れてくるものだ、と軽く憂鬱な気分になりながらも、リビングに繋がる扉を開け放つ

「ただい…ま…」

ぐくきゆるるるく、ぐくきゆるきゆるきゆる

……何だろうこの光景は

いつも皆で楽しく食事をするはずの机が今日に限っては四人の少女たちがハイライトを失った瞳でこちらの持つている袋を凝視している

彼女達は全員妖怪である、本来であれば食事をしなくとも恐れさえ

あれば生きていける生命体の筈なのだがここは幻想郷、外の世界の常識はどうやら一切と言つてもいいほど通用しないらしい

現に彼女達は腹を空かしているのだから

ぐくきゆるるるゝ、ぐくきゆるきゆるきゆる

「…………… えと、お待たせしました?」

瞬間、少女たちは俺、正確には俺の持つ弁当に向かつて飢えたケダモノの如く表情を強張らせ、眼に光と欲望を宿しながら食欲を満たすために行動を開始した

※

「まったく、今後はこのようなことがないようにしてくださいね」

ホント、すみません…

俺は口には出さないが目の前の少女、地霊殿の主である、覺妖怪の古明地さとり（こめいじさとり）様に自分用に買ったトンカツ弁当を食べながら謝罪の意を示す

桃色のショートヘアに水色を基調とした服装、黒いヘアバンドと第三の眼とも言われるアクセサリのような赤い目玉が特徴的と言ってもいいほどに目立つ

「まあ、美味しいので良しとします」

さとり様は俺が彼女に買ってきたオムレツ弁当を食べながら俺が心で思ったことを言葉にして返す

彼女は「心を読む程度の能力」を持ったため俺が口に出さなくても言っていることがわかるらしい

実際、今俺が思っていることもわかる様子みたいだし

「… 蒼鷺さん、あなたは先程から一体誰に私の説明をしているのですか?」

「え、俺そんな感じでした?」

「思いつきり説明口調でしたよ」

マジか、俺は自分の心の中の口調が自分でわからないとはな…

そういえばこいし様が見当たらないな、さつきまでそこで一緒に項垂れていたのに…

「蒼鶯、次は日の丸弁当が食べたいな」

「あたいは鮭弁当！」

「お前ら自分で料理する気はないのかよ！」

まあ、居候させてもらってる身として色々手伝いはさせてもらっているのだが、彼女達の料理スキルのなさには一番驚かされた

俺が地霊殿に居候するや否や、俺の基本的な仕事は料理くらいである

そして今ではキッチンを我がものにしてしまっている状態である

……

ホント、俺が来る前は一体何を食べて生活していたのだろうか？

「ほぼ毎日がお弁当でした、お金にもあまり困らなかったのよ」

俺の疑問はさとり様の一言によって解決した

なるほど、恐らくおくうが給料を貰い、さとり様が管理、お燐とこいし様がい出しと言った関係が一瞬で頭の中でイメージとして完成した、というかそれ以外に考えることができなかった

さとり様も縦にコクリと頷いてるし

ついでにペット達にも実は買ってきていた少量の食べ物を小皿に入れて床に置くと地霊殿内にいる大半の動物達が駆け寄ってきた

「やはり蒼鶯は優しいですね」

「そんなことないさ、必要最低限のことをしてるまでだよ」

「それでも、皆はあなたに感謝していますよ」

さとり様は俺に笑顔で返してくれた

よく見ると、お燐やおくうも笑顔でこちらを見ていた

それを見て俺は本当に必要とされている存在なんだと、ここに居てもいいんだいつも思うことができる

地霊殿に来て良かった、皆と出会えて本当に良かった

俺は少し気恥ずかしくなり、そっぽを向き苦笑いして誤魔化する

「あ、蒼鶯照れてる！」

「これは意外な一面ね」

うるせえ、俺だって恥ずかしいと思うことくらいあるんだよ！

別に照れても寿命が縮まる訳でも年を取る訳でもないんだから、

ほっとけー!と声に出したかったがあまりにも恥ずかしいので心の中で叫ぶことにした

「ふふふ、蒼薦さんは私という存在をお忘れのようですね」

「ああああああああああああああああああああああああああ!」

「ねえ、もしかして蒼薦心で何か言ったの?」

「さとり様、是非話してくださいよ」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!やめてええええええええええええええええええええええ!!」

俺は笑顔で話をしたくてうずうずしているさとり様を全力で止めに入った

……それにしても何か忘れている気がするのはなぜだろう?

「蒼薦さんは、ぷくく…!」

「油断も隙もないな、この覺妖怪様!」

そんなことよりも俺の赤っ恥黒歴史が暴露されることだけは阻止せねば!

四／人生何でも上手くいくという考え始めたのはどこの誰でしょうね!？」

勇儀さんが地霊殿に到着したのは俺が旧都に行った翌日となった

「なんで昨日来れなかつたんですか!？」

「いや悪い悪い、酒飲んでから行こうと思ったんだけど寝ちまつててさ」

なんてことだ、まあ来てくれないよりは遙かにマシだが…

昨日の食事はキッチンが使えないせいで本当に大変だった…

おくうが「昼ごはんは人里の団子屋がいい!」とか言い出したため、俺はわざわざ人里まで五人分の団子を購入して来た

始めは皆で行こうと思っていたのだが、さとり様が「流石に妖怪がこんな大人数で人里に入る訳には…」という一理ある理由ができたので、唯一の人間である俺が人里まで行ってきた

…一人納得せずに、うにゆうにゆうっている奴もいたがその辺は俺のスルースキルが働き何とか大きな騒ぎにはならず済んだ

そして晩飯は地上の夜雀、ミステリア・ローレイの屋台に皆で行くことになった

店主が妖怪なので妖怪でも行ける屋台として一部では評判である  
たまに人里の人間も訪れており、八目鰻が名物で俺も美味しく頂いている

その後、べろんべろんに酔ってしまったさとり様達を連れて帰るのに苦労したため俺は今少し寝不足気味である

そして現在に至る

今起きているのは俺のみで他の皆はまだ眠っている

昨日の酒がよっぽど効いたかのように思われる

俺はそこまで飲む方ではないので勇儀さんと一緒に飲みに行った時は本当に死ぬかと思った…

「にしても、何をどうしたらキッチンがこうなんるだ?」

「…そこんとこあまり聞かないで下さい」

「お、おう」

何故か勇儀さんが申し訳なきそうにこちらから目を逸らす  
俺だっておくうがメガフレアを使っただけでこんな酷い惨劇にな  
るなんて夢にも思ってみなかつたのだから

一応俺も勇儀さんの手伝いをする事になっている

コンロは本当に駄目になってしまったっばいので作り直しとい  
うことになるだろう

一応作り直せなくはないが、この際にとりにグレードアップを頼  
んでもいいかなと思ったりもする

「じゃあ勇儀さん、始めますか」

「そうだね」

俺たちは早速今は眠っているおくうが滅茶苦茶にしてしまった  
キッチンの修復に取り掛かった

※

「うお〜い、蒼蔦ウ〜酒エ〜!」

30分後、星熊勇儀、地霊殿のキッチン（半壊）にて酔い潰れる

いや、そもそも何故こうなったか説明が必要かもしれない…

俺と勇儀さんは何の問題もなくそれぞれ作業を行っていた、それ  
でこれまでにないほどスピーディかつ効率的で、もしかしたら今日  
中で終わるんじゃないかね？的な雰囲気すらも出ていた

勇儀さんは八割以上全焼してしまった壁を、俺はコンロの修理と釘  
打ちなどの細かい作業を行っていた

ここまでは順調だった、そう順調だったんだ！

大事なコトなので二回言ったからな！

そこで俺の一言が悲劇の引き金となってしまった…

「勇儀さん、そろそろ休憩しませんか？」

「え、もうかい？私はまだまだいけるけど」

「人間と鬼と一緒にしないでくださいよ」

「じゃあ蒼蔦は休んでなよ、私は続けるからさ」

「それも何かな…」

「お、中々正直じゃん」

「というより、目の前で女性が働いてるのに男が休むわけにはいきませんからね」

「へえ、そりや口説いてんのかい？」

「なんでそうなるんですか……」

「まあ、いいか、確かに休みは必要だしな」

「……勇儀さん、それ何ですか？」

「酒」

「ここに来るまでも飲んでたんですよね!？」

「あれくらいじゃまだまだだよ、ほら蒼鶯、あんたも飲みなよ私が注いでやるから」

「はあ、では一杯……」

そして現在に至る

勇儀さんがあまりにも飲むものだから昨日ついでにミスティアの店で大量購入した酒もほとんどなくなってしまった

……しかもこの人、いつの間にか眠ってるし

俺はこのままでは作業が進まないと思い一旦キッチンから出て部屋に戻り外出の準備をする

行く場所はミスティアの屋台とにりの工房、恐らくこの時間帯ではミスティアが店をやっているかはわからないが酒を少しだけ分けてもらえたら嬉しい、もし駄目ならば人里か旧都で買ってでもいいだろう

そしてキッチンを修理している間に河童の技術を色々借りて外の世界の電化製品を出来るだけ再現したいという願望もあった

ついでと言ってはなんだが香霖堂に寄るのもいいかもしれない

しかし、勇儀さんをあのままにしておく訳にもいかないのでさとり様がお隣が起きてくるのをリビングで待つことにした

※

しばらくして、さとり様がリビングに下りてきた

「おはようございます、さとり様」

「おはようございます蒼鷺さん、昨日は迷惑をお掛けしたみたいで・・・」

「いやいや、そんなこと全然ないです「蒼兄ー！おはよーーー！」ぐるブフォオーす!!」

蒼鷺さーん！というさとり様の声がリビングに響き渡る中、俺はソファと一緒に倒れることとなった

それにしても何かが飛んできた様な・・・

「蒼兄、私のこと見えてる？」

「あ、ああ、おはようございます、こいし様」

「私に敬語やめてって何回言えばわかるの、もー」

悪い悪い、と俺はさとり様の妹である、古明地こいし（こめいじこいし）様の頭を撫でる

薄い緑の髪に黄色と黒を基調とした服に、目を閉じた青い第三の目、今は室内だから被ってはいないが黄色いリボンのついた黒い帽子を被っている

そして俺のことを蒼兄と呼んでいる

彼女は容姿こそは幼いが、中身は俺よりも恐らく年上であろう

さとり様しかり、妖怪なのだから

「・・・ 蒼鷺さん、聞こえますよ」

「悪気があったわけじゃありません、すみませんでした！」

俺は心の声を聞かれました、さとり様に人類の最終兵器DOG

EZAを繰り出した！

「そういえば蒼兄、どこか行くの？」

「ああ少し知り合いに会いに、ってこいし様？どうして帽子を被ってキラキラした瞳でこちらを見ていらっしやるのでしょうか？」

「私も連れて行って！」

頼まれてしまった・・・

普通であればイエスと答える所なのだが、こいし様と一緒に出かけると財布の減りが早いなだね・・・

だから、



「だが断る！」

「うえーん、うえーん、蒼兄が怒ったー」

「…蒼鳶さん、まさかあなたがこいしを泣かすようなゲス野郎でしたとは…」

「ちよ、待つ、違、え？こいし様、それ嘘泣きですよ？本当に泣いてなんかないですよ！そしてさとり様、どうかそのスペルカードを仕舞ってくれないでしょうか？」

「…チッ」

さとり様が今までに見たことないくらい恐ろしい形相で小さく舌打ちをした

こいし様もこいし様でニヤニヤしながらこっち見てるし…

「わかりましたよ、一緒に行きましょう」

「蒼兄ー、早く早く！」

「何でこいし様、あなたはもう既に地霊殿の敷地外にいるんですかね!? あ、それとさとり様、キッチンで勇儀さん寝てるんでよろしくお願ひします！」

俺はさとり様に勇儀さんを任せ返事も聞かずにこいし様の後を追った

…これじゃあどつちが出かけると言い出したかわからないな

五／地底の正しい歩き方なんてものはない！

地霊殿を出発して五分と少々、俺とこいし様はひとまず旧都に向かうことにした

特に理由はないのだが、強いて理由を言うならば必要物資の調達である

地霊殿からある程度の物資は持ってきたとは言え、キッチンが半壊したせいで非常食も殺られてしまったらしいので、もしもの時の非常食を購入しなければならなくなった

なにせ地上は妖怪やら妖精やら人外やらがウヨウヨしているような場所だから何が起こるか分かったモノじゃない！

いくら中途半端なサイボーグと言えど元は人間だから、基本的には人間と同じである

そして地上は灼熱地獄のある地底よりも温度が低いのでカッターシャツの下にTシャツを着ているというどうでもいい情報も伝えておこう、ついでに少し大きめのバッグも持っている

…… 全く、この頃俺は一体どこと交信しているのだろうか

「蒼兄、どうしたの？」

「いや、何でもない」

どうやら心配をかけてしまったらしいな

どうやらこいし様は昔、第三の目を閉じてしまったらしく、さとり様のように心を読む力がない

その代わりに覚妖怪としてではなく、古明地こいしという一人の少女に与えられた「無意識を操る程度の能力」なるものが覚醒したらしい

ちなみに俺には程度の能力と呼ばれる力はない

いや、覚醒していないという方が正しいのかもしれない

さとり様が言うには、個人差があるらしく目覚めないまま一生を終えるものもいるくらいらしい

俺はサイボーグだから今まで何とか能力なしでやっていけたが、それでも異世界に流れ着いたのだから能力的な何かは男ならば一度は

思うはず、何故なら俺がそうだから！

「……蒼兄、さつきから変な顔してるよ永淋に診てもらえば？」

「こいし様、それは俺にしばらく帰ってくるなど言ってるのか？」

「ううん、その悪人面を整形してもらえば、って言ってるんだよ」

「人の気にしてることを笑顔で言うのはヤメてもらえませんか!?」

こいし様はきよんとする

流石「無意識を操る程度の能力」の使い手、悪意ゼロの無意識で俺の心配をしてくれたようだ

……これを心配と受け取っていいのかも疑問だが

こいし様はそんな俺の思考に気付く気配もなく、トコトコと俺に付いてくる

本当、無邪気な所は見た目相応の子供らしいのに幻想郷ではそんな常識は通用しないんだよな……

こいし様も妖怪だから俺よりも長寿に違いない

しかし年齢のことに触れるのは女性に対して失礼なので誰も聞くことができないのは明確である

「蒼兄、旧都が見えてきたよ、ついでに朝ごはんも食べて行こうよ」

「そうだな、確かに朝飯はまだ……」

そこで俺は気がついてしまった

地霊殿ではいつも俺が朝昼晩と三食を作っていたこと、今はキッチンが壊れており使用不可能だということ

「……まあ、いいか」

今は（酔い潰れてしまってるが）勇儀さんもいるし、何とかなるであらうと信じたい

それに念のために余り物を少し置いてきてあるし大丈夫だろう

「こいし様は何が食べたいんだ？」

「ラーメン！」

「幻想郷にあつたっけ!？」

俺はこいし様を追いかけ、旧都に向かって走って行った

※

「本当にあつたよラーメン屋…」

数分後、俺とこいし様は旧都にある明らかに人が通るような道ではない路地裏の一角に恐らくスキマ妖怪の仕業により幻想入りしたラーメン屋の屋台があつた

ていうかどうしてこいし様はこんな知る人ぞ知るを通り越して知る人いるの？というような場所を知っているのでしょうか？

大方散歩している時に見つけたというのが正しい答えなんだろう

…：… それ以前に朝からラーメンを食べることになるとは思わなかつた

俺とこいし様は席に座り、店主を呼ぶためにあるだろう鈴を鳴らす「いらつしやい、何食うんだ？」

…：… 店主の接客態度に少しだけ文句を言いたい、何だろうな、客が来やがった的な顔で一瞬舌打ちをされた気もする

「塩ラーメンと醤油ラーメンで」

「へいへい、一人で二つも食うのかよ、しかも違う種類を」

「まあな、こう見えて大飯食らいなんだ」

まあいいけどよ、と店主は舌打ちを一つして奥で調理を始める

俺と店主の会話で気がついた人はいるかもしれないが、店主にこいし様の姿は見えていない

こいし様の「無意識を操る程度の能力」は他人の無意識に存在するというのが能力の本質であるため、こいし様を意識していないとこいし様の姿を確認することはできない

俺もたまにだが姿を確認できないことはある

この能力は意図的に発動するものではなく、自動的に発動しているものなので、こいし様の意思で能力を解除することもできない

だからこそ彼女は盗みやら、食い逃げやらを平気でしている

このラーメン屋も被害にあつたのかなー、と少しだけ遠い目になる「こいし様、醤油ラーメンで良かったか？」

「うんー」

俺たちは少しの雑談をしながらラーメンを待った

店主に独り言が多いと軽蔑の眼差しも向けられたがこいし様の姿

を確認できていないならば仕方ないと思い苦笑いで誤魔化する

あと、このラーメンは結構美味しかった

店主とも仲良くなり、また今度来ると店主と約束をし屋台を後にした

さて、準備も済んだことだし地上へ向かいますよね

六／人の短所は笑うもんじゃない、いつかイジメに繋がるよ！

どうも、こちら地霊殿です

そして私はこの地霊殿の主でこいしの姉である覚妖怪の古明地さとりで

蒼菫さんとこいしが外出してしまったので地霊殿の様子は私が伝えることになってるようです、よろしくお願いしますね

… 私は一切誰に説明しているのでしょうか？

蒼菫さんといい、最近どうも変なモノを受信してしまいますね…それはそうとどうして勇儀さんがここにいるのでしょうか、しかも酔い潰れてますし…

なんだか声をかけにくい状況ですね、お隣もおくうも起きてこないですし、ペット達の朝食も蒼菫さんがあげてしまったみたいですし…

本当、あの人が来てくれてから私も色々と助けてもらってるみたいですね、半年しか一緒に生活していないのにいつもいるところも長い時間を感じられてしまうのは本当不思議なものです

「んあ〜？蒼菫？」

キッチンの方から勇儀さんの声が、どうやら起きてくれたようですね

「おはようございます」

「ん、さとり？蒼菫知らないか？」

「蒼菫さんなら先程こいしと出掛けましたよ」

「なんだとー!？」

「ひいつ!？」

勇儀さんが突然叫んだせいで私は思わず驚いてしまいました

勇儀さんはまだ酔いが覚めたわけではないようで、ほんのりと頬が赤く染まっている気がしますね

「あいつ、今日は一日私と飲み明かすって約束を破るつもりかア！さ

とり、あいつは一体どこに行っただんだア!!」

「そ、そんなことを言われても...」

私にそんなこと聞かれても困りますよ!

蒼鷺さんは行き先も告げずにさっさと行ってしまったんですから!

ていうか、蒼鷺さんは勇儀さんと一体いつそんな約束をしたのでしよう、多分旧都に行ったときだと思いますが帰ってきたら問い詰めなければ!

勇儀さんは私に聞いてもわからないと判断したのか、私の肩を離し酒を飲み始めました

そこで勇儀さんの心の愚痴が私に聞こえてきました

私の能力「心を読む程度の能力」が発動したようです

別段聞こうと思つて聞いたわけではありませんが、勇儀さんがここにいる理由がわかるかもしれないということに聞かれました『くそ、あいつキッチンの修理はどうすんだよ!手伝ってくれるんじゃないのかよ!今日は一日二人で過ごすことじゃないのかよ、全く本当にどうしてくれるんだよな!私に一人で修理しろと言うのかよ、それはさすがに無理だから手伝ってくれるって話になってたはずだ!フッフッフ、鬼の私に嘘を吐くとは本当いい度胸だ、帰ってきたら覚えときなよ!』

..... 蒼鷺さん、早く帰ってきてください

どうやら勇儀さんは蒼鷺さんにキッチンの修理を頼まれて来たようですね

べ、別に安心なんてしてませんから!

ただ私は、そう!この地霊殿が勇儀さんの暴走でただの木片にならないことを祈りながら蒼鷺さんの帰宅を願っただけですから!

ん?まだ愚痴が続くようですね?

『ホント、蒼鷺もあんな貧乳のどこがいいんだ!ロリコン、ペドファイリア!戻ってきたら私が全力で体で語ってやる!』

え、ちよ、勇儀さん?

『よく考えたらあいつの周りつて八咫鳥以外皆小さい奴らばかりじゃ

ないか、まさかあいつ本当に小さい方が好きなのか!?だとしたら無理矢理でもその考えを…』

「……………」

この後のことは私の記憶にはありませんが、顔が真っ赤になった状態で倒れていたそうです

フフフフ、蒼菫さんに問い詰めることが一つ増えたようです、覚悟しておいてくださいね!

※

ゾワツ!

「どうしたの蒼兄?」

「わ、わからんが何か悪寒が…」

旧都から出た俺とこいし様は地底から地上への続く道のある所へ徒歩で向かっている途中、何やら凄まじい邪気に当てられた気がするが気のせいだと信じたい

地底から地上へ出るのは難しいことではない、空を飛べればの話だが

この幻想郷では大抵の者が空を飛ぶことができる

勿論、こいし様もできるが俺はできない

一応人間にも霊力なるモノが体に宿っており、それを応用活用することで空を飛べるらしいのだが俺にはその霊力が常人よりも遥かに少ない

これは体が半分機械のサイボーグのせいと妖怪の賢者に一度言われたことがある

だから俺は…

「蒼兄、早く早く!」

「ちくしょう…いつか絶対に…俺は空を飛べるようになってやる!!」

ロッククライミング方式で地上へと続く壁を全速力でよじ登っていた

灼熱地獄の近い地霊殿や旧都のある場所は第二層目となっており、





イミングしてる俺に落ちてくるのはやめろ！」

「そっか、鍔は確か空飛べないんだったんだね」

「この腹黒桶妖怪が！」

「む、腹黒は認めるけど私は桶妖怪じゃないよ、私は釣瓶落としての妖怪キスメだよ！」

「どっちでもいいわ！」

先程から俺と口論しているこの自称釣瓶落としての妖怪キスメは地底に住人である一人である

まあ、鬼火を落とされるよりかは遥かにマシだが何か釈然としない！

彼女は始めもつと無口で人見知りするような妖怪だったはずなのに、俺に落ちてきたことをキツカケによく会うことが多くなり、今ではこんな腹黒少女にまで成長してしまった

まあ、彼女も一応妖怪なのだから案外こちらの方が本質なのかもしれない

「そういや今日はヤマメと一緒にじゃないんだな」

「ヤマメは最近会ってないよ、永遠亭の兎に捕まって以来ね」

「……それは会うことはないわな」

俺は苦笑いを浮かべるのに対してキスメは何故か笑顔である

友人があ的那天医師によって実験台にされてるかもしれないというのに陽気なモノである

「それよりどうしてくれるんだよ、また登らないといけないじゃねえか！」

「また登ればいいじゃない」

「簡単に言いやがった！」

「それじゃあね〜」

「あ、テメエズルイぞ！待てコラ、その糸引き千切ってやる!!」

俺はどこに繋がっているかわからないキスメの桶についた糸に毎回疑問を抱いてしまう

落ちて来るたびにあの糸で上に再び上がっているようなのだが一体全体どういう仕組みなのか理解することができない

俺はキスメを追いかけてもう一度壁を登り始めた

……無事に地上にちゃんと行けるかどうか滅茶苦茶不安になつてきたな

この調子で大丈夫か、地霊殿にちゃんと帰れるかな？

「俺はいつか絶対に空を飛べるようになったや  
るウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

俺が叫んだ瞬間、キスメが青ざめた表情でこちらを見ていたのはそれはまた別の話……

「蒼兄、まだかなく……はあく」

七ノ人の話はキツチリと聞きましよう、大切なコトを聞き逃してしまいますよ！

キスメの妨害を受けつつも何とかこいし様の待っている上層に辿り着いたのはあれから約一時間半後のことであつた

勿論こいし様のご機嫌はこれでもか！とばかりに悪く、こればかりは俺にも非があるので反論することはできない

俺を妨害した当の本人は既にどこかへ消えてしまったわけだし…

「ちよつと蒼兄、聞いてる!？」

「はい！申し訳ありませんでした！」

「絶対聞いてなかつたよね、そのごめんなさいは多分私の話を聞いてなかつたことに対するごめんなさいだよね！」

「何でそうなるの!?!いやイヤイヤイヤイヤイヤ、俺はこいし様をこんなトコに一人で待たせて本当に悪いと思って…」

「嘘だツ!!」

「嘘じゃねえし!!」

…… どうやら俺はとんでもない誤解をされているらしい

こいし様は変なトコで頑固な人だからこれは前途多難な感じがまだ地底から出てすらもないのに感じられる、しかもこのことがあのこいし様 LOVE のさとり様にばれてしまった暁には……

『そ・う・た・つ・さん♡こいしをいじめるなんてどういうことでしょうか? ホント、蒼蔦さんには困ってますね、フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ…♡』

…… 死亡フラグが立ってしまった

何てことだ、まさかたつたの七話目の冒頭早々に避けられぬ死亡フラグを立ててしまうことになるとは、話さなければバレないとかそんな甘い考えはとりあえず捨てなければならぬ!

なぜならばこいし様がこのことを話せばアウトだし、さとり様に心を読まれてもアウトだ…

しかも前者の方が威力百倍になりそうで余計に怖い、妖怪の怒りに

触れぬように気をつけろ！という教訓はここに来て嫌という程学んだ筈なのに俺は同じ過ちを繰り返してしまおうとでも言うのか！

しかし今回に至っては完全にキスメが悪い！

そうだ、キスメが悪いんじゃないか！なのにあいつは…

「鍔々さつきから何一人で叫んでんの？うるさくて昼寝できぶるへえい!？」

背後から話しかけてきてくれたので鋼の右ストレートをブツ放ちました☆

後悔していなければ悪意もない、突然背後から現れるキスメが全て悪いんだから！

俺は今自分でもわかる、俺は今までにないくらい美しいドヤ顔になっっているに違いない!!

「……蒼兄、物凄いゲスイ顔してて怖いよ」

……訂正、美しいゲス顔でした

※

「ホント申し訳ありませんでした」

俺はキスメを桶から下ろして土下座させている

全く、仮にも妖怪とは言えど見た目少女のキスメに土下座をさせるとは、俺も成長したもんだよな

流れ着いた当時はこんなこと平気でできなかつたが今ではできてしまう

劇的ビフォーアフター、何か悪い方向に変わってしまったのは気のせいだ、断じてそんなことはない！

幻想郷で生き抜くには必要不可欠なスキルだからな！

何故ならばこの幻想郷、何故かはわからないがやけに女性の比率が高いのだ、博麗の巫女しかり妖怪の賢者しかり白黒の魔法使いしかり永遠に幼き赤い月しかり冥界の亡霊姫しかり月の頭脳しかり熱かい悩む神の炎しかり自称毘沙門天の生まれ変わりの虎しかり山の神しかりなど、幻想郷に必要なのはパワーバランスなどではなく男女バランスが非常に大事だと何回思ったことであろうか！

ホント霖之助とは男同士でできる話があるから彼の存在は俺の中では大きいモノであり彼の存在が俺のここでの生活の支えになっていると言っても過言ではない！

……別にホモとかそんなんじゃないやねえぞ

「鍔、いつまで私は桶から下りてたらしいの!?!そろそろ桶に戻らないと禁断症状でウズウズしちゃうんだけど!」

「一生戻るな」

「まさかの選択肢!?!」

「蒼兄、流石に酷いんじゃない?それって蒼兄と私が一緒に寝るなって言ってるみたいなものだよ?」

「何しれつとありもしない出来事を言っちゃってるのかな、そんなにらいじや禁断症状は起きないから大丈夫です!」

「そんなことないよ、ほら体が震えて……」

俺のこいし様への返答を何故かキスメが受け取った

もしやキスメはこいし様を意識していない、つまりこいし様はキスメの無意識下に存在している……

つまり俺はキスメと二人で会話しているように映るわけか……

こいし様もそれをわかってやっているようで舌を出して「テヘペロ☆」とか言ってるし……

こいし様のテヘペロ☆はとりあえずスルーするとして、キスメの禁断症状はどうやらマジな方らしい……

「わかったよ、さっさと戻りな」

「え、私に地霊殿に帰れって言うの!?!」

「どうしてそうなるの!?!」

今度はキスメに言ったつもりがこいし様が受け取ってしまった

「ありがとね鍔、あと本当にごめんね〜じゃね〜」

「おう、気い付けて帰れよ」

キスメは桶に戻り、お礼と謝罪をしてどこかへと行ってしまった  
全く、あの糸は本当にどこに繋がってるんだか……

「そ、そんな……蒼兄……えぐっ」

……何やらとんでもない状況になってる気もした

「蒼兄と、蒼兄とお出かけできると、思っでだのに…！」  
「あ、あの…こいし様、どうなさったのでしょうか…？」

「蒼兄が、気をつけて帰れっ、て…。」

「いや、アレはキスメに言ったことでこいし様に言ったのではなくて…。」

「だつて、その前にも蒼兄がさっさど、戻れっでえ…。」

「それもキスメに言ったことツスよ、何でこいし様は」  
「う」

わああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ん!!」

…… どうしてこうなったのでしょうか

俺はどこをどう間違えたんだ、このままでは本当にさとり様に殺されかねない！何とかしなければ！

「こいし様、とりあえず俺の話を聞いてくださいー！」

俺は必死にこいし様に話を聞いてもらおうとするが、こいし様は泣きながらポケットから一枚の紙を取り出して構えの体制に入った

…… え、ちよっ、待つ、それって！

深層「無意識の遺伝子」

やはりスペルカードだった！

スペルカードとは、今代の博麗の巫女が提案した幻想郷の決闘に使われる、いわゆる必殺技である

非殺生設定で必ず避けられるという条件を満たしてさえすればいいという人間と妖怪の力の差を埋める為に作られたものらしい、って俺は一体誰に解説してんだー!?

しかもこんな余裕あるんだつたら避けるんだつたー!!

「蒼兄のバカー…。」

「グゴボゴボゴボゴバアホオ!!」

俺はこいし様のスペルを全身に浴び気を失った

ていうかこの威力で非殺生とか確実に嘘だろ、今度博麗の巫女に抗議してやると心に誓った瞬間であった

八／偶然という言葉ほど、恐ろしく恨めしいモノはない！

「……どっかだっか？」

俺はまだハッキリしない意識を無理にでも覚醒させ、上体を起こす  
どうやら木造小屋の一室らしい、辺りの雰囲気からして間違いはないはずだ

しかしこんな場所に覚えがない上に俺は何故フカフカの白いベッドの上で寝ていることすら理解することもできないというのに……！

よし、思い出そう！

まず俺は勇儀さんをさとり様に任せて地霊殿の食糧補給の為に人里へ向かうべく地上へと向かった、しかし地上に行く前に旧都で少し寄り道してラーメン食って店主と仲良くなって旧都を出てロツククライミングしてキスメの妨害に合ってキスメを説教して気絶……

あれ、何か大切なことを忘れてる気が……

この感覚は過去何度も体験したことがある、そして思い出すために……

鞆から財布を取り出し中から一枚の写真を取り出す

この写真は身肌離さず常に持っている、彼女を意識下に置くために必要なアイテムだからだ

「……そうだ、俺はこいし様のスペルカードを全身に浴びたんだ」

俺は意識をハッキリとさせる、俺はあの時こいし様の一応非殺生機能らしいスペルカードをモロに受けて意識を手放したんだ

そういえばこいし様はどこに行ったのだろうか、この小屋がまず何なのかをハッキリさせたいところであるがこいし様の安否の方が心配になる

こいし様も俺以上の力を持つ妖怪で本来ならば俺が心配される側なのだが、容姿が幼いので母性本能というか何というか、男のプライドがアドレナリンを刺激して心配せざるを得なくなってしまう



……あと一つ言っておきたいが俺は決してロリコンではない、ついでに言えば変態と書いて紳士と読むクレイジーな考えも下心も持ち合わせていない！

性的欲求はないこともないが半サイボーグ化の影響で思考回路が少し普通の人間とはズレてるトコロがあるらしい、よって俺の性的欲求も常人よりも少ないらしいが細かいことはよくわからないのが本音だ

まあ、こんなことを言う奴に限ってそんなことばかり考えてるとか言われるが俺はさとり様のお墨付きなのでそこいらの男とは違うのだ！

そんな訳で俺はこの部屋の唯一（後ろに窓があるのだが残念ながら俺はその存在に気がつかなかった）の出口である扉のドアノブを捻るそのまま廊下に出て一つの扉を開く

そして俺は一秒後、この世界に生まれてこなかったらよかったという程の後悔を味わうこととなる

ガチャリ、と扉は静かに俺の手によって開かれる

部屋の中には一人の少女がいた

少し薄めの金色の髪に人間にしては少し長い、例えるならばエルフのような耳を持つ少女……

俺は彼女を知っている、というか顔見知りだ

水橋パルスィ（みずはしはるすい）という橋姫という妖怪に分類される

地上と地底の狭間に住んでおり何かと嫉妬心が人一倍強い彼女に絡まれたら中々会話が終わらないとの認識もある

しかし、今重要なのはそこではない

彼女の身体に問題がある、彼女は普段はたしてあれほど露出度の高い服を着ていただろうか、彼女の肌がこんなに目に焼き付くことがあったらどうか

さて、現実を見よう……

「……………」

パルスィの顔が真っ赤になってしまっている、恐らく俺の顔も真っ

赤になってしまっているだろう

その前に俺は彼女の右手に握りしめられている刃物の方が気になつて仕方ない

「ちよ、待つ、待つてて！ 不可抗力だ、何かの間違いだッ!!」

「ふ  
にゆ

ああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!」

「ブホオッ!?!」

全力で左の平手打ちを頬にくらいました

※

「全く、人の家を自由に歩き回るなんて信じられない上に妬ましい  
い…。」

「蒼兄、どうやらまだ反省してないみたいだね?」

「待て、まずは俺の話聞いてくれないか?」

『ヤダ』

「たった二文字で断られただど?!」

どうやら俺に発言権はないらしく、こいし様とパルスィは勝手に話を  
を変な方向に進めていく

どうやらこいし様もここに來ていたらしくパルスィの悲鳴を聞き  
つけてきたら右の頬に綺麗な紅葉柄の模様をつけて倒れた俺を発見  
するや否や突然袈裟固めで俺の関節を封じてきて全身が少し痛い…

ホント、俺が一体何をしようのだろうか…

「で、何であんなトコで倒れてたの?」

まだ顔が若干赤いがパルスィはどうやら機嫌を直してくれたらし  
く、俺に尋ねてくる

どうやら彼女が発見してくれたようだ

「ああ、それはこい【ギロリッ!!】…疲れて座ってたらそのまま寝て  
しまつてたんだ」

「… 貴方馬鹿でしょ?」

「もう何とも言えよ!」

俺はとりあえず叫び喚く

だって事実を言おうとしたらこいし様が今までにないくらい怖い顔でスペルカード構えてるんだもん!

畜生、こんな理不尽なことはない!

「…… ホントにどうしたの、あれ」

「さあ、わかんない!」

「この、確信犯が……!」

俺は怒りのあまりにこいし様を殴ろうとしてしまいがパルスイに全力で止められる

確かにこいし様のイタズラは無邪気で可愛いモノが多いがそれでも許しておけないモノくらいはある!

…… そういえば

「パルスイ、お前こいし様が見えてんのか?」

「ええ、普通に」

パルスイはきよとんとした表情になる

何か、何当たり前なこと言ってるんだコイツ? 的な顔が地味にうざいのは置いておこう

「パルスイとはよく散歩の時に会ってるからね!」

「こんな場所まで歩き回ってたのかよ!」

「一番遠くで迷いの竹林かな?」

「そんな遠く行くなら地霊殿にいろよ、さとり様いつも寂しそうにお前の帰り待ってたぞ!」

「え、蒼兄そんなこと思ってたの?」

「なんでそうなるの、俺さとり様がつてちゃんと言ったよね!」

「ごめん、よく聞こえなかった」

「どんな耳してんだよ!」

俺はこいし様の都合がいいのか悪いのかよくわからない耳に思わず突っ込んでしまうが後悔はしていない

実際さとり様はこいし様に少し依存というか心配してるところもあるんで、そのことで俺によく酒を持ってきては愚痴るため正直こいし様には地霊殿に居てもらいたい、今も誰かに愚痴ってるかもしれない

いが…

「ホント、あんた達って仲がいいわね、妬ましい…」

パルスイは小声で頬を少し赤く染めて呟くも俺もこいし様も彼女の声を聞くことはなかった

……… ていうか俺たちには買い出しの為に人里に向かうって目的があるんだが、こいし様は覚えてるんだろうか？



ていたので本当に「リア充」とかに分類されている奴らとは毎年戦争をよくしたものだぜ

「蒼鷺、今日は苦理厨魔厨だよ!」

「その台詞は二回目だ、この鳥頭!」

「うにゅにゅ!!?」

何やら驚愕に満ちた表情で衝撃を受けてやがる、何だその劇画タツチ風の顔…

ん、そういえば…

「確かクリスマスって鳥肉を食べる日でもあるんだよな」

「…え?」

「俺もうろ覚えなんだけど、皆で輪になって鳥を囲んで火を起こして丸焼きにして部位を切り刻んで美味しくいただく鶏の虐殺日とか、つてどうしたんだおくう?なんで涙目でこつち見ながら制御棒出してエネルギーチャージしちゃってんの!」

「…蒼鷺は私を食べるの?」

「ああ!そういうことか、いや違うぞ違う違うあくまでもクリスマスに食べるのは鶏であって鳥は」

「それでも私は立ち上がる、苦理厨魔厨という厄日から鶏達を守るために!!」

「何かっこいいこと言ってるんだよ、それで何で怒りの矛先が俺なの!?!クリスマスのこと教えてもらったの早苗だろ、だったらあいつにメガフレアを打つべきじゃないのか、あいつはもう山の神達と鳥肉を美味しく食べ始めてる頃かもしれないぞ!!」

「…!!」

おくうがカツ!と目を見開き、俺の部屋の窓を制御棒で盛大に殴り、

「苦理厨魔厨の平和は私が守る!!」

とか言ってるどこかへ飛んで行った

…何か言っている内容が若干矛盾していた気がするが、そこはおくうなのでスルーすることに決めた

※

俺はおくうに部屋の窓を破壊され熱さが直接入ってくるのに耐えきれなくなり若干涼しいリビングに移動した  
そこにはさとり様とお燐が、

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおら、さっさと進めやコラ、今夜中に仕事を済ませなければならぬのだぞ!!」

「すみませんすみません、急ぎます、急ぎますので鞭はご勘弁を。…」  
「フォーフォー、フォーフォ、口答えする暇があるならさっさと進まなかーい!」

「はいいいいいい!!」

…… ええつと、何コレ？

リビングの扉を開けた先に見えた光景は赤いパンクファツションと帽子を被ったキャラ崩壊等では既に修復不可能なテンションになってしまっているさとり様と四つん這いに這いずり泣きながら鞭を打たれているお燐の姿があった

何やら入ってはいけけない雰囲気か漂ってしまったっており、入るのを躊躇っていると…

「お姉ちゃん、頼まれてたもの買ってきたよー!!」

後ろから無邪気でいつもと変わらぬ無邪気な可愛さのあるこいし様が扉をスパーン!と開け放った

ホント、こいし様の無意識は変なところで働くトコロがあるものだし、しかし、こいし様もやはり、

「…………… お姉ちゃん?」

「…………… そ、蒼鷺さん?」

「…………… あ、いや、これは」

うわ、気づかれた!

さとり様顔めつちや真つ赤じゃん、そんなに恥ずかしいならするなよ!

こいし様もこいし様で呆然としちゃってるし!

…………… お燐に至っては顔真つ赤ってレベルじゃない、全身真つ赤だ

恐らくあの変態天人と同じ趣味を持っていると思われたのが最大の屈辱なのだろう

「……こいし様、戻りましょうか」

「……お、お姉ちゃん、また後でね」

俺たちはリビングの扉を静かに閉めた

『こ、これには訳がー！ー！』

断末魔の叫びがリビングから響いた気がする

俺とこいし様はとりあえずリビングに戻ることにした

「今日は栗守升って聞きましたので」

「……何でも当て字にすればいいってモンじゃねえっすよ、誰からそのこと聞いたんスか？」

「勇儀さんが『食離須麻州って言うのは赤い服着た王女様が奴隷を鞭で打つ行事』とおっしゃっていたので……」

「どうやったらそんなことに!？」

「あ、あたいは無縁塚で偶然会った小町から『愚利酢麻素って言うのは四つん這いになった獣が空を走る競技』って聞いたから……」

「だから、何でそうなるわけ!？」

俺は頭を抑えながら涙を流す

外の世界を生きる画面の向こうの皆さん、どうやら幻想郷のクリスマスはそちらの世界よりも腐っているようですぜ

「蒼兄、じゃあクリスマスって何なの?」

「ありがとうございます!」

『何が!？』

俺は嬉しさのあまりお礼を言ってしまふ、何せ今日初めて正しいクリスマススの文字を見ることができたのだから!

「簡単に言おうと、モミの木に飾りして家族で美味しい飯食って、サンタクロースっていう赤い服着たおじさまがトナカイの引くソリに乗っていい子にプレゼント配る行事かな」

俺はおくうに言ったことと新たに説明を加えた

「お憐、今すぐ地上からモミの木を!こいしは私とここで待機、蒼薦さ



んはおくうの搜索と飾りの準備をお願いします！」

「あいあいさー！」

「ヤル気満々かお前ら！」

どうやら思いの他ノリが良かったらしい、いつの間にか回復したお  
燐に至っては既に出発してしまっている

俺はそれらしきモノが置いてそうな香霖堂へと向かった

…… ついでにおくうの搜索と

※

五時間後……

「蒼兄遅い！」

「全く、いくら空が飛べないとはいえ時間が掛かり過ぎです！」

「ホント、人間はダメダメだね〜」

「蒼蔦蒼蔦、早くやろうよ！」

「悪かった、だがおくう！お前を探して遅くなったからお前に文句  
を言う資格はない、ついでにお燐 teme 途中で俺のこと抜かしただろ  
！お前だろ、あの火車に四メートルくらいの大木持って爆走してた奴  
！」

おくうはきよとんと、お燐に至っては舌を出して手を合わせている  
…… コイツラは

軽く怒りを覚えたがここで怒ってしまえばクリスマスが終わって  
しまうかもしれない

「ツリーの飾りは？」

『もう既に』

「早過ぎだろ！」

驚くもツリーを見るとしつかりと飾り付けされていた、さつき持っ  
て帰ったばかりなのにどうやったらかんな超スピードで飾り付けが  
できるんだ、そこは人間と妖怪の違いがあるかもしれないので突っ込  
まないことにする

「料理は……」

『ロイヤルタワーケーキ！』

「すげエな、オイ！」

『ケン○ツキーフ○イドチ○ン！』

「何故あるんだ!？」

「先程、紫さんがスキマで…。」

「納得だ」

まさか外の世界の超メジャーグルメがここに来て食べれるとは思わなかった!

何だかんだですげエ豪華になってしまったな、地霊殿、恐るべし!

いや、この場合は楽しいイベントであれば平気で外の世界にスキマを繋ぐ紫が恐ろしいのか?

はたまたこれから共食いをするのに気がついていないおくうが恐ろしいのかはわからない

「それでね、蒼兄…。」

「どうしたんだ、こいし様?。」

何やらこいし様がもじもじしながらこちらに声をかけてくる

少々の時間はあったもののこいし様は手に持った包みをこちらに差し出す

「これは?。」

「クリスマスプレゼント!。」

俺はその言葉を理解するのに少しの時間が必要だった、何せその単語を聞くのは実に久しぶりな気がするからだ

すると、

「あたいも」

お隣も

「私からも」

さとり様も

「私も!。」

おくうも

皆、笑顔でこちらを見ていた

「それは私達の気持ちだよ!。」

「いつもお世話になってるし、今日という日を正しく教えてくれたし

ね」

「いつも居候って言葉を使つて私達以上に一人で頑張つてくれますしね」

「蒼薦、ありがとうね！」

俺は言葉が出なかつた

驚きよりも先に嬉しさが表情に出たようだ

「あ、あり、ありがとう、でも俺何も用意できてない……」

「何言つてるんですか」

さとり様はヤレヤレといった様子で、

「今日という素晴らしい日を用意してくれたじゃないですか、サンタクローズさん」

俺はその言葉を聞いた途端、頭が真っ白になつた

俺は本当に嬉しかった、気がつけば涙が流れていた

幻想入りした時に外の世界で過ごした一部の記憶を失つた俺をここに住まわせてもらった彼女達にいつも何かしたいと思つていた、恩返しをしたいと思つていた

「蒼薦さん、あなたはもう地霊殿の一員、私達の家族です」

さとり様は俺の手を取り優しく語りかける

「貴方のいない生活なんて、私達は考えることができません」

こいし様達も笑顔で頷く

俺は家族、という言葉に再び涙を流す、その言葉が俺にとってどれくらい嬉しいことか……

さとり様はですから、と繋げ

「居候を理由に一人で無茶するのはもうやめてください、私達も力になりますから」

「はいー」

俺は涙を拭いて最高の笑顔を浮かべた、皆が笑顔だった

俺達はとりあえず席に座り、ワイン（紅魔館仕入れ）の入ったグラスを手に取つた

クリスマス……

外の世界ではキリストの誕生を祝う祭り、カップル達の聖夜…

「では、今日という聖なる夜に…」

しかし幻想郷、特にこの地霊殿は少し違う

『カンパニー!』

家族の絆を深め、最高の笑顔というプレゼントをする特別な日であつた

その夜以来、地霊殿から家族の暖かい光が消えることは決してなかつた

⑨／知人が多いといいつて言うこともあるけど大半はろくでもないことで終わることが多いんだよね！

よう、俺鉄蒼鳶

なんか久し振りだな、もう何ヶ月も会ってない感じがするのは気のせいかな？

「…蒼兄、何さつきからブツブツ言ってるの、もう人里に着くよ」「おお、そうか」

そう、俺とこいし様は今まさに人里の前まで来ている、え？何か一気に飛んでる気がするって？

じゃあ何か、聞きたいのか？

パルスイの家を出て地上に出た瞬間、外の世界の話題で盛り上がり緑の髪の現人神に絡まれて守矢神徒への勧誘を受けるもバツサリと断ったら涙目でこちらを見つめてきてしばらくしたら文々。新聞の記者に見つかってあらぬ誤解を記事にされるのを現人神と全力で阻止するために協力したり騒ぎを聞きつけた山の神様達が現人神と東風谷早苗に加勢して何故か記者こと射命丸文ではなくこちらに怒りの形相を向けて全力で弾幕打ってきたのをこいし様と一緒に防ぎながら後退して全速力でミスティアの屋台にまで逃げたのはいがミスティアは何故かもう既に酔っ払っており愚痴を延々と聞かされるトコロだったので適当に相槌を打ちながら隙を見て二人で逃亡したら白黒魔法使いに捕まって弾幕勝負を迫られてそこまた偶然通りかかった七色の人形使いが劇画タッチがよく似合う表情を浮かべながらハイライトの消えた瞳をこちらに向けてきて白黒魔法使いこと霧雨魔理沙と俺とこいし様に無差別に人形と弾幕を放ってくるので必死に避けていたら魔理沙がマスタースパークとか言つて俺ごと巻き込んだぶつといレーザー弾幕を放つてこいし様と喧嘩になり収集がつかなくなったところでこれまた射命丸がやって来て場は力オス極まりないことになり更には暗闇と共に人食い妖怪までもやって来たと思えば首のないろくろ首までやって来て更に面倒なことに

なつてしまい俺が一つ一つ片付けるも酔っ払った二本角の鬼に絡まれる前に人里まで全力疾走して疲労困憊とした俺のどうでもいい話をお前は聞きたいのか？

「ねえねえ、そういえば何を買いに人里まで来たの？」

「そうだな、まずどこか座れる店で休んでから一週間分くらいの食事ときゅうり数本と酒樽数個とこれから必要になりそうな生活用品かな？」

「きゅうりと食事は別なの!？」

「きゅうりはこれから使わないといけないからな、きゅうりがなかったらあいつ家にも入れて来れないかもしれないし…」

「… 蒼兄、なんか苦勞してるんだね」

「そうなんだよ…」

俺はどんよりとした雰囲気を出しながら重い足取りで人里へと足を踏み入れた

※

人里の団子屋で小休止を取った俺とこいし様は一先ずきゅうりを買うべく八百屋へと足を進めた

すると、八百屋でどこかで見たとような人物がいるじゃないですか

「… 蒼兄、なんか顔怖いよ」

どうやらこいし様が見る限り俺の顔は怖い部類になっているらしい、しかし不思議だよね笑いが止まらないなんてさ

俺は死ぬ覚悟と命を懸けて、って両方同じ意味だがそんな感じでもりと勢いに任せて、

「よお、PAD長!また今度オススメのワインでも、うおい!」

「貴方の血のワインとかオススメですけどどうなさいますか？」

「す、すみません… 調子乗りました…」

「わかればよろしい」とPA… もとい霧の湖の近くにある紅魔館という大きな屋敷のメイド長をしている人間の十六夜咲夜(いぎよいきくや)は両手に握りしめていた大量のナイフをどこかへと仕舞う

銀色の髪にメイド服というこの人里でもとてもと言って目立つ服

装をしているのだが周りの人々はあまり気に留めない、何故ならここが幻想郷だからだ

しかし、

「ちよつと、蒼兄に何してるのよ！当たってたら死んでたかもしれないじゃないの!!」

「あらこいしさん、そちらの従者さんから喧嘩を売ってきたというのにそれはないんじゃないかしら?」

「……一触即発の雰囲気だけは見逃してもらえそうにない、ほらだつて周りの人なんか俺が止めるとばかりに俺に視線寄せちやつてるし、ていうか何で俺?え、何で、これ俺のせいなの?」

確かに俺も悪いトコロはあつたと思うけどこいし様が気がついたら喧嘩売つてるだけであつて俺関係なくないかな?」

「……畜生、俺のせいなのかよ」

「そうね、あなたが余計なことをしなければ咲夜もあそこまで過剰にならなかつたでしょうし」

「だよなく……ん?」

そういえば俺は誰と喋っているのだろう、声のする方向を見てみると少し低い位置に日傘が見えた

この位置は何となく予想がつくな

「レミリア嬢、まだ太陽出てますよ」

「いいのよ、たまには気分転換つてやつも必要でしょ?」

「は、はあ……」

俺が曖昧に返事するとレミリア嬢は何かあるかのような含み笑いを浮かべる、全くこの人は相変わらず考えていることがよくわからないところがある

さとり様と同じくらいの身長で背中から蝙蝠の翼を生やした彼女こそが十六夜咲夜の仕える主人であり紅魔館の現当主である吸血鬼、レミリア・スカーレット嬢は本来であれば昼間などといった太陽の出ている時間帯に行動することは少ないはずなのだが今日は咲夜と一緒に人里まで来ているところを見ると少し貴重なことなのかもしれない

「それよりさとりは元気かしら？」

「ええ、そちらこそフランドール嬢は元気ですか？」

「…… この間お気に入りソファを派手に破られたわ」

「お、お元氣そうで何より……」

こんな感じで俺とレミリア嬢は何かと苦勞話というか気が合うと  
いうか話をすることが多い

たまにさとり様に会うために地底まで来られる時もあるので何か  
と顔を合わすことは少ないわけでもないのだ

「咲夜、そろそろ帰るわよ！」

「はいお嬢様、今夜こそは私と熱い夜を過ごしましょうね！」

「何でそうなるの!?!それより貴女また私の下着を盗んだんじゃない  
の、一つ柵から消えてただけけど！」

「な、何のことやら……」

「何で鼻血垂らしてるの、もう帰るわよ！」

「ああ、お嬢様、お待ちになって〜」

…… あれでよく完全に瀟洒な従者とかメイドとか言ったモンだ  
よな、本当に

俺は一先ずレミリア嬢がうっかりズッコケて日傘を手放して太陽  
の光で灰にならないことだけ祈った

「蒼兄、何険しい顔してるの?」

「いや、何でもない……」

俺はさっさときゅうりを買ってその場を後にした、何というか居づ  
らかったのが本音である

そんな流れで俺とこいし様は八百屋を後にした



十／何もかも人に責任を押し付ける奴ほど器って小ちやいモノなんだよ！

「だから、私は絶対に帰らないからね！」

「うるさい！今日は蒼鷺と二人で新製品の開発するんだから帰つてよ、まだ誰にも見せてない代物なんだから！」

「じゃあ私と蒼兄がその代物の第一使用者として名前を刻んであげる！」

「き・さ・ま・の、名前前は不要

じゃああああああああああああああああああ!!!」

「……………はあ」

俺は現在、目の前の光景に頭を抱えている、いや本当に頭抱えているよ

片手だけど…

俺と一緒にここまでやって来たこいし様もムキになってるし、俺が会いに来たにとりの奴も何か今まで見たことないくらいとんでもない形相になっちゃってるし…

本当、なんでこうなったんだろうな

「お前ら一旦落ち着けよ、冷静に話し合えば状況は…」

「もう埒が明かないわ！弾幕ごっこで決着つけるわよ！」

「上等だ、河童の技術力の凄まじさを見せてやるよ!!」

「悪化させてんじゃねえよ！何をどう討論したらそんなことになったのか聞きたいわ!!」

『幻想郷の常識に従つたまで!』

「なんでそこだけ息ピッタリなんだよ！」

俺がゼーゼーと息を切らしている間に決戦の火蓋は切れてしまったようであんなに俺を部屋に一人残して二人は外に出てしまった

… 全く、お互いに怪我をしなきゃいいが二人とも妖怪で一応非殺生設定のある戦いなので多少は大丈夫な筈だが、

「…………… 止めに行こう」

それが中途半端な改造を施された人間がするということは大変無謀なことで承知の上だ、だけど俺はやはり争ってほしくない

こいし様もにとりも俺にとっては大切な人だから！

俺は扉のドアノブを捻り外へと走り出した

※

さて、何がなんだか全くわからない画面の向こうの皆様のために少々時を戻しまして説明いたしましょう！

紅魔館のメイドと吸血鬼（姉）のいた八百屋を後にして人里を出た俺とこいし様は妖怪の山の麓に移動した

「蒼兄、誰に説明してるの？」

「あれ、俺何か言っちゃった？」

「よくわからないことを言っちゃったよ、画面の向こうの皆様とか何とか」  
「……俺そんなこと言ったっけ？」

どうやら俺は最近疲れている上に若干こいし様の「無意識を操る程度の能力」の影響を受けてしまっているらしい、いや影響が及ぶ能力かどうかは知らないけどさ……

とりあえず妖怪の山の麓にある河童工房の近くまで来ています、きゆうり持参で

ここ重要ですよ！

俺は数ある工房の中で「NI☆TO☆RI」と表札の掛かっている扉の前まで移動する、こいし様は辺りにある電子機器らしきモノが珍しいのかさつきからキョロキョロと辺りを見回している

まあ、俺は外の世界の最先端の電子機器を見てきた上によく来ているからそこまで珍しくはない

しかし、前来た時よりも数が増えている気がする……

あの車輪と電子レンジらしきモノを組み合わせて発電しそうな装置とか、伸びるアームの手の先がバタバタの得体のしれない液体がポタポタと垂れているモノとか、無駄にデカイ扇風機か室外機がよくわからないモノまである

いや、こうして見ると外の世界の技術は進んでるな

本当、正直に思ってしまう…

俺はとりあえず扉の横に設置されているインターホンを軽く押す、これも河童の技術と俺の外の世界の知識の賜物で地霊殿にも設置されているが普及が進んでいないので誰も使い方がわからず出番はほとんどない、撤去の案も出ているくらいである

プルルルルルルルルルル…

プルルルルルルルルルル…

「いや、なんでだよー」

インターホンを鳴らすと何故か電話の呼び出し音が鳴り響く、恐らくにとりが設定したと思われるがこのチョイスはどうかと思う  
ていうかこの前来た時は普通だったのに！

俺が一人で頭の中を整理していると扉の奥から「はいー！」と少々テンションの高い声が響く、多分インターホンを使ってもらえたことに激しく喜んでいるのであろう

そして、ガチャツツと扉が勢い良く開かれ、

「はいはい、お越しいただきありがとうございます、いつも笑顔がモットーで安全使いやすいことで有名な河城にとり印の最先端機械はこちら…」

…もの凄いハイテンションかつ早口でウキウキとした表情が俺の姿を捉えた瞬間に凍りつく

緑の帽子に青い髪をツインテールで結び、やはりこれもまた薄い青色の服を着た河童の少女、河城にとり（かわしろにとり）が顔を真っ赤にして、

「う、うわあああああああああああああああああん!!」

盛大に泣き叫んだ

※

「で、これは俺が悪いのか?」

「悪いね、悪くなかったら今日は厄神様が幸せを運んでくるよー」

「理不尽だろー!」

俺とこいし様（にとりには見えていない）はとりあえず工房に入れ

てもらおうことに成功した

成功の秘訣？きゆうりだよ

「でもきゆうりを持ってきたのは流石ね、私のことをよくわかってる証拠だわ」

という具合にまあ、チヨロイモンです

にとりのきゆうりの食し方は非常にシンプル・イズ・ザ・ベストの象徴で水で洗ったきゆうりをかじる、以上でありたまに酒と合わすと言った具合である

「そういやにとり、この前設計段階だったアレできてるか？」

「ああアレね、勿論できてるよ！最高傑作！後で渡すね」

「悪いな、他にも作りたいのあったのに…」

「いや全然いいよ、アレはアレで作りがいあつたし！」

こんな感じで俺にとりはいつも二人で外の世界の技術とか発明品の自慢などの雑談で時間を過ごすことが多い、たまに一緒に制作することもある

しかし、今日の客は俺一人ではない

「ウウゝグルルルルルルル…」

「こ、こいし様？」

何やら不穏でヤバそうな雰囲気が出ている！

まずい、これは怒っている！

以前、おくうがこいし様のプリンをこっそり食べた時の雰囲気こそっくりである

しかし、にとりにはこいし様の姿は見えていない

……大丈夫かな？

「…：… ねえ蒼薦、さつきから隣で唸ってる子は誰？」

「気がついてたアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!？」

まさかの展開だ、非常にまずい！

「って！それ私のきゆうり！」

「べくだ、蒼兄が買ったきゆうりだから別に私が食べても何の問題もないし」

「そ、蒼…：… 兄…：… !？」

何やらにとりが額に青筋をピキピキと浮かべて穏やかな状況ではなくなってきた、こいし様も何か次々ときゆうりを食べ始めるし！

「ちよ、待つ、それ私のきゆうりいいいいいいいい！しかも許せない、そのどこから持ち出したか知らないけど味噌に付けて食べる食べ方、解せぬ!!」

「あなたこそ何、ガジガジと噛んでごつくんなんて下品な食べ方！そんなんだからいつまで経っても男できないんだよ、この引きこもり！」

「ひ、ひき、引きこもり…」

ま、まずい、非常にまずい!!

俺は傍観者の立場であり本来ならば中立的な立場で成り行きを見守らないといけないのだが二人から漏れ流れる妖気がピンピンと肌に伝わってくる！

それを証拠にホラ、冷や汗ダラダラだよ！

ていうかこいし様ってこんなにグイグイいくタイプだっけ!?

「帰んなさい！きゆうりを生で食べる素晴らしさと研究開発の醍醐味を理解できないチビはさっさと！」

「あなたにチビって言われたくないし!!」

「い・い・か・ら・か・え・れ！ここは子供の来る場所じゃない！」

「私子供じゃないし！」

「ゴイツ…!!」

そして冒頭に戻って欲しい

その後もエスカレートする暴言の嵐もあり、何やかんやで弾幕ごっこにまで発展してしまったこの争いを俺はどうすることもできなかった

だから俺はこの二人を必ず止める、結構矛盾とかいっぱいある気もするけどそこはご都合主義で乗り切つてやる！

この幻想郷では常識に捉われちゃいけないって、どこかの現人神が言ってたくらいだからな!!

結論、俺は悪くない！

一一／やはりこの世界は平等には成り立たないのが必然なのかもしれない！

河童「のびーるアーム」

抑制「スーパーエゴ」

「中々やるわね河童、蒼兄ほどじゃないけどね！」

「ハッ、言つてなチビイ！ぎったんぎたんにしてやる！」

「やってみなさい！」

……よう鍊蒼鳶だ、やはり妖怪同士の弾幕勝負は俺みたいな中途半端な人外が想像するよりもかなり激しいらしい

証拠に非殺生設定されてるはずの弾幕が凄い威力と数になつてる

もうこれでクレーター何個目だ!?ていうか明らかにアレ本気の戦いですよ、もう決闘ルールとか完全無視の妖怪本来の戦いですよね!?

「チツ、外したか次は当てる！」

に と り

さあああああああああああああああああああああああああああああ  
ん、顔が物凄くゲスい笑顔になつてます  
よオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

画面の向こうの読者、及び外の世界のファン様に見せられないよー！

何、これ本当に弾幕ごっこ!?博麗の巫女が設定した人間も妖怪も種族関係なしに平等に戦えるという幻想郷の決闘方式ですよね!?

俺、勝てる気はおろか混ざれる自信ないんですけど  
どオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

「結構楽しくなってきたわね、ヒヤッハーハー！」

あ ん た も か、 こ い し

様アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

もうヤダこの二人、妖怪の本性というか本能丸出しじゃねえか！

それとこいし様よ、あんた今物凄い形相で笑顔浮かべてますよ、それこそキャラ崩壊とかどうとかのレベルを超えているくらいに！

ていうか何でこんな戦闘ガンガンやっちゃってるの、俺はこの幻想郷を平凡かつ平穩無事に暮らしたいだけなのに！

妖怪とか妖精とか亡霊とか神様がいる時点で諦めた方がいいのかもしれないが、かくいう俺もサイボーグな訳だけど…

『おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

二人の勝負は更にエスカレートしていく、というよりも先ほどからこちらに赤い液体がブシャブシャと飛んできているような気もするのだが気のせいだと信じたい、いくらエスカレートしてるとはいえグロすぎるのはご勘弁したいしな

ん、お前はさつきから何で解説ばかりで喋らないかだつて？そ、それはだな…

「これでどう!」

「やるわね、でもこんなの楽勝よ!」

「口だけは立派ねチビ、ならこれはどう?」

「効かないわね、でもね私は絶対にあなたを倒さないとイケないの、蒼兄の為にも!」

「奇遇だね、私も蒼鳶の為にこの戦いは負けられない!」

『蒼鳶（兄）の仇は私が取る!!』

…二人の流れ弾を喰らってぶっ倒れています、仰向けに…

それで二人は何か自分は悪くない、と言い張って他人に責任を押し付け自分の正義を貫き、俺の仇を取ろうとしてくれているらしい…

この言葉を聞いた皆様は戦い激化の原因は私めにあると言いたいだろうがそれは断じて違うツ!!

俺が扉を開き部屋を出て止めようとしたその瞬間からペースは全く落ちずにそのまま今の今も戦っているんだ

ちなみにだが俺はこの時今後絶対にこの二人は会わせないと心に固く誓ったことも言っておこう

俺は決して悪くないツ!!

※

その後戦いは夕暮れまで続き、引き分けで勝負は終わった

というよりも俺が勇気を出して弾幕勝負中にとりを羽交い締めにした時に思わず彼女の胸を触ってしまいボディブローを溝に喰らった犠牲もあつたのだが…

一先ず長居する気もなかったのにとりから依頼してたブツを受け取ってこいし様と工房を後にした、去り際にとりの頬がほんのり赤かったのは明らかに俺のせいだろうな

うん、ごめん

「蒼兄蒼兄、次はどこに行くの?」

「もう時間が時間だしな、人里で夕飯の具材買って帰るか…」

「ええ、もう帰るの?」

「当たり前ツスよ、さとり様が心配しますよ」

「むう」

「…何か好きなモノ買ってあげますから」

「本当!」

チョロい、こいし様はやはり見た目相応の子供だった

目をキラキラ輝かせながらスキップしながら俺の手を引っ張る  
全く、さっきの戦いの時とギャップが激しすぎる

「早く行こうよ、蒼兄!」

こいし様が全力で腕を引っ張る

そう、ここで思い出してもらいたい

こいし様が普通の人間ならば皆様の予想する展開になったであらう

しかし、彼女は妖怪である、力も寿命も人間の何倍もある

そんな彼女が半分人間の俺の腕を全力で引っ張るとどうなるか、もう答えは出ているはずだ

「ちよ、こいし様!腕、腕千切れる、もうちよっと、ゆっくり…」

「え?何か言った?」

サイボーグで助かった、腕は持って行かれず済んだがどこかのドクタースランプみたいに走り出すので力は更に強くなる



本当、無意識って恐ろしい…

一二／機械の便利さを知る前に食べることのありがたさを知るべきだ!!

やはり今日も燃え盛るくらいに熱い灼熱地獄の熱を肌で感じ取っている地霊殿のある日、

「ねえ蒼鷺、肉まん食べたい!」

「……お、おう?」

先日勇儀さんのお陰で完全修復されたキッチンで食材の整理をしているとおくうが扉をバーン!と開け放ち目をキラキラと純粋な子供のよう輝かせて顔を近づけてきた

そういえば肉まんって幻想入りしてたんだっけ…

何か最近あの自由なスキマ妖怪様が幻想郷にポンポンと様々な外世界のモノをスキマを経由して持つてくるので何が幻想入りして何が幻想入りしていないかの基準が少し曖昧になってしまい困っている

「ちなみにその、肉まんって食べ物のことは誰から聞いたんだ?」

「早苗ちゃん、神社でもご馳走してもらっておいしかったよ!」

「あいつかアアアア!!」

すみません紫さん、今度お詫びに肩でも揉みますので

俺が一番に疑った人物に届くはずのない謝罪を明後日の方向にとりあえずはしておいた、して損はないと思う

「それで他にも豚まんとかカレーまんとかエビまんとか蟹まんとかアンパンまんとか種類がいっぱいあることも教えてもらったよ!」

「何かおかしいの混ざってないか!?!というかお前はいつつも仕事の後一体何をしてるんだよ!!」

「うにゅ? 外の世界のこと教えてもらったり早苗ちゃんの持つてる男の人と男の人が抱き合ってる本を一緒に読んだり… て蒼鷺、そんなでかい包丁取り出してどうしたの!?!」

「いや何、守矢神社と少し戦う理由ができたからな…」

迂闊だった、まさか早苗の奴が腐女子的趣味があったとは!

今度からおくうを守矢神社に仕事に行く際少し注意しておかないと！

「ねえ蒼鶯、肉まん作ってよアレ本当にもの凄くおいしかったんだよ、ちやいにーずの料理はとても美味しいって早苗ちゃん言ってたし！」

「あいつ曲がりなりにもジャパニーズだよな!？」

「蒼鶯作ってよお〜」

「ああ、もう、わかったから涙目で制御棒を眉間に当てるのやめてくれ、本当に死んじゃうから！」

「やったー!と制御棒を外し嬉しそうにヨダレを垂らしながら一人喜ぶおくうを見てると何だが本当に物理的に世界を滅ぼせる力を持つてる少女とは思えなくなるんだよな、いや本当に…」

俺は先程取り出した全長三メートルの中華包丁を戸棚に仕舞い肉まんを作るために先日にとりの工房で共同制作し完成した冷蔵庫を開き材料を探す、中々無駄のない動きに見えるかもしれないが実は俺、肉まんを作るなんて生まれて初めてである

外の世界ではローオンとかセブ○イレブンとかで簡単に購入して食べてたし…

見た目からして一先ず生地を作ってそれで中身の具材に豚肉と秋姉妹から頂いた野菜、それで油とみりん、にんにく、醤油、辛子…

「…食に關してはかなり充実してるな幻想郷」

おそらくあのスキマ妖怪が持ってきたのだろうが幻想郷は外の世界でいう江戸時代辺りの時代背景である

まあ海外はもつと発達していったんだろうけど、よく見たらどっかで見た銘柄のモノばっかだし…ん？

「あれ、豚肉ってどこに入れたっけな？」

「蒼鶯、豚肉ならお隣がおやつに炙ってペットと一緒に食べてたよ」

「猫オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!あの豚肉滅

茶 苦 茶 高 かつ た ん だ

ぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

届くはずのない悲痛の叫びがキッチンに広がり反響する

おそらく今も無縁塚辺りで死体採取にでも趣味に没頭してるんだ

ろうな畜生、あの豚肉特価セールで安かったけどそれでも3500円だぞ！

しかも10kgだぞ！どうやってたらおやつに消えてなくなるんだ!?

俺は豚肉に代用できるモノを探すが生憎だがそんなモノは我が地霊殿の冷蔵庫にはなかった…

「畜生、あの猫覚えてろよ… フフフフフフフフフ…」

「そ、蒼鷺??」

俺がブツブツと恨み言を呟き負の笑いを浮かべると珍しくおくうがあたふたしている

どうやらこの怒りは相当なモノらしいな、今度あいつの財布から5000パクツとこつと！

「仕方ねえ、豚肉がないなら旧都まで買いに行かないとな…」

「私も行くー！」

「いいけど問題起こすなよ」

「何、その私が行く度に旧都の酒場が吹き飛んだり鬼たちにトラウマ植え付けたり試食コーナーの食べ物が全部なくなったり店が全部閉まっちゃうようなことが度々起こっているような言い方、失礼よ！」

「全部事実だろうが！しかも自覚してんのかよ、余計にタチが悪いじゃねえか！」

「私悪くないし！」

「この期に及んで無罪主張だと!？」

もう頭が痛くなりそうだ…

実際あいつが壊した酒場の修理とか鬼たちのトラウマ治すためのカウセリングとか試食コーナーは、まあいいけど店が閉まった後も旧都の人達に謝ってるんの全部俺だからな…

最近じゃあ問題全部俺に押し付けりゃオツケーみたいな方程式まで完成してしまってるし…

「お願い！今回は制御棒出さないし能力使わないって約束するから！」

「… それも何回目だか」

「うにゅ〜…」

俺はため息を一つ吐いて、割と本気で落ち込んでしまっているおうを見る

実際こいつ本人には悪気はないんだがテンション上がると周りが見えなくなつちまうんだよな

それに能力も今じゃ制御できてるけど偶に調子に乗って暴走するのもおうが悪い状況も少ないし

「約束できるのか？」

「う、うにゅ？」

「旧都で制御棒と能力を使わないこと、約束できるなら一緒に来い」  
「……！」

「俺も久々に肉まん食いたくなってきたしな、ついでに食材も調達したいし」

「うん！約束する！」

おうは眩しい無邪気な笑顔を浮かべながら大きく縦に頷く

そしてキッチンの扉をバーン！と開け放ち閉めるのも忘れ走り去って行く

俺はそんな後ろ姿を見守りながらエプロンを外し財布をポケットに入れてキッチンからリビングへ移動した

## バレンタイン特別編　く　鍊蒼鳶の受難く

ある冬の日の幻想郷、と言っても地底は年中暑いし雪が降るわけでもないのであまり季節の流れを読み取りづらいがなんとなく今が冬だつてことは俺にはわかる

度々地上に顔を出しているし地上で会った知人に尋ねれば済むことだし白い妖精が飛んでたら春、紅い姉妹が農作業をしていたら秋、雪が降り⑨とその保護者さん（仮）が活発だったら冬、向日葵畑のドSを向日葵畑以外で見かけたら夏という判別方法もある

俺こと鍊蒼鳶はいつもと変わることなく地霊殿内に用意された自室のベッドに横になっていつもと変わらぬ日々を送っている

普段と違うことと言えばさとり様達御一行が珍しくお揃いで朝から出かけてしまつており現在無駄に広いこの地霊殿には俺しかいないということくらいだな

あ、あとはさとり様のペット達もこの地霊殿に残っている  
ぶつちやけて本音を言おう、暇だ…

幻想入りする前ならばゲームやらPCやらありとあらゆる娯楽が俺の退屈を払ってくれたのだが、生憎ここは幻想郷

どこかの蓬莱ニートの所か親友の道具屋か河童と協力制作するか不本意に不本意だがスキマ妖怪の力でも頼らない限りはそんな代物はここでは手に入らないだろう

「…少し出かけよう」

思い立ったが吉日、俺はいつものバンダナを頭に巻きチョーカーの具合を確かめて黒いシャツの上から白いカッターシャツを羽織る

そして鞆に防寒着もといフードの付いたジャケットを押し込みポケットに財布を入れて玄関まで移動する

「じゃあな、ちよつと出かけてくる」

俺は動物たちに見送られて地霊殿を出発した、鍵はきちんと掛けて火のもとも確認したから問題ない！

「久し振りに香霖堂に行こうか」

俺は地上にある香霖堂を目指して歩き始めた

※

その頃…

「うーん、どれがいいかしらね」

「あたい的にあの人ならどんなモノでも純粹に飛び跳ねて喜ぶと思いますけどね」

「でも蒼兄ってあまり甘い食べるイメージないよね…」

「どうも、地霊殿の主にして覚妖怪のさとりです」

「私たちは今人里までやって来ています、おくうは今席を外していませんがもうすぐ戻るでしょう」

「ねえさとり様、今日って本当に0214なんですよ？」

「お燐が今更不安に思ったのか確認を入れてきました」

「ええ、間違いないはずですよ」

「でもおくうの情報じゃちよつと私も不安なだけど」

「…だ、大丈夫です。ちゃんと私も確認しましたから」

「ええ、ちゃんと「心を読む程度の能力」で人里の人達の心の声を聴かせていただきましたからね！」

『今日こそはこーりんに、こーりんに想いを…！』

『俺は今年こそ慧音先生からチョコを貰うんだ！この際義理でも本命でも失敗作でもなんでも構わねえ！』

『阿求さん、今年こそは貴方の想いはこの僕が！』

…えーと、何はともあれ間違いなさそうですね、はい

「さとり様、早苗ちゃん連行してきたよう！」

「そうこうしている内におくうが現人神ごと東風谷早苗（こちやさなえ）さん連れてきてくれたようですね、首根っこを片手で掴みながら」

「きゃんー」と早苗さんはおくうに手を離され落下、うんい音です「痛たた、どうしたのよ空ちゃん。急に首根っこ掴んで飛んだりして、ていうか上着着てないから寒い！めっちゃ寒い！！！」

緑色の長い髪に少し幼さの残る顔の早苗さんは何故か下着姿…

「おくう、これは一体どういうことなのかしら？」

「うにゅ？さとり様が早急に連れてくるようにと言ったので超特急で連れてきただけですよ？」

おくうは私の質問に首を傾げる、このままじゃ原因はわからないままなので少し早苗さんの心を見てみましょう…

『寒い、全く空ちゃんは説明もなしに着替えてる途中の私を連れ去るなんて、しかもここ人里じゃん！それに私下着じゃん！！恥ずかしい！ヤバイ本当に恥ずかしい！どうしよ、こんなトコあの鴉天狗にでも見られたらいい笑い者よ…』

…  
心中察しました

「おくう、あなたの上着を早苗さんに貸してあげなさい」

「なん、てか怖ッ!?さとり様、今まで見たことないくらい怖い顔でそんなこと言わないでくださいよー！」

「いいから早くしろ、この鳥頭」

「さ、 さ と り 様 の キャ ラ

があああああああああああああああああああ、てか、あん、やめ、む、無理矢理脱がさないでください  
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「お姉ちゃん、あれはマジだね」

「本気ですね」

「そんなことより寒いし恥ずかしいよおおー！」

※

一方…

「いらっしや、ああ蒼鷺じゃないか。久しぶりだね」

「よお、相変わらず客いねエな」

「… 昨日はツケで払う常連さんが来てたんだけどね」

「…、ご愁傷様で」

地霊殿を出て数分、俺はやつとの思いで親友である森近霖之助（もりちかりんのすけ）の経営している道具屋、香霖堂に到着した



彼は妖怪と人間のハーフで所謂半人半妖と言ったところだ

綺麗な白に近い銀色の髪に眼鏡をかけたいかにも優等生つと云った容貌をしている

あとこの幻想郷でも数少ない男の知り合いなので何かと気も合う

「それで、今日も暇つぶしかい?」

「まあそんなトコかな」

俺が香霖堂を訪ねる理由は大抵暇つぶしか外の世界の物資調達だ

この香霖堂では幻想郷の外の世界、つまり俺が幻想入りする前の世界のモノを取り扱っている数少ないというかここしか扱ってない気もする

「お茶でも出そうか、どうせすぐに帰る気はないんだろ?」

「まあね、よくわかってんじゃん」

「君とはそこそこ付き合いが長いからね。それに暇つぶしで来てくれる客の中でも最もマトモな客だと信じてるし」

「……相変わらず苦労してんだな」

「苦労してるよ」

俺と霖之助は互いに苦笑いをする

霖之助は眼鏡をクイツと上げるとカウンターを離れて奥の部屋に移動する

それにしても、久々に来たがまたモノが増えた気がする

例えば、この浮き付きの釣竿とか前と後ろの両方のタイヤがパンクしちゃってる自転車とか無駄にでかい風車のプロペラとか明らかに廃棄処分された大きな滑り台とかよく見たらどこか懐かしい某モンスターの人形とか時代背景がいまいち読み取れないマク○ナルドの看板とかクリスマスのときお世話になったケン○ツキーのカー○ルさんの人形とか近未来的な電光掲示板とか……

よくもこんなにも物が幻想入りしてくるものだよな

そしてこのカレンダー、なんで無駄に半年分の年月しかないんだよしかも1966年っていつの話だつての!

「お待たせ、とそのカレンダーがどうかしたのかい?」

「いや、何でもない」

俺は霖之助から茶を受け取って一気飲みをした  
熱かったが外は死ぬほど寒かったので問題なかった

「そーいや今って何月なの？」

「今日は2月14日だったね」

「ふーん、2月14日ね…ッ!!」

その時、俺の中の何かが覚醒した  
気がつけば俺は大きく目を見開き鋼の握力で湯呑みを粉々にして  
いた

霖之助は俺の突然の行動に少々驚きを感じているがそんなコトは  
どうでもいいッ!!

「貴様ッ！今日は2月14日だと言うのかッ!!」

「そ、そーだよ、どうしたんだい、急に…」

「どうしたもこうしたもだなッ!!」

俺は何故か霖之助の胸ぐらを掴み喧嘩腰になっていた

まさか、今日がああ恨めしく忌まわしきBAREN-TAINだと言  
うのか…!!

この鉄蒼鳶、一生の不覚ッ…!!

「そ、蒼鳶、そろそろ離して、くれないかな？」

「うおお、すまん！」

俺は今我に返った、どうやら相当長い時間霖之助の首を絞めていた  
らしい

「ケホッ、ケホッ、全く君の腕は本当に鉄なんだな。改めて実感させて  
もらったよ」

「案外大丈夫そうだ…」

俺はなんかもう、霖之助の発言には謝るにも謝りきれなくなっ  
てしま  
う

超今更だが霖之助も俺のことをサイボーグだと知っている人物の  
一人である

「ああ、そうそー！」

霖之助が何かを思い出したかのように話し始める

「今朝朱鷺子がチョコを持ってきてくれたんだが」

「リア充、爆発しろッ！」

俺は無意識に霖之助を殴っていた

※

「……なんで私が地霊殿まで連れて来られてるんですか？」

「いや、あたいは悪いなんて微塵も思っていないけどさ、ちよつと利用させてもらいたくて」

「何っこ怖い、超帰りたいたい!？」

人里から早苗を連れて（半ば無理矢理、服を交換条件に）地霊殿に戻った私たちは普段なら絶ツツツツツツツツ対に蒼蔦さん以外使うことのないキッチンにエプロンとバンダナを装備して早苗さんを縛って固定して足を踏み入れました

動物たちの話しだと蒼蔦さんは出かけてるようですし好都合です

「早苗ちゃん、逃げようとしたらメガフレアね」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや、こんな状態で逃げろって言う方が無理ですよ！いくら私が能力を使つたとしても逃げる気なんて元から全くありませんからその制御棒をどうか仕舞ってくださいお願いします!!」

……早苗さん必死すぎでしょ

「この幻想郷では常識に囚われてはいけませんね！」とか言っていた方が何をおっしゃっているのだから

「ねえねえお姉ちゃん、早く作ろうよ!」

「そうねこいし、蒼蔦さんが帰って来る前に早く仕上げましょうか」

私が包丁を取り出しタオルで拭くと何故か早苗さんは「ヒィィ!?!」と言いなながら涙を流しています、一体何故でしょう？

「さとり様、火は強火で良かったですかね？」

「そうね、そのくらいの方が火も通りやすくて丁度いいかもね」

お燐はそう言つて了解しました、と言つて大きな鍋を持ってきました

……まったく、そんな大きな鍋に一体何を入れるんだか

すると後ろの早苗さんの顔色が悪くなつたと思つたらダラダラと

汗をかきはじめました、まあたしかにこの辺は地上に比べれば暑いですが…

「さとり様さとり様、冷凍庫の中身の整理もできました!」

「あら、意外に大きいのね。人一人くらいは入るんじゃないかしら?」

本当に大きな冷蔵庫、蒼葛さんはよくこんなモノを作りましたね

……それに一体なんなんでしょう、早苗さんがもう泣いてるとかそんなレベルじゃなくてなんでフルフルフルと頭を横に振るって歯をガチガチガチガチと鳴らし震わせてこちらを見ているのでしょうか?

え?能力ですか?

今はオフですね、この能力はそこまで好かないのであまり使いたくないのですよ

そして私は買ってきた材料を並べます

「早苗さん、では早速ですがチョココレートの作り方を…」

私が早苗の方を見た時、何故か彼女は泡を吹いて気絶していましたはて、一体彼女に何があったのかしら?」

※

「畜生、あの野郎!リア充ライフを優雅に満喫しやがってツ!」

俺はもう香霖堂を出て地霊殿に帰っている途中である

あの後白黒魔法使いまでもが霖之助、もとい男の敵にチョココレートを持ってきたので更に一発ブチかました所、白黒魔法使いが突っかかってきて危うく弾幕ごっこにまで発展するところであった

……勝負は目に見えているので無謀にも俺は挑もうとはあえてしなかったがな

俺はそんなことを憂鬱な思いに浸りながら大きく溜息を一つ漏らす

思えば幻想郷に来るまでも女の子から本命(義理はあったようではなかったような…)のチョココレートなんて貰ったことなんてなかったな

俺の周りただでさえ女っ気が少なかったし俺を好きになる物好き

なんているはずもないし……

なんだろう、視界が若干ぼけてきたぞ

心なしか目から汗が流れている気もする

(やめだやめだ、どうせ俺は非リアなんだ！画面の向こうにも同志たちは多くいるはずだ、弱気になるな俺は決して一人じゃねえ!!)

俺は無理にテンションを上げてもう気がつけば地霊殿の目の前までやって来ていたことに気がつく

相変わらず外で元気に遊ぶ犬猫達に見送られて地霊殿の入り口にまで近づくと見知った人影を発見する

赤い髪の上に黒い猫耳をぴよこぴよこさせるところの住人の一人

「よおお隣、帰ってたんだな」

「あ、うん、ついさつきね……」

「どうしたんだ、何かいつもと雰囲気違うぞ?」

何だか上手くは言えないがいつもと違って返事にキレがない

お隣は何かもつとこう、堂々としているし俺の冗談(じゃないときもある)にも全力で突っ込みを入れてくれるほどテンションが高いのに……

心なしか顔も少し赤い気がする

「お前、もしかして熱でもあんのか?」

「そ、そんなことないよ!だ、だ、だだだだ第一妖怪が風邪なんか引くわけないじゃないのよ!」

「……すげ々な妖怪」

やはり妖怪は風邪を引かないようだ

たしかにお隣は風邪を引くようなこともしてないし、風邪を引いているなら外で猫たちと話しているなんてこともまずないだろう

「そ、それよりさあ、今日はいい天気だと思わない?」

「天気も何もいつもと変わらないが

……

.....

き、気まずい!

な、何でもこうも会話が続かないんだ

いつもならばボケとツツコミの応酬が延々と繰り返されるとい  
のに！

「あ、あのさ」

お燐の一言が沈黙を打ち破り小さな小包を俺に差し出してくる

「こ、これどうぞ」

「お、おお。ていうかこれって何？」

「えと、えーと、ネズミの死体！」

「嫌がらせか！しかもご丁寧に包装までして!？」

「あ、ま、間違えた！ごめん、そ、それはあれよ！人間の小指！」

「余計怖いわ！」

「あーううううううう!!ちよつと苦くて甘い茶色い固形物よ!!

それじゃあね！」

「あ、お、おい！」

俺の声が届くことはなくお燐は地霊殿とは反対方向へと走り去っ  
てしまった

とりあえず中身が気になったので俺はプルプルと手を震わせなが  
らゆつくりと包装を解いていく

「… ツ！」

そこで俺の思考は止まった

そして無意識に頬が緩んでいるのが自分でも理解できた

「お燐、ありがとう」

俺は小包を包装し直して鞆に仕舞う

そして地霊殿の中にやつのことで帰宅した

※

「あ、蒼鷺〜！」

「おうおう、ただいま〜！」

俺が地霊殿に入ってリビングにいたのは地獄鴉兼八咫鳥のおくう  
だった

相も変わらず元気な様子だった

俺とおくうは軽くハイタッチを交わす、これはいつの間にか恒例と

なつてしまい二人でよく行うことが多い

「そういや今日は朝からどこに行つてたんだよ、久しぶりに山の神様達から休暇貰つてたんだろ？」

「うん、だからさとり様達と出かけてた！」

「うん、それも知ってる」

まあ、これがおくうの平常運転なのだから仕方ない

俺もこのペースにスツカリ慣れてしまい最初こそ突っ込みの応酬だったのだがもう軽く受け流せるまで成長している

案外彼女と漫才でペアを組んだら結構イイ線までいきそうな気がする

すると突然おくうは立ち上がったかと思つたら俺の顔面、具体的に言うのであれば鼻先三ミリあたりのギリギリの位置まで制御棒を突き出してきた

「え、ちょ、待つ、ええ!?!これどういうこと!?!」

「フッフ、さあ蒼鷺!貴様は今からこの渾身の新技の実験台となるがよい!」

「俺何かしましたかッ!?!」

まったく意味がわからなかった!

おくうが予測不能かつ奇想天外な行動を行うのは今に始まったことではないがここまで笑顔を浮かべて楽しそうにしながら割とガチで恐怖を感じるのは初めてである

「お、落ち着けよおくう。は、話せばわかるさ」

気がつけば俺はダラダラと冷や汗を垂らしながら無駄とも無謀とも言える交渉をあつち頭相手に行っている自分の愚かさに気づかされる

奴に話しは通用しない!俺もはやここまでかッ!

「どーん!」

「ふゴッ!?!」

ある意味意表を突いた攻撃だった

制御棒を横に振りバツトのように俺を打ち上げたのだ

まさかの不意打ちに対応できずモロにその一撃をくらつてしまう

何度でも言うが俺はサイボーグであるが超絶中途半端な改造を施されたサイボーグで首から下の左上半身と右腕以外は生身の人間とまったく変わりのない構造と防御力なのである

もちろん頭は後者である生身のままである

「痛てて、こんなのくらったら普通の人間は痛いじゃすまねえぞ…」

「大丈夫、蒼鷺は普通じゃないからね！」

「お前が殴ったトコロは普通の部分なの！」

俺は涙目でおくうに訴える

こんなの理不尽すぎる、俺が一体いつ何をしたと言うんだ！

「あ、そうだ蒼鷺に渡すものがあつたんだ！」

おくうはそう言って制御棒の側面部分をカパッと開けて何かを探すようにゴソゴソと手探りする

…… 一体どういう構造してるんだろう

「はい、コレ！」

「これは？」

「今日はバレンタインデーだからね！蒼鷺にはいつもお世話になってるから日頃の感謝を込めてのお礼だよ！」

おくうは笑顔でそう告げた

なんだろう、嬉しい反面少し悲しい気もする

俺は笑顔でおくうからの感謝の気持ちを受け取った

「ところで中身は一体何なんだ？」

「忘れた！」

※

「ん？」

俺が自分の部屋に向かっていている途中、俺の部屋の前で何やらハート型の小包を両手に抱えて立ち止まっているさとり様がいることに気がつく

どうやら能力も使っておらず、こちらに気がついていない様子もなさそうだが

以前までの俺ならば「え、何この可愛い生物？お持ち帰りしたい！」



とか言って部屋に連れ込むのだが生憎、俺はもう昔の俺ではなかった！

俺はさとり様にバレないようにそろり、そろりとゆっくり気配を限界にまで殺して近寄る

そしてさとり様の肩に両手をセッティングすると同時に…

「さとり様〜！」

「ひい、

に

やあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!?」

ちよつとしたドツキリを披露してみた

と言つても普通に話しかけただけなんですけどね

「どこが普通なんですか!?!危うく心臓が止まるかと思いましたがよ!?!」

さとり様が物凄い涙目でこちらを睨みつけてくる、第三の目からも若干だが涙が流れてる

顔を真っ赤にしてさつきまで持っていた小包を背後に隠しながらゼエーハーゼエーハー、と呼吸を整える

「で、それなんですか?」

「そ、そそれとは?」

「今さとり様が手に持つてる物ですよ、それに何か俺に用があつたみたいですけど?」

「うう…!」

俺は自分でもわかるくらいにニヤニヤしながらさとり様に質問をぶつける

実はこの地霊殿で一番弄びがいがあるのはさとり様なんだよね

耳まで顔を真っ赤にさせたさとり様は明らかに目を泳がせて焦点は合っていないがこちらを見ている

… 外の世界では俗にこれをロリコンという性癖になつてしま  
い、警察にも通報されかねない状態だがここは全てを受け入れる世界  
幻想郷

受け入れてはいけないものまで受け入れてしまうという欠点はあ  
るが心が広いことは真つこと良いことである

「…… さつきから全部聞こえてますよ？」

「はて、ナンノコトヤラ」

俺は目を逸らしながら必死に誤魔化す

やはりこの人の「心を読む程度の能力」は侮れないな……

俺はそんなことを言いつつ頬を赤らめる純真乙女心のさとりに

一言放つ

「そう言えば今日はバレンタインデーでしたね」

「ッ!!」

「いや、俺もうお燐とおくうから貰ったんですよね、初めて貰いましたけど嬉しかったですわ」

「そ、そうなの、よよよよかったですね」

「そういうわけで俺はそろそろ部屋に入らさせていただきますね」

俺はさとりに片手で持ち上げて扉から遠ざける

そしてドアノブを回して部屋に入る

「ちよ、ちよちよちよちよちよちよちよちよちよ!!え、えっちよ、待っててください!私そ、蒼薦さんにわ、わわわわわ渡すものがあります!」

「渡すものですか」

「貴方にはいつもお世話になってるのでそのお礼ですよ!では私はこれで失礼しますッ!!」

さとりに俺に小包を渡すなりどこかへと顔を真っ赤にして走り去ってしまった

おそらく自分の部屋だろうがなんか階段から転げ落ちる音が聞こえた気がする

「…… 大丈夫かな、さとりに様」

俺は若干心配しつつも一先ず部屋に荷物を置いてさとりに様の様子を見に行こうとした瞬間、俺の視界は真っ暗になった

更に言えば背中に何か張り付いてる気もする

「だくれだ?」

「こいし様」

「へへへ、正解!」

視界が元に戻ると俺はゆっくりと振り返る

そこにはさとり様の妹のこいし様が無邪気な笑みを浮かべて立っていた

「はい蒼兄、バレンタインデーのチョコだよ!」

「ありがとうございます!」

何かこいし様めちやくちや素直!

今日で一番時間が短かった

「みんなもつと素直になればいいのに、特にお姉ちゃんのあれは……………ププツ」

「こいし様、笑っては悪いですよ」

とか言っている俺も笑いを堪えるのに必死なんだけどね

「じゃあね蒼兄、また感想聞かせてね!」

こいし様はそう言って部屋を出て行った、というかいつの間に入ってきたのだろうか?

ある意味この地霊殿で最強なのはこいし様なのかもしれないな

「さて…………」

俺は机に今日の戦利品を並べた

そして高らかに虚空に向かってドヤ顔で宣言する

「悪いな、今年は俺お前らの敵だわ」

自分でもわかるくらいにゲスい顔で誰にも告げるわけでもなく独り言のように呟いた

一方…………

「こ、こ、こ、こ、こーりん、私、は、わ、た、し、は

わああああああああああああああああああああああああああああああああ

!!!

「と、とりあえずその八卦炉を仕舞ってくれないか!?み、店が、商品が灰になってきまう!」

白黒魔法使いは鈍感リア充の半人半妖に想いを伝えようと恥ずかしさのあまりに暴走をしてしまい、

「……………」 早苗、中々帰ってこないね  
「そうねえ〜」

妖怪の山に建つ守矢神社の茶の間では二人の神の現人神兼巫女の  
帰りを待つ会話があったらしいとか

一三／人は決して見た目で判断してはいけないんだよ！

結論から話そう、やはり初めて作るモノは上手くないかない

旧都の商店街で具材その他必要な食材諸々を購入して、いざ調理！と勢いに任せて調理を始めてみたものの形が整わなかったり、分量を間違えてしまったり、何故かめちやくちや美味しい小籠包ができてしまったりと肉まんがどうしても完成しなかった

おくうはおくうで珍しく旧都で問題を起こさなかったものの手伝いとか言って制御棒で火力調整に失敗し試作品を消し炭にトランスフォームさせたり、まだ具材しかない中身だけをつまみ食いをしたりととても上手くいく要素がなかった

そんなわけで・・・

「なんで私の家に来ることになるんでしょうね!？」

「いや、こういうの上手そうだったから」

ある仙人のお宅におくうと一緒に邪魔しちゃってます☆

彼女の名前は茨木華扇（いばらぎかせん）、一応仙人らしい

当の本人は俺たちの突然の訪問に頭を抱えて「なぜこの場所が・・・」などと呟いている

「そもそもどうして私が肉まんをやらを作るのが上手いイメージになっちゃってるんですか?」

「チャイナドレス着てるし雰囲気は中国だったから」

「それならばあの紅いお屋敷の門番の方が中国だと私は思うんですけど!？」

「いや、あいつが料理できるなんて到底思えないし」

「それ明らかに偏見!？」

いやだって、あいつが料理って想像もできないよ

俺も始めは紅魔館に行こうとしたんだけどニンニク料理とか絶対に出ないと思うしね、あそこのお嬢は天下の吸血鬼様だし

「心配するなって、具材はこっちで全部用意してるからさ」

「もう私が作ることを確定!」

「茨木、お前さつきから突っ込みしかしてないよな、そんなんで疲れな  
いか?」

「誰のせいだと思ってるんだ...!」

突如豹変した茨木が殺気立った声でドスの効いた声で俺を睨みつ  
ける

..... ヤベ、超怖い!

「マジ頼むよ茨木、俺も既に17回くらい失敗したけど手伝えること  
あつたら全力で手伝うからさ!」

「..... ハア、仕方ないですね」

こうして第二次肉まん調理作戦が始まったのであった

※

「え、茨木お前肉まんを知らないのか!」

「知るわけないじゃないですか、人里でも見かけたことないですし」

「マジか...」

俺は少し悲しい気持ちになった

まさかまだ幻想入りしてなかったなんてな、道理で単品で売ってな  
いわけだ

あまりにも幻想入りする前まで普通に買っていたから感覚がおか  
しくなってしまうているのかもしれない

やはり幻想郷は奥が深い!

「簡単に言うとな、豚肉をミンチにしてニンニクとか他にもいろん  
なものを混ぜた具材を」

「豚、肉を..... ミンチ.....!?!」

なんだか茨木が俺の横でとんでもないモノを見た白黒の劇画タツ  
子風の驚いた表情になってしまっている

あれ、なんか地雷踏んだかな?

「ダメですダメですダメですダメですダメですダメですダメですダメ  
ですダメですダメですダメですダメですダメですダメですダメです



状況が状況だったからな、茨木もおくうが乱入してきたことから理性を取り戻したんだろう

「悪いな、実は豚肉がなくてな」

「へへへ、そうだと思ったよ。やっぱり私凄いな！」

『え？』

俺と茨木は言っていることがよくわからず思わず声を揃えてしま  
う

おくうはパアツとキラキラした笑顔で右腕に持っている何かをズルズルと引きずってここまで持ってきたようだ

何か嫌な予感しかしないのだが…

「…………… おくう、何だそれ？」

「豚。」

瞬間、ドサツという効果音とともに茨木はブクブクと泡を吹いて気絶した



一四／掃除をすると心が綺麗になるって言うけど根が腐ってたらそれはもはや修復できないものなんだ！！

今日は月に一回の地霊殿大掃除の日である

太陽の光が遮られている代わりに灼熱の業火の当てられている地底に建つ巨大な地霊殿という屋敷に住む俺こと鉄蒼鳶は（自分で言うのもなんだが）慣れた手付きでステンドグラスを乾拭きしてから水拭き、その次にまた再び乾拭きという作業を繰り返していた

そもそもこの大掃除は本来外の世界では新年に一度行うか行わないか程度の行事なのだが潔癖症までとはいかないが綺麗好きな家主、古明寺さとり様が提案し長年続いているらしい

なんでも地霊殿が一度関わった異変で地霊殿の中が博麗の巫女さんと白黒魔法使いに無茶苦茶にされたことから始まったとも言われている

俺は雑巾をバケツでジャブジャブと濯ぎ、ギューと力を込め雑巾を思いつきり捻じり絞る

地霊殿のロビーにある八咫鳥を象った巨大なステンドグラスはちよつとやそつとじや綺麗にはならない、というよりサイズが巨大であるが故に全部やるのに時間が掛かるだけなんだがそこは気にしてはいけない

「……綺麗なんだけど、もつとこう小さくても良かった気がするんだよな」

俺は溜息と一緒に思わず愚痴も一緒にこぼしてしまう

どうやら俺はこの雑巾掛けだけで一日が終わってしまいそうだ、皆の所まで手伝いに行けそうにないな

俺はバケツの水がかなり汚れていることに気がつき、水を入れ替えるために何故か水道が通っている中庭に移動する

中庭にはたくさんの猫、犬、鳥、イノシシ、リス、トカゲ、蛇、蠍、ポニー、亀、牛、ゴリラ、オオカミ、イグアナ、ツキノワグマ、チー

ター、豹、ホワイトライオン、インベーター、鳳凰、麒麟、エトセトラエトセトラ…

と言った具合にさとり様のペットが数多くウロウロと歩き回っている

本当、あの動物マニア仙人様顔負けの面子とも言えるだろう

地霊殿だけでも動物園を開けそうなほどの数の動物たちのいる中庭から少し離れたところに水道が通っている蛇口がある

河童に頼んだのか、スキマ経由でクラ○アンに依頼したかは不明だが外の世界と同様に扱うことができるので俺にとってはありがたかった

よく見ると先客がいた

「お燐」

「あ、どうしたの？もしかしてここ使うの？」

そう、猫又もどきのお燐だ

彼女は正式分類すると火車という種族であって見た目こそ猫又だが猫又ではないらしい、耳も人間のモノと猫のモノ両方あるし全く種族詐欺も甚だしいトコだ！

「……何か失礼なこと考えなかった？」

「はて、何のことやら」

俺はおどけるようにして誤魔化した

どうやらこここの住人はさとり様の影響を受けて読心術が人一倍優れているようだ

「お前はこここの担当なのか？」

「そうだよ、中庭もさつきまで掃除してたんだけどさとり様がやって来てあたいのコレクシヨンの隠し場所がバレちゃってさあく、ちよつとテンション上がんないのよ」

お燐はあはは、と笑いながら軽く涙を流したそんな表情を浮かべる  
いつもはピンツと立っている猫耳も今はしゅんと垂れ下がっている、空元気のようだ

「コレクシヨン？中庭にそんなモンあったのか？」

「うん、あの辺に集めた死体を九つくらい埋めてて」

「この庭の肉食動物中心にやたらと血気盛んな理由がわかった気がする！・どうして中庭に埋めたりしたんだ!？」

「だって部屋に持って行ったら臭いし不潔だし！」

「じゃあ集めなきゃいいじゃん！」

どうやら例の死体はさとり様が発見して直ぐに処分したらしいが一体誰のモノなのだろうか

名前も顔も知らないが一先ず手を合わせておこう

「それであんたは何しに来たの？」

「あ、ああ、水を入れ替えに来たんだよ」

「ていうか仕事遅くない？どうせまだあそこの雑巾掛けしてんでしょ？」

「ほっとけ」

お燐はやたらニヤニヤも意地の悪い笑みを浮かべながら肩に手を回してくるが俺はバケツの水を一旦全て出し、蛇口を捻り新しい水をバケツの半分くらいまで入れる

「あれ、満タンまで入れないの？」

「満タンまで入れたら重いしこぼしちゃうかもしれないねエだろ、この位が丁度いいんだよ」

お燐はコクンと小首を傾げバケツの中に映る自分自身と俺の顔を覗きながら質問を投げかけてくるも俺はごく自然に正論を返す

俺は妖怪じゃないからそこまで力があるわけでもないし空を飛べるわけでもないから徒歩で移動するしかない

そこんところの違いをお燐には是非ともわかっていただきたいのだがどうもそこは種族の壁というモノが理解をどうしても阻んでしまふのだ

「ねえあんたさあ、思ってたよりも軟弱で女々しい奴なんだね」

「どういう意味だよそれは、俺はただ単に合理的かつ安全に作業を進めるための自分の中の最良の方法を選んで進めてんだよ」

「そこよ！男ってさあ、もつとこう、なんて言うかわあー！って感じで無理難題にも果敢に挑むイメージしかあたいにはないからさ」

「それは確実に偏見だろ！」

「あくまでもイメージよ、男って主人公みたいの後先考えずに突っ走る馬鹿が多いイメージしかないからさ」

「おま、この野郎馬鹿ってハッキリ言いやがった!!」

「あたいは野郎じゃないんだけどね」

「うるさい猫又もどき!」

「酷ツ!」

お燐は猫又もどきという単語にショックを受けているが俺は気にする様子もなく軽く流し、ため息をつく

「大体な、こんなグダグダで長つたらしいトークを見ても画面の向この皆様は満足しねエのだよ!こんなだから近日アクセスも総合UAもお気に入りも感想も増えずに挙句の果てランキングに載ることもなく終わってんだよ!」

「何の話?」

俺の突然の怒りにお燐はとりあえず突っ込んだ

彼女はどうかやら突っ込まなければいけない何かを感じたようだ

「まあ、俺は主人公でもなければご都合主義なんてモノに縛られてるチート野郎じゃないからな。あくまでもサイボーグってだけの凡人だしな」

「それは凡人って言わないと思う」

「うるせエなお燐、お前はさつきから俺に何を求めてんだよ?」

「熱い夜」

「ちよつと待てコラア、何サラツと聞き流せない単語を何気なく発してんだ!」

俺はお燐の一言に今までにないくらいに全力で突っ込む

自分じゃ見えないがおそらく今の俺の顔はリングゴの様に真っ赤になっっているだろう

文面からは伝わりにくいかもしれないが俺の声は今までより大きいモノとなってしまうた

そんな俺の様子にお燐は面白そうにニヤニヤと頬を緩めて、

「やだ、何興奮しちやってるの?もしかして本気にしちゃったの、本気にしちゃったんでしょ?うわくやっぱり男って所詮欲情にまみれた

ゴミクズだったのね、マジないわく引くわく。あたいがあなたにこんなこと言う理由どころか価値すらもないし。ていうかあなた結構初心なのねこの程度で興奮とか、ホントにないわく」

「…… 頬真っ赤に染めて俺とも視線を合わせずに明後日の方向に向かって罵倒しても説得力どころか何がしたいのかすらわからんぞ」

俺はお燐にそう指摘するとスカートの下から覗いている二本の尻尾がまるで何かに思いつきり引つ張られたようにピンツと立ち、後ろに一步引いて指で俺を指しながら

「う、うるさいうるさいうるさいうるさい！あたいがいつあなたのこと好きとか愛してるとか下着盗んだとか部屋に頻繁に出入りしてるとか飲みかけのお茶飲んだりとかしたって言った!?こ、根拠も証拠もないのにありませんこと言わないでよね！」

「今突っ込みが追いつかないくらいのとんでもないこと言いまくったよな!?それが真実だとしたら俺はお前に対する対応を今後少し考えないといけないんだが!」

「……………  
全部嘘よ」

「その長い間は一体何なんだよ!」

長い長い沈黙の末、気まずそうに顔を逸らし放った一言はまさかの無罪主張だった

お燐は回復すると頬を真っ赤に染めて爪を立ててガリガリと俺の体で爪を研ぎ始める、正直言うことやめてもらいたい!

「ううううう、あ、あなたのせいよ。あなたがあたいに突っかかってきたせいでこんな辱めを人間風情の前で、ふにやあ!」

「悪かったな人間風情が猫又もどきの愚痴を聞く羽目になっちゃまって」

俺は笑顔でお燐の両頬を抓りムニムニと弄ぶ

「ひよ、あんふあやふえひやしやいよお……」

「あ?何言ってるかわからないな」

「ほ、ほのひやろー!」

俺はお燐の頬を引つ張ってムニムニするのが結構楽しくなってきた

た

この場に鏡がなくて正確なことはわからないが恐らく今の俺の表情は花妖怪が絶好調で快樂に溺れた時の笑いと近いモノがあるだろう

涙目で反論するお燐の言葉を全て無視して俺はひたすらムニムニと引つ張り続ける

「ほ、ほへんひやしやい、ほ、ほふはふおひゆりゆくらしやひ…」  
「やだ」

「ほ、ほのふおにii  
!!」

そこから暫くの間、俺は新しい娯楽をひたすら楽しんだ

一五／後先考えずに行動することが迷惑なのは結果的にいい方向に進むなんてことはほぼ確実にないからだよ！

因果応報とはまさにこのことであろう

「………… マジ悪いって、このことは本当に俺が悪かったって」

「………… もう謝っても仕方ないからさっさと終わらせよ」

「了解」と俺は隣で箒で床の埃を集めるお隣に簡単に返事を返す

俺は引き続きそのままステンドグラスの水拭きをひたすら続ける

どうしてこんなことになったかって？

中庭でお隣のことを弄んでると激おこステイックファイナリアリテイぶんぷんどリーム状態のさとり様がやって来て長くありがたい説教を述べ五時間位行われ更にお隣としてお隣と供にロビー全体の掃除を任されたというわけで今ココである

さとり様は去り際に「そんなにお隣といるのが楽しいならもつと居ればいいじゃないですか……」と顔を逸らしていたことも説明に加えておこう

………… まあ、今回は全面的に俺が悪いので一番の難所で誰もが避けるステンドグラスの掃除は俺がやっている、というか最初からココの担当だったんだけどね

ちなみにさとり様やこいし様、おくうは既に就寝してお休みなさつてる

地底だから時間の流れがわかりづらいが半年もここで生活していれば体が覚えてしまうようで正確ではないにしろ大体の時間は把握できる

しかし今は時間など大した問題ではない、今は目の前の与えられた使命を果たすのだ鍊蒼鳶！

「ねえ、ちよつと塵取りやってよ」

「そんなくらい自分でやってくれよ、俺だって自分のトコやんのに精一杯なんだからよ」

「……こんなことになったのは誰のせいだと思ってるのよ？」

「満更じやなさそうな表情でニヤけてたのはどこのどいつだよ？」

「サ、サアーネー、ダレノコトカシラネー」

「この部分終わったら手伝ってやるからさっさと自分の世界から戻ってこい」

俺は明後日の方向に目を向けているお燐をジト目で睨み溜息を一つ吐く

ステンドグラスの自分の背丈と梯子で届かない場所は俺の右腕に搭載されているマジックハンド顔負けの伸縮機能（最大2・4m）を使いゴシゴシと作業を進める

八咫鳥の姿が描かれたステンドグラスは徐々に本来の輝きを取り戻し、灼熱地獄が照らす光を反射するように全方位に光を放つ

お燐の方も随分と埃が集まっているようだ、というか俺に頼まなくても普通にやった方が絶対に早く終わりそうなんだけどな…

俺は一旦梯子から降りてお燐に声を掛けようと汗を拭いながら近づく

「おいお燐、そろそ…!?」

「……？どうしたの??」

俺は目を疑った、何故…

カツ、と物凄い形相で普段の二倍程目を見開いた（お燐談）俺はワナワナと震え始め（お燐談）ゆっくりと目に写ったそれを指差す

「そ、それは……」

「一体何なのよ？」

お燐はうんざりした様子で俺を睨む

今思えばこの地霊殿の面子の中でも一番ギクシャクした関係から始まったのはお燐だ、その影響かは知らないが今でもたまにお燐と口論になることが多い

だから彼女は恐らく冗談抜きでうんざりしているのだろう

でも仕方ないじゃないか、誰にだって嫌いなモノの一つや二つあるのだから

それは美しい黒く不気味な光沢を放つ



それはユラユラと怪しげな雰囲気を醸し出す

それは両の瞳をギラリと光らせている

それは非常に生命力の強い生き物でちよつとやそつとじゃ倒せない

それはカサカサとゾクつとする音を響かせながらひたすら床を歩  
き回る

それは時々宙を舞い万人を恐怖のどん底に叩き落とす

それ、いやそいつは……！

「GO☆KI☆BU☆RI……！」

厄災の悪魔が俺の前、今ここに降臨したのであった

「何でお前がこんなところに!？」

「ちよ、あんた?どうしたの?」

「クソツ、やはりこの世界でも覇権を握るつもりか!?!そうはさせねえぞ、こつちじゃ向こうと違って貴様を死滅させる方法なら何万通りもあるんだ、覚悟しやがれツ!!」

行け、お隣!君に決めた!!」

「なんであたいが!？」

俺は悪夢の蟲神、通称プロフェッサーGから距離を三メートル開き  
安全圏へと避難する

本来ならば百メートル避難しなければ本当の安全とは言えないの  
だがそこまですれば地霊殿を出て旧都を越えて灼熱地獄の果てまで  
行かなければならない!

大袈裟と思つた画面の向こうの皆様、断じて大袈裟などではないツ  
!

全ては自分の身を守り世界を奴から守り抜かねばならんだ!!

……あのトラウマを生んだ悲劇はもう繰り返してはならない!

「……ていうかいつまでそこにいんのよ……」



俺はそれをそのまま左腕に装着して右手で持ち手を握る  
そして奴に狙いを定める

「覚悟しろ・・・！俺が跡形もなく増殖できぬように消滅させてやる・・・！」

「ちよ、あんた！それが何だかよくわからないけどいくらなんでもそれは大袈裟！」

「説明しよう！これこそ俺とにとりの技術とおくうの制御棒と八卦路の構造を組み込み更には応用し魔法と科学技術の応用して完成した俺専用の兵器、超エネルギー圧縮砲！大気中に漂う僅かな靈力や魔力、妖力、神力とありとあらゆるエネルギーを一点に集中させる術式とおくうの核融合にも匹敵するエネルギーを生成し白黒魔法使いのマスパよりも鮮やかで派手な超高温の熱光線を放出する俺の持つ一応非殺生設定搭載の最高最強の武器！しかもまだ一度も試し撃ちはしたことはないツ!!」

「よくわからないけどなんでおくうのエネルギーに匹敵する力をゴキブリ一匹のために使おうとしている訳!?!ゴキブリは確かに跡形もなく消滅するだろうけど地霊殿が保たないよ!!」

「奴が消えることと比べたら苦でもないさ」

「爽 や か に さ ら っ と 何 言 っ て ん の  
よオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!?」

俺は叫ぶお隣をスルーし奴に狙いを定め、持ち手にあるグリップを軽く捻りエネルギーの充填を始める

俺の体の中に含まれる僅かな靈力と大気中の様々なエネルギーが一点に濃縮され淡い光を放つ

「ちよちよちよちよちよちよちよちよちよちよ!?!本気で撃つ気なの、地霊殿壊れちゃうよ!?!」

「建て直せば済むことだ！」

「その前にゴキブリ見逃せばいいことだとあたいは思いまーす！」

「これも地霊殿と俺の生活環境の保護、そして俺のトラウマと過去をこれ以上刺激しないため必要なことなんだ！」



「い、いや、ですがさとり様。奴を退治することには床の大穴一つ小さな被害ですよ、名誉の傷つてやつですよ！」

「問答無用です、たかがゴキブリごときにこんな強力な力を使う貴方には少しO☆H☆A☆N☆A☆S☆Iが必要ですよ」

さとり様は額の青筋をビキビキと皺の寄ったお婆ちゃんのように険しい表情に変えていく

その姿が般若か修羅かに見えてしまい先程から冷や汗が止まる気配がない

「へえ〜お婆ちゃんときて般若に修羅……………ね♪」

その後、さとり様が呼び寄せた白黒闇魔様と動物仙人様のお二方を加えた説教が半日近く行われ、さとり様にG・II・k | n i t o r i 7を没収されたのは言うまでもあるまい

一六／過ぎ去った日々は戻ってこないけど過ぎ去った日々を取り戻すことはできると思うんだ！

無縁塚、魔法の森をくぐり抜けて再思の道を抜けた所に位置する危険だらけの幻想郷の中でも何かと危険度が高い場所で外の世界から紛れ込むモノも少なくはない

冥界、外の世界、幻想郷と言った三つの世界の境界が交錯する場所でもあり自分自身の存在そのものを維持するだけでも困難な場所とも言われており、基本的に好き好んで近づく物好きの方が少ない

まあ、俺も訳あってこの無縁塚にやって来る羽目となってしまった物好きの一人なのかもしれない

（あのチビ閻魔め、あんだだけ長い説教したその上に反省文なんて書かせやがって！ここに来るまでどんだけ苦労すると思ってるんだ！」

途中から声に出てしまっていた気もするが辺りを見回しても人影も人の気配も見当たらないため誰にも聞かれてはいないだろう

俺こと鍊蒼鳶は一週間前の大掃除の日にGをぶっ飛ばして地霊殿の一部を損傷させてしまったことで説教という名の拷問を受けた後、チビ閻魔に辞書と間違うほどの分厚さを誇る原稿用紙（しかもご丁寧に全部裏表記入式）を渡されて「こちらに反省の心意気をお書きください。一言一句丁寧に、そして全部埋めなさいよ？」とスペルカードを構えて脅されてしまったのだ

そしてほぼ不眠不休断食五日間で反省文を全て次の日に全力で休み、今日提出するために無縁塚までやって来たのだ

ここにやって来るまでに魔法の森の妖怪に襲われるわ地底じゃ勇儀さんに絡まれるわエトセトラエトセトラ…

あれ、何だろ？目の前が霞んできた気がする…

幸いこの無縁塚はそこまで広くないのであのチビ閻魔を見つけるのにそこまで時間は掛からないだろう

相変わらず外の世界から流れ着いた壊れた道具や使い道のなくなった電化製品や結構リアルな人骨や誰かわからない見知らぬ人が

楽しそうに笑っている写真だとかを足場にしなければならぬ、だがチビ閻魔の住居が近くなると緑や普通では見られない植物が生い茂る場所になってくる

それを証拠にさつきから足場に草が目立ち始め、枝垂れ桜っぽい木や彼岸花が数を増やしていた

そしてその枝垂れ桜の一本の枝に彼女がいることも証拠の一つ……

「ぐお〜、ぐお〜……」

……… おっさんかお前は

木の上に簡易的な座敷間が設置されその上で何処か高級感を漂わせるソファで横になり頭に新聞を乗せて大きくイビキをかいている赤い髪の少女がいた

「んぐう、あたいはまだまだいけるぜ〜！むにやむにや……」  
「………」

俺はその光景をしばらく見続けた後、無言で右拳を握りしめる

そして、桜の木を全力で殴りつける

拳は機械化の影響で鋼鉄の硬度（実際）の拳は桜の木に振動を与えた

そして座敷間ごと少女が落下してくる

「きゃ〜!」

少女は何が起きたか理解できないと言った様子で辺りを見渡す

そしてこちらを見た時に俺の存在に気がついたようだ

「お、お前か！あたいのサボ……いや、休暇を邪魔したのは!」

「……… 見苦しいぜ小町、素直にサボりつて認めちまえよ。俺これからお前の上司に会いに行くつもりだからよ」

「お前絶対チクるよな!?!あたいがサボってたことついでに絶対チクるよな、いやいやそんなよくわかったなこの野郎、的な笑み浮かべてんじゃないよー!」

このサボりの名前は小野塚小町（おのづかこまち）

死神でチビ閻魔の部下らしいがよくサボることとチビ閻魔も手を焼いているらしい

そこで俺がついでにこいつのサボりをチビ閻魔に報告して説教を

短くしてもらおうという算段だ」

「途中から声に出てたぞ?!お前は命の恩人に対してそんな態度取るやつだったのか!」

「は?命の恩人?俺とお前の関係ってそんな重要な伏線で繋がってたっけ?」

「まさかの否定!」

「いや、だって俺が幻想郷に流れ着いて無縁塚で死にかけの所にやって来て食糧とか言っつて残飯を持ってきやがった奴はどこのだいっだよ?」

「いやいやいやいやいや、十分あたいはあんたの命繋ぎとめてるよね?!これ以上はないほどの恩あるよね!」

「どうせなら残飯じゃなくて新鮮な食い物が良かった」

「それただの我儘じゃん!」

「我儘だが何が悪い?」

「何で開き直ってんの!」

ウム、普段突っ込んでばっかだから久々にボケに回るっていいよね  
何かストレスも解消されるし小町の場合は弄びがある

「そういうや何で蒼は無縁塚まで一人でわざわざ来たんだよ?あたいに会いになんてくだらない理由とかじゃないんだろ?」

「ああ、チビ閻魔にこれを提出しに来たんだよ」

「…… 何それ?」

「反省文」

何か小町が同情でもしているかのような眼差しを向けてくる

「蒼、あんた苦労してんだね」

「まあ色々だね、小町も相変わらずサボりたいほど仕事が詰まってるのか?」

「…… そういうことをお願いします」

俺と小町が意気投合した貴重な瞬間であった

※

「判決、貴方は私を馬鹿にしたので黒です!」



「ちよ、何を馬鹿にしたんですか!?!言いがかりはよしてくださいよ!」  
「黙りなさい!その豊富な胸こそが罪の重さ!よって貴方は黒です、異論は認めません!」

「り、理不尽だ〜!」とナイスバディな女性の魂はどこかへと連れていかれてしまった

……こんなのが閻魔様の一角なんて信じたくないのだがどうやら現実は何の前にもあったようだ

「む、鉄蒼鳶ですか。本日は一体どのようなご用件で?」

俺に気がついた四季映姫ヤマザナドウ（しきえいきやまざなどう）がこちらにトテトテとやって来た

さとり様と同じくらい的身長で可愛らしい容姿なのだが、何分頭が相当の堅物なので見た目に惑わされてしまえば終わりである

「前お渡しくださった反省文ですよ、終わったんで持ってきたんですよ」

「え、本当に全部書いたのですか?」

「え?」

「いえ、まさか本当に全部書く馬鹿がいるとは思わなかったので少々驚いているだけです」

「よしチビ閻魔、覚悟はいいな?」

俺がアレを書くのにどれだけの苦労をしたと……!

ない頭必死に使うて書くことがないのに無理矢理言葉を埋め込んで全部やったというのに……!

「え、まさか本気だったんですか?ぷくく、ですがこれで反省の意は表れているようですので受け取つといてあげらすよ、仕方ありませんね」

「じゃあ、やらなくても良かったと?俺のあの五日間は無駄だったと?」

「そんなことは言ってませんよ、しかし自主的に行える良心的な人はそうそういませんよ。それにしても五日ですか、よくガンバリマシタネー」

俺はチビ閻魔の首根っこを何の前触れもなく無言で掴み、三途の川

の方向にまで全力で投げ飛ばした  
チビ閻魔は星となりました☆

その後、珍しく仕事をしていた小町によってチビ閻魔は回収されたらしい

そして態々また地霊殿までやって来て気迫と勢いと威圧に負けてまた説教を半日ぶっ通しに行われたのはまた別の話である

一七／人は誰でも空を飛びたいとか思ってるって言われているけど高所恐怖症の人からしたら何を考えているかわからないモノなんだよ!!

本日もあちこちで弾幕の轟音が響き渡り妖怪達が殺伐とした様子で殺気立っている平和な幻想郷

俺こと鉄蒼鳥もこのあまりにも非日常的な光景を当たり前と捉えてしまったことに恐怖さえ感じている

「…… 外の世界は平和ボケし過ぎなのでは？」

「ごもつともです、こつちに來てからそうとしか思えねエスよ。あつちで暮らしていた時のあんなことやこんなことが全部平和に思えてくるくらいにね」

「平和はいいことだと思いますけどね」

「ごもつともですよ、さとり様」

俺とさとり様、そして今は歩き疲れて俺の背中でお眠りになっているこいし様は現在紅魔館に向かっている

本来ならば行く理由どころか行く気すら起こらない吸血鬼のお屋敷だがある日を境にさとり様とレミリア嬢が友好を深めるとか言う理由で月に一度くらいのペースで紅魔館に行っている

たまにレミリア嬢御一行が地霊殿にいらつしやることもあるのだが大抵が深夜とか早朝といった吸血鬼の弱点の一つである太陽が昇る前の時間帯となっている

まあ、俺たちはそんなの気にすることはないけど

魔法の森を抜けて霧の湖に出てきた

やはり霧の湖というだけあって霧が濃く視界もとても良好とは言えない

「流石は霧の湖だな、何も見えない」

「蒼鳥さん見るのではなく感じるのです、まあ妖怪の私は肉眼でもある程度は見えますけどね」

さとり様がドヤ顔で俺を見上げる

うむ、中々見られない経験かつ少々苛立ちを覚えた  
だが可愛いから許す

「まあ、見えるのは冗談ですけどね」

「冗談かよ!?!」

最近のさとり様は何だか掴み所がない…

※

そして紅魔館に到着

え、その間何があつたかつて?

何もなかったよ、⑨が現れることもそーなのかも出沒しなかつた  
よ?

「……蒼蔦さん、近々永遠亭に行くことをお勧めします」

「何で!?!」

突然さとり様に冷たい視線とともに本気で心配されてしまった、その  
視線辛いよ! ああ、なんか第三の目までじと目でこっち見てるし!

「いっつも思うけど蒼兄つてよく叫ぶよね、マイブーム?」

「決して違いますからね!」

この姉妹は本当に…

あ、こいし様は途中で起きたので今手を繋いで隣を歩いています

「で、毎度思うけどさ…」

俺は改めて紅魔館を見る

地霊殿に匹敵する程大きく何人住めるんだってくらいの西洋風のお  
屋敷でとにかく赤い

いや、この場合は紅いかな?

だが着目するのは決してそこではない、目の前にいる長身の少女に  
注目していただきたい

龍と書かれた帽子に明らかにメイドインチャイナっぽい服装、赤い  
ロングヘアーの少女である

彼女は紅美鈴(ほんめいりん)、この大きな紅魔館の住人の一人であ  
り武術に関しては幻想郷でも上位に位置するとも言われる使い手  
ある

そんな腕っ節を見せつけるように門番として紅魔館の鉄壁の壁として今日も紅魔館を守っている…。んだよね？

「すうーすうー」

『……………』

うむ、相変わらず幸せそうに寝ていた

もし寝ていなかったら彼女が紅美鈴であるかどうかを疑わなければなかった

「こいし様、紅魔館に入って咲夜呼んできて」

「ひやいいいい!!き、咲夜さああああああん!!?ね、寝てませんよー、決してポカポカした天気と睡魔に負けて意識を失ったりなんか決してしてませんからねー!」

「あ、こいし様。やっぱいいです」

「相変わらず面白い人だね〜」

「こらこいし、指を指しちゃダメ、見世物じゃないんだから」

勢いよく目覚めた美鈴はどうやら現状を理解していないようでありをひたすら警戒している

「よう美鈴、そういうわけだから通ってくぜ」

「ええ、どうぞ……………って何ナチュラルにスルーしようとしてるんですか!?!私の扱い酷くないですか、私の台詞さっきのとコレの二つだけって酷くないですかあああああああ!!?」

「チツ、このまま咲夜を呼んできてさっきの様子を録画したデータを紅魔館のレミリア嬢に献上しようと思ってるのに」

「それ私の今後の存続に関わってくるんですけど!?!こんなところで美鈴終了のお知らせ、とかありきたりの展開はやめてくださいよ、洒落になりませんよ!」

「それもそうだな、たしかにそれはそれで面白いかもな」

「うわああああああああああああああああん!この人やっばり苦手だあああああああああああああ!!」

美鈴が地面にひたすら頭を打ちつけているが、大丈夫かコイツ?

一体何がどうい経緯と心境の変化でこんなになっちゃったんだ?

「あなたのせいですよ」

「え、俺何かしました？」

「どうやら死にたいようだな小僧オ！」

「普段温厚な門番さんがご乱心だど!？」

まさかのキャラ崩壊に驚きを隠せない!

これは、戦うしかないのか!?

「蒼鷲さん、物凄い妖気です!あれは本気ですよ!」

「蒼兄、ここは私たちが」

「そうはいきませんよ、あいつが俺に何の恨みがあるかは知らねエが俺が決着をつけなきゃならない。そんな気がするんです」

俺は拳を握りしめる

リアル鋼の拳がああな化け物にどこまで通用するか、俺が妖怪相手に引けを取らない互角の戦いができるのか

そんなことではない!

そんなことなど関係なしに奴の相手は俺がしなければならぬ、さとり様とこいし様が戦ってしまったらダメなんだ、彼女達にばかり頼っているはダメなんだ!

「下がっててください、俺が決着をつけてきます!」

さとり様とこいし様は何も言わなかった

俺は改めて怒りの形相の紅美鈴と向かい合う

凄まじいプレッシャーと殺気に押しつぶされそうになるがここで退けば一生の笑いだ!

「来いよ、お前の怒りは俺が受け止めてやる!」

「減らず口ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ!!」

妖怪の本性剥き出しの紅魔館の門番さん、紅美鈴!

立ち向かうは外の世界からやって来たサイボーグ少年、鍊蒼鷲!

決戦の火蓋は切られた!

幻想郷の行方はいかに!?

紅魔館の行方はいかに!?

二人の戦いが幻想郷に何をもたらすのか!?

俺と美鈴の拳が……  
そして……!!?

真相は読者様の心の中！  
ご愛読ありがとうございました!!

「勝手に終わらせてんじやねえよ！」  
そんな作者の声が聞こえた気がした

一八／親しき友にも礼儀ありって言うこの言葉を考えた人は本当に天才だと思っっている！

現在俺たちはメイド長の咲夜により紅魔館の客室に案内されている。

え？門番との謎にシリアスに持っていった戦い（笑）はどうなったかって？

そんなの咲夜の介入によって丸く収まったよ、彼女のチート能力のせいで何もかもが終わったところには美鈴なんて頭から下地面に埋まってたし。

彼女、紅魔館のメイド長十六夜咲夜は人間でありながら超人的な身体能力と「時間を操る程度の能力」というチート染みた人外の力を有している。しかも操る対象は時だけではなく空間も対象となるように、そのせいで紅魔館は外観と合わない部屋の広さとなっており同時に迷路のように複雑な作りになってしまっている。

あれもこれもレミリア嬢のご要望らしいのだが本人ですらも迷うことは多々あるらしい。

「ではお嬢様方呼んで参りますのでこちらでゆっくりしてお待ちください」

扉を開けて俺たちが部屋に入るのを確認すると、彼女は俺たちの視界から急に消え去る。

本当チートな能力だと思っ、ていうか態々能力使っつてまで呼びにいかなくてもいいんじゃないのかな？

その後、ゆつくりくつろいでくれと言われたものの数秒程で扉がコンコンとノックされてしまったのでゆつくりと休む暇すら与えてくれなかった。

応答もなしに扉は吹っ飛び一人の少女が俺に向かって飛来してくる。七色の宝石のようなモノを羽の代わりとし翼の骨格を形成した異形の翼を持ち金色に輝く髪をサイドテールにした少女が……！

「そおおおおおおおおおおおおおおおおおお



うううううううううううううううううううううううう

たああああああああああああああああああああ

つううううううううううううううううううううう!!」

「ちよ、フランドール嬢、まだ準備つてやつが、ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!」

俺はお星様になったようです。

※

「ご、ごめんなさい」

「いや、いいんだフランドール嬢。大した怪我じゃなかったし、俺の不注意もあつたからさ」

「……背骨打撲と肋骨の数本骨折のどこが大した怪我じゃないのか」

数分後、霧の湖に落下したらしい俺は咲夜に回収されたようで何とか紅魔館に戻ってこれた。

目の前で顔を俯かして今にも泣きそうな顔のフランドール嬢はレミア嬢の妹で、つい数ヶ月前までは狂気に支配され今の大人しい(?)性格ではなく破壊と殺戮を楽しむ危険な状態だったとは俺はとも思えない。

俺自身も体の半分を改造したサイボーグなのでそこまでのダメー  
ジはなかったのだがさとり様とこいし様は大いに心配してくれたらしい。

「まったく、本当に蒼菫さんは注意力と回避力が足りませんね。帰つたら勇儀さんに頼んで鍛えてもらつてはどうか、生き残るために」

「本当だね。蒼兄は男なのに弱いつて本当にダメだよ。いくら妖怪と人間のハンデがあつたとしても少しくらい強くないと」

「……えっと、彼女達は本当に心配してくれたのでしょうか?」

俺はレミア嬢の方に目を向けるとピイツと顔を逸らされてし

まった。

咲夜に至ってはニヤニヤしながらざまあ見ろ、みたいな表情を浮かべてるし……

「ま、フランちゃんもちよつとは気をつけた方がいいよ。俺も受け止めるのに命張ってる時もあるからさ、自分の力はきちんと制御しないと」

「うん、私頑張る」

それはよかった、とボサボサと寝癖のついた深緑色の髪で右目を隠しているスーツを着崩した青年……？

ん、青年??

ちよつと待て、そこでフラン嬢の頭をなでなでしている青年は一体誰だ？ 紅魔館に男はいなかったはずだぞ、俺の記憶が正しければ。

「ちよつと待て、あんた誰だ？」

「あ、やっぱ気になる？ 結構自然な流れで参加したから気づかれてないと思ってたんだけどな」

青年はヘラヘラと笑う、どうやら本当に気づいてないと思っただけいな。

咲夜は顔に手を当てて何故かため息をついてるし……

俺たちが疑問に思っているとレミリア嬢が彼の前に立ち高らかに笑みを浮かべる。

「蒼鶯、彼もあなたと同じ外来人よ。つい先週くらいに幻想入りしてきて今ではこの紅魔館の執事として働いてもらってるわ」

「練原浚（かどはらしゅん）です、咲夜ちゃんには頭が決して上がらない健全な青少年で紅魔館の執事してます。ちなみに好きな食べ物是人里にある団子屋の団子で11月11日生まれ、さそり座のB型。趣味は三味線で得意料理はナポリタン、ついでに言えばこの紅魔館の中は広すぎるので未だに覚えられません☆」

…… 何とも必要以上の情報を提供した自己紹介だった。

「こ、個人的な人ですね」

「あはは、よろしくね」

さとり様は苦笑い、こいし様は打ち解けあったみたいで握手をかわ

してる。

「咲夜、お前あいつに一体何をしたんだ？」

「別に、ちよっと紅魔館内の掃除をお願いしたり体慣らしの為の対戦相手になってもらったり新作スペルカードの実験体になってもらったりしただけよ？」

「うん、十分すぎる理由だな」

咲夜はコクリと首を傾げるが幻想入りして一週間ちよつとした経ってない者にこちらの世界の戦闘や技術を浴びせることは少し酷な気もするが何だかんだで乗り越えて馴染んでるあいつも凄いう。う。

俺だったら絶対に無理だ。うん、地霊殿で本当によかった。

「すごいや蒼鷺君、君も外の世界からやってきたんだよね？」

「ああそうだ、半年くらい前からかな」

「そう、結構長いんだね」

鯨原は笑みを崩さずに話しかけてくる、どうやらかなり無邪気な青年のようで上手いことこの紅魔館に馴染んでいるようにも見える。

その前にあのレミリア嬢がよく咲夜以外の人間を紅魔館に住まわせることを許したことに驚きを隠せない。

彼女、紅魔館の当主レミリア・スカレットはプライドの高い吸血鬼で本来であれば外来人など取って血を吸い尽くすはずなのだが。

彼女の気まぐれがうまく働いたのかもしれない。

「お前も頑張れよ、この幻想郷は生半可な覚悟で生きていける世界じゃないからな」

俺は新入りにそう忠告した、それでも彼は笑みを崩さなかった。

「安心してよ、その言葉は一週間前にも咲夜ちゃんから言われてるからさ。それにこんな面白い世界に来られたんだから俺としても簡単に死ぬのはつまらないからね」

彼、鯨原はニヤリと猫の目のように目を吊り上げて覚悟の光を込めらせて真面目な表情で、それでいてどこことなく楽しそうに返事をした。

※

親睦会も終わりに差し掛かった時、俺はレミリア嬢に呼び出され別室で二人つきりになっていた。

「それで、一体何の御用でしょうか？」

「まあそう硬くならないで、浚までとは言わないけど少しは楽にしないさいな」

「……それもそうっすね」

俺はレミリア嬢の言葉に頷き目の前のティーカップに手を伸ばす。

「蒼鷺、あなたをここに呼んだのはあなたの能力について話をするためよ」

「俺の、能力？」

「そう、あなたは気がついてないようだけど蒼鷺、お前はその身に能力を宿している」

「どういうことですか、俺はそんな感じ全然ないですよ」

「でしょうね、だからさつき私は自分では気がついてないって言ったはずよね？」

レミリア嬢は咳払いを一つする。

「私もあなたの能力については詳しくはわからない。だけど何処か私の能力に近いモノを感じるわ」

「レミリア嬢の、能力と？」

レミリア嬢の能力「運命を操る程度の能力」、それに俺は近いモノがどうやらあるらしい。

「発現は、俺次第ということですか？」

「そうなるでしょうね、でも浚は既に能力を手に入れているわ。彼の適応性といい成長速度といい本当に外来人なのか疑いたいわね」

「あいつが……」

「話はこの所かしらね、そろそろ皆の所に戻りましょう」

レミリア嬢は静かに立ち上がった。

俺はすぐには立たずに少し悩んだ、もし自分に能力があるというなら少しだけ喜ばしいことである。

しかし半年近くも能力が発現することもなく今に至るため、その自

分次第というのはどうすればいいのだろうか？

鯨原は幻想郷にやって来て一週間たらずしか経っていないに関わらず自分の能力を見つけ出している。

彼は何をしたのだろうか、そして彼の能力とは一体どのようなものなのだろうか？

「蒼鷺」

俺が思考の海を彷徨っているとレミリア嬢が声をかけてくる、どうやら俺のことを待っていてくれたようだ。

「すみません、すぐに行き」

「と、届かない」

ドアノブに手が届かずにただ背伸びをして悪戦苦闘しているだけであつた。

一九／基本的に勧誘販売やセールスの類やその他怪しげな宗教団体へのお誘いはお断りしています！

「どうも、いつもでお馴染みのニコニコゆかりんのスキマ宅配です☆お荷物を届けに来たのでこちらにサインをお願いしますー！」  
「うん、何しに来たんだよ。ていうか何だよそのキャラは」

地霊殿にある一室のベッドで寝転がって外の世界から辛うじて持つてくることのできたソー〇ーのウォーク〇マンで音楽を聴いていると、俺の目の前つまり天井に穴が開いたと思えば空間に歪が発生し、その中から幻想郷の創世者である八雲紫（やくもゆかり）が某超能力都市の序列第五位みたいなキラキラした瞳でウインクをしながらやって来たのだ。うん、普通に吐きそうだった。

「もう、ノリ悪くない？」

「悪くないし可愛くもない。若作りすんのは勝手だけど、そんなのは自分の式の前だけにしとけよ。見てるこっちが恥ずかしいから」

「……この前藍と喧嘩して今冷戦状態なのよね。橙も寺子屋の友達と毎日のように遊びに行っちゃってるし」

「どうせ原因は百パーセントあんたなんだろう？」

ううう、とドンヨリとした雰囲気で部屋の隅に蹲る幻想郷最強(?)のスキマ妖怪。俺としては彼女の家庭事情になど一切興味がない上に彼女が何故ここに突然やって来たのかもわからない。とりあえず両耳からイヤホンを外すことにした。

「それで今回は一体何を押し売りに来たんだ？基本的に地霊殿はセールスお断りだぜ？」

「いやいやいやいやいや、ちよつとは同情してよ!?!こんな可憐な美少女が体育座りしてイジけてるのよ！励ますとか何かあるでしょ！」

「自分で美少女って言ったら世話ねエな、ていうか本当に用がないんなら帰れよな。俺、あんた嫌いだし」

「結構傷つくこと言ってくるわね！」

俺は笑みのないジト目で紫を睨みながら静かにイヤホンを付け直

す。

「ちよつと待って！本当に荷物あるから、さとりちゃんが宅配頼んだ荷物あるから！」

「…… さとり様が？だったら直接本人に渡せばいいだろ」

「あなたから渡した方が面白いことになりそうなのよ！だからお願い、協力してええええええ!!」

「うわ、ちよ、泣きついてんじゃねえよ！」

結構ガチで涙を流しながら飛びついてきた紫を必死に引き剥がそうと持てる力の全てを持って手を前に突き出す。途中、俺の右手は何やら柔らかい物体に触れた気もするがどうでもいいのでこの際スルーしよう。

「ええー！そこスルーしちゃうの!?!読者の期待全力で裏切っちゃうの!?!」

「うるせえ、さっさと帰れ！」

「じゃあ、これさとりちゃんに渡しといてね。それじゃ☆」

紫はそう言うのとダンボールを一つ置いて投げキッスのオマケ付きでスキマへと姿を消した。

彼女の能力である「境界を操る程度の能力」はあらゆる境界を操作し遊ぶというチート染みた能力だ、どうやらあの能力で外の世界にも度々行っているらしいがそれでいいのか妖怪よ。

俺はまったく、と悪態を付きながらダンボールを持ち上げる。

中身はわからないがそこまで重いものではなく、片手でも持てる重さだった。何が入っているのか気になるところではあるがとりあえずさとり様の所にコレを持っていくことが先決だと判断する。

…… 紫の思い通りになるのは嫌だが俺から渡した方が面白いとは一体どういうことであろう？

※

「さとり様ー、失礼しますよー」

一応ノックを二回鳴らしてさとり様の部屋に入る。読書の好きな彼女は部屋一面に本がありジャンルも様々でかなり幅が広い。

紅魔館の大図書館には負けるが俺もたまに本を借りに行くことがある。

さとり様は俺の目の前で眼鏡をかけながら本を読んでいた。

「蒼鷺さん、どうしたんですか？何か悩み事でもあるんですか？」

「いや、そういうわけじゃないんですけど。紫が荷物を持ってきたのでそれを届けに…」

瞬間、さとり様は驚愕に表情を変えて手に持っていた本を床に落下させてしまった。オマケに頬を真っ赤に染めたと思えば眼鏡までも不自然にズレてしまった。何故だ!?

「あ、あのくさとり様？」

「ななな、なななななななんでしょうなあ!?別に私はレミリアさんに勧められただけで私個人の趣味とかそんなじやありませんからね、蒼鷺さんんん!」

うむ、意味がわからん。

「いや、あの、さとり様?一体何のことでしょうか、レミリア嬢がどうかされたんでしょうか?」

「はうわああああああ!!は、早くそれを置いてここから去りなさいー!」

一体どうしたと言うのだろうか。そこまで言われてしまえば中身が気になってしまうのだが…

「え、中身見てないんですか?」

「見てませんよ。ていうかこの中一体何が入ってるんですか?」

「え?」

「え?」

.....

「……中身、見てないですよね?」

「見てねえツスよ。他人のモノの中身見るわけにはいかねえツスし」

「本当に見てないんですよ?」

「だから、見てませんって。ちゃんと能力使って確かめてくださいよ」

「……見てませんよね?」

「能力使っても信用なしですか!?!」



まさかそこまで俺の信用は失われてしまっていたのか!? 確かにここ最近さとり様と話す機会が少なくなってしまうているのも事実だが仕事はキチンとしているはずだ。

主におくうの荒事業の後処理とか後処理とか後処理とか後処理とか後処理とか後処理とか!

「べ、別にそんなんじゃないんです! だから、お願いですからそんなに気にしないでください!」

気がつけば俺は三角座りをしてしまっていたようだ、惨めだ。

「それで、結局その中身って何なんですか? わざわざ紫の奴を頼ってまで仕入れるほどの貴重の品なんですよね?」

俺がさとり様に質問するとさとり様はドキン! という効果音と一緒に体をビクン! と動かしプルプルと体を震わせる。

質問しただけなのに何だか地雷を踏んでしまったような感覚でいっぱいだった。

「た、確かに貴重な品です。この幻想郷では手に入りにくいほどの、それはもう」

「ということは外の世界のモノですか?」

「そ、そうですよ。こちらよりもあちらの方がこういう文化は発展している」と聞いたので」

「うゝむ、益々中身が気になる」

「も、もういいじゃないですか、ね! そこまで気にするようなことじゃありませんから、ねッ!」

「は、はい」

俺はさとり様の威圧に耐えきれなく肯定してしまった。彼女の目は語っていた、これ以上何も聞くな、と。

そうして俺はさとり様の部屋を後にした。

※

数時間後…

(……やはり恥ずかしい)

私は蒼鷺さんが部屋を出た後にダンボールの中を取り出して間

違っていないか確認をして、早速試着してみました。

そう、レミリアさんに勧められて買ったゴスロリと呼ばれる服を。紫さんに発注を頼んでみたら一発オーケーを貰い、本日届いて着てみたのですがやはり恥ずかしいです。

こんな服で人前に出てる人は本当に凄いなと思います。

私は鏡の前で恥ずかしがっている自分の姿に更に恥ずかしくなっ  
てしまい、そろそろ着替えようと服を脱ぎ始め

「さとり様ー、そろそろ晩飯ですよー…」

見られてしまった、私が一番見られたくなかった人に！

一方、蒼鷺視点では。

え、何コレ？どういう状況??

さとり様はどこから調達したかわからない普段着ないような黒い  
ゴスロリ服を着て鏡の前で立っていた、ていうかこの部屋鏡あったん  
だ。

俺は状況が読み込めずに立ちすくんでいるとさとり様がスペル  
カードを構えてこちらに向かって走ってくる、ん？スペルカード？

俺の意識はそこで途絶えた。

ちなみに翌日になってもこの日何故自分が気絶しており何をして  
いたのか一切思い出すことができなかった。

二十／現地のことは現地の人に聞くのが一番だけど勝手に盛り上がられて会話にならない時ってよくあるよね！

鏡蒼葛、現在魔法の森までやって来ております。

地底で生活を続けていて気がつけば地上の季節は流れ流れて秋、収穫の秋、芸術の秋、食欲の秋、読書の秋、妖怪の秋、弾幕の秋などの秋に使える代名詞的な言葉が多い季節である。

魔法の森も少し前までは深緑の木々が辺りに怪しい雰囲気醸し出していたが、今はキノコが大量に繁殖してしまい更に怪しい雰囲気と謎の胞子が漂っている。

気候で言えば穏やかで落ち着いてきている。

俺は食料を調達するために魔法の森でキノコ狩りをしている。

昨日、冷蔵庫の中にあつた大量の食材が一夜にして半分以上なくなるといふ異常事態（後に犯人はわかったが）に襲われたのでこの先一週間近くの食材を調達しなければならなくなってしまったのだ。

当の本人が来ていない理由は察して欲しい。

しかし、やはり魔法の森は一筋縄ではいかなかった。

ジメジメしてるし怪しい空気が漂っているし臭いし眠たくなるし、おそらく半分以上がキノコの胞子による影響だろうと俺は勝手に完結させる。

ちなみに俺にどのキノコが食べられないかなんて見当つかない。

もしかしたら1U○キノコがあるかもしれないし○神キノコがあるかもしれないしノコ○コの実だつてあるかもしれない、カラダカラキ○コガハエルダケみたいな恐ろしいモノもある可能性だつてある。

それはそれで面白そうだが、ク○ボーやキノ○オ、タマ○ダケやモロバ○ルなどは勘弁願いたい、しかもこの幻想郷においてそんなモノは存在しないと言い切れない辺りが恐ろしい。

両手にポリ袋一杯のキノコを収穫した俺はどれが食べれるキノコかを見てもらうために友人のいる香霖堂を目指す、幸いそこまで遠い

位置ではないため丁度良い。

ついでだし久々に外の世界から流れ着いたモノを見てみるのもありかもしれない「マスターズパーーーーーーーク!!」い………って、え？

「どわっ!？」

いきなりどこからか聞き覚えのある高飛車の声が聞こえたと思えば目の前を凄まじいエネルギーの塊が通過した。

反射神経が働いたお陰で直撃は免れたが当たれば大きなダメージを負っていたに違いない!

「フツ、貴様に私が倒せるかな?霧雨の魔法使いよ」

「上等だツ!お前が馬鹿にした人間様の底力をみせてやるぜ!」

「哀れなり、人間よ。底が知れるわ」

「勝負はまだまだこれからだぜ!」

俺がビームの飛んできた方向に目を向けると二人の少女が互いにガンを飛ばしながら向かい合っていた。

「どうやら私を本気で怒らせたようだな。私の九つの頭が貴様の命を刈り取るだろう」

片目に手を当ててニヒルな笑みで決めポーズを華麗に決めている端から見ればかなり痛々しい赤髪の少女は赤蛮奇(せきばんき)

ろくろ首なのに首が浮いているという幻想郷でも謎が多い人物である。

「そんなもん全部私の魔法で撃ち落としてやるぜ!」

箒に立ち乗りし赤蛮奇を指差している金髪の少女は霧雨魔理沙(きりさめまりさ)

霧雨魔法商店という聞いたことも営業しているところも見つけない店の店主であり、本業泥棒並びに普通の魔法使いを貫く少女である。

「我が力、紅き九つの彗星の如く一撃……!」

飛頭「ナインズヘッド」

赤蛮奇がスペルを宣言すると九つに増殖した赤蛮奇のGA☆N☆ME☆Nが魔理沙目掛けて四方八方に飛び出す。

軽くホラーなのは彼女が妖怪だからだろう、それにしてももっとマシなスペルがなかったものか。

「まだまだー！」

赤蛮奇は更に速度を速める。

彼女のGA☆N☆ME☆Nは木々を蹴散らし、砂埃を激しく撒くしあげる。

……こちらにも流れ弾がいくつか来ているが気にしないでおう。

「やるじゃねえか！ならこっちは！」

魔符「スターダストレヴアリエ」

魔理沙も負けずと星型の弾幕を四方八方に放つ。

しかし、最も威力のあるものは赤蛮奇に向かってしつかりと飛んで行っていた。

……またしても威力の小さい星型の弾幕がこちらに飛んできたが弾幕ごつこを観戦しているため、この程度の流れ弾はスルーする。

「やるな、久々に私の右腕も疼いてきたぞー！」

「先手必勝だぜ！」

恋符「マスタースパーク」

「迎え撃たせてもらおうー！」

飛頭「デュラハンヘッド」

互いの弾幕が激しく激突する、見たところ魔理沙の方が僅かに押しているようにも見える。

魔理沙の持つミニ八卦炉は霖之助が作った魔法道具で魔力を充填させて放つことのできる代物である。

彼女の技の大半はこの道具に頼っていると言っても過言でもない。だからこそ事件は起きた。

「あ」

魔理沙の間抜けな声とともにミニ八卦炉が彼女の手から滑り落ちたのだ。恐らく力みすぎたのが原因であろう。

そしてミニ八卦炉からはまだマスタースパークが放たれたまま、マスタースパークは向きを変えて俺に向かってくるではないか。

もちろん俺に避ける術はなかった。

「ギイイイイイイ

ヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!?」

魔理沙が冷や汗を流している様子が見えた。

※

「はぁー、死ぬかと思っただぜ」

「……その一言で済ませれるっておかしくないか？」

数分後、マスタースパークのせいで駄目になってしまったキノコの採取を始めることとなった。

「クソ、どうして私まで貴様ら人間の言いなりに」

「別にいいんだぜ。お前の頭だけを川に沈めてやつても」

「そ、それだけは勘弁してくれ!いくらなんでもやり過ぎではないか!?!」

「幻想郷に一般的な基準を求めている時点で間違ってるんじゃない?」

「ぐう、言い返せない……」

ぐうって口で言うやつ初めて見たなー、なんて思いながら俺はキノコ採取を再開する。

「そういや、何でお前から戦ってたんだ?結構ガチっぽかったけどさ」

「いや大した理由はないんだぜ。私個人の理由としては出番が少ないからイライラをぶつける相手が欲しかったんだ」

「なんつうか、個人的かつメタい事情だな」

俺は思わず溜息を吐く。

そういえばこいつ原作じゃ主人公並みのメインな立ち位置な癖してこの小説じゃ初登場だな。

「馬鹿言ってるんじゃないぜ!何回か出てたから、名前とか台詞だけで何回か出てたからー!」

「近い近い近い、わかったから近い!」

心を読まれた。

何か最近読心術使える奴を多く見るんだが、さとり様の立ち位置が

若干危うい気もする。

「で、生首は？」

「誰が生首だ、否定しないけど！」

「否定はしないんだ」

「私はかつて奴との戦いの折に痛めた右腕が疼き始めたからな、暴走を鎮めるために力をぶつける対象を探してたまだよ」

「それでそこから魔理沙と会って気があったから弾幕勝負が始まった、と」

『まあ、ざっくり言えばね』

何ともくだらない理由だった、そんな理由で今まで苦労して収穫したキノコが駄目になってしまったとなると呆れを通り越して怒りすらも湧いてこない。

「して蒼蔦よ、貴様はわざわざ漆黒の闇街から光を求めて聖域へとやって来たのか？」

「いんや、別に日光浴目的じゃないが単純にキノコ狩りだよ。食料が不足してるからな」

「なるほどな、大儀なことだ」

「意味わからねえよ」

俺は本日何度目かわからない溜息を吐く。

赤蛮奇という少女の種族としての原理もわからないがもつとわからないのが彼女の性格だったりもする。

プライドが高いのはわかるのだが、どうしてこうなってしまったのかまではわからない。

まさか幻想郷にまでやって来て中二病に出会うことになる時は当時の俺は思ってたすらなかっただろう、しかも妖怪の。

「なあなあ蒼蔦、このキノコとかうまそうだぞ！」

「めちやくちや毒入ってそうだよ！何だよこれ、セアカコケグモかつてくらい見事な毒配色じゃねえか！」

「蒼蔦はわかってないな、未知の味を追い求めるロマンを。それに大抵の毒は燃やせば消えるぜ」

「その前にキノコそのものが黒焦げになって炭を食う羽目になっいま

うがな！ホントお前今までよくこんな森のキノコ食べて行きて来られたよな！」

「へへへ、運はいいんだ」

「褒めてねえよ！呆れてんだよ！」

ダメだ、やはり彼女と話すとどうしても自分のペースというモノを保てない！

「おい人間共！面白いキノコを見つけたぞ！」

「あん、そりや一体…！」

赤蛮奇が持つているそれを見た瞬間、俺は目を疑った。

「そ、それは…！」

「ん、どうした？」

俺はもう一度赤蛮奇の持つキノコに目を向ける。

「キ〇コの里、って何であるんだよ!?!」

思わず赤蛮奇の手に持っているキ〇コの里を叩き落として粉々に砕いてしまう、ていうか何で単品なの!?!

「うお！何をする!?!」

「お前それどこで拾ったんだ!?!ていうかそれキノコじゃねえし！キノコ型だけど違うからね！」

「黙れ！我を愚弄する気か！」

グルルルル、と唸り声を上げる赤蛮奇は俺に掴みかかってくる。

このまま事態が悪化してしまえばスペルカードを発動されてしまふかもしれないが、戦闘はなるべく避けたい。

「なあ、そろそろ終わりにしないか？私ちよつと疲れてきたぜ」

「暫しの間待たれよ霧雨の、私は今からこの無礼者を葬らなければならぬのだ！」

「おいおい物騒なことやってんじやねえよ、いい加減にしないと蒼鷺さん怒っちゃうよ。サ〇ヤ人みたいに怒ってパワーアップしちゃうよ！」

「ほお、面白いじゃないか。やってみろよ！」

バチバチバチと未だにメンチを切っている俺たちは一触即発の状態にまで発展してしまった。



だが俺も男だ、ここで退くわけにはいかないッ!

「泣いてから謝っても許してやらねえぞ、首無し娘!」

「上等だ、返り討ちにしてくれようこの小童め!」

こうして十人に聞いて十人がハテナマークを浮かべる戦いのコングが鳴らされた。

…… そういや俺さつき戦闘云々は避けたいとか言ってたけど  
前言撤回でお願いします。

二二／友達の友達と二人きりになることほど気まずいことはないと思うんだ、これならまだ知らぬ他人の方がマシだと思えることもある!!

「……………」

「……………」

「……………」

「……………クッキーあるけど、食うか?」

「ん、もらう」

俺がスツと手渡したクッキーを無表情でピンク色の長髪少女が受け取り、小動物のようにポリポリと食べ始める。

少女の周囲に浮かぶお面(?)がくるくると移動しており、とても摩訶不思議な光景には見えなかった。

まだ幻想郷に流れ着くまでは奇怪な光景に見えたかもしれないが、今は慣れてしまい何とも感じなくなってしまうている。

全く、慣れとは恐ろしいものである。

「うまかった、ぐっじよぶ☆」

グツ!と少女は無表情のまま親指を立てる。

表情の変化がなく、感情を読み取りづらいため俺も絡みにくい。

「そいつは良かった。ていうか、こいし様は一体どこに行っただか」「わからない。でも我々はこのしに連れてこられた。我々としてもここがどこかイマイチわかっていない」

「……………ホントあの人は自由人というかお転婆というか」

「性格はアレだが、我々の友になってくれたのはありがたい。青年もそうなのか?」

「いんや、俺は居候だ。たしかに一緒にいて退屈はしないけど」

俺が言葉が続けると少女、秦こころ(はたのこころ)が興味深そうに俺の言葉に耳を傾ける。

こころがこいし様によって地霊殿にまで連れてこられたのは今か

ら約10分前、俺が部屋で体の簡単なメンテナンスをしているといつものごとくスパーン!と扉が開かれたと思うとそこにはこころを拉致したかのように首根っこを掴んで引きずってきたこいし様が現れたのだ。『蒼兄!今日は私の友達を紹介するね!ふふん、私はお姉ちゃんと違っていつまでも引きこもりのぼつちでは終わらないんだよ!私はお姉ちゃんを越える!!』

『……とりあえずその手を離してあげてください、死相が見えます』  
占い師でもないのに死相が見えてしまったのだから相当ヤバイ状態であると判断せざるを得なかった。

『わ、我々の生涯に、一片の悔いな、し!!』

『こころちやああああああん!!?帰ってきてえええええ!!』

『一旦その手を離しなさいな!それと落ち着いてください!!』

俺は強行手段でこいし様からこころを引き剥がした。

我々という独特な一人称を使う少女、こころはケホケホ、とやつとの思いことを通った酸素の通り道に酸素を吸い込むようにして必死で呼吸をしていた。

『はじめまして、我々の名前は秦こころと申します。一応こいしの友人という扱いになってる』

『あ、ども丁寧に。羨蒼葛です』

『ちよ、一応って酷くない!?!』

『友達とは自分の家に問答無用で拉致していいものなのか?そうか、では我々も今度聖と太子にやってみよう』

『いーんじゃない?』

『いや、待て待て待て!何でそこから話が進んじやうの!?!』

『何を言うか青年、がーるずとーくとはこのようなものであろう?』

こころはキョトンとした様子で俺に問い返す、無表情で。

『こころちゃん、蒼兄は男だからガールズトークのルールがイマイチ把握できてないんだよ』

『そうであったか、失礼した』

『なんで俺が悪いみたいなの雰囲気になっちゃったのかなあ?』

僅か数秒足らずで俺はこの場で孤立してしまった、まあ元々男性率

の低いこの幻想郷で孤立してるようなものだけど、それでも孤立は寂しいものである。

こころの周囲に浮かぶお面の一つである、あれは火男だろうか？  
火男らしきお面がこころの頭上にまで移動していた。

『蒼兄説明するね！こころちゃんは今楽しんでるよ！』

『そうなんですか？表情に変わりはないですが』

『私にはわかるんだよー、すごいでしょー！』

エヘン、と最近ややさとり様よりも発育が良さげだがそれでも慎ましく小さな胸を張る。

それにつられてこころも無表情でエヘン、と胸を張る。

サイズはこいし様といい勝負をしていた。

——それからはこいし様と仲良く（こころは無表情なのでとてもそうは見えなかったが、こいし様曰く楽しんでるらしい）話をしており、俺は蚊帳の外となってしまうた。

一人用のソファに座りながらフラン嬢に続いて仲の良い友人が出来たことに微笑ましく思い頬を緩めてしまっていた。

そういえば、さとり様にはレミリア嬢がいた。

ボツチではなかったことを思い出した。

『それよりもこいし、何故我々をここに連れてきたんだ？』

こころの頭上のお面が狐を模したお面に変わる。

もしかしたら、頭上に来た仮面によって表情を見分けるのかもしれない。

彼女のことは何も知らないし、種族も定かではない。

もちろん、年齢や人脈、能力に関しても今日ここで初めて会ったのだから。

『そうだった、実はね——』

こいし様が言葉を紡ごうとした瞬間、俺とこころの目の前からこいし様が消えた。

『こいし様！』

『こいし！』

こいし様の能力である「無意識を操る程度の能力」であれば、俺た

ちの前から姿を消すことは造作もないことだが、それはあくまでもこいし様が無意識に溶け込み一体化したときのみである。

俺たちは確かに先ほどまでこいし様と話しており、意識の中に捉えていた。

それなのに、何故？

『……まあ、こいしのことだからその内ひよっこり帰ってくるだろう』

『いや、でも』

『青年、お前はこいしのことを心配しすぎだ。大丈夫、何せ私の初めての友人なのだからな』

こころの迫力に押され、俺は何も言えなくなってしまった。

まあ、実際こいし様はふらつとどこかに出かけて気がついたら帰ってくるような人だ。

地底でもそこそこ顔は広いから誘拐しようとかボコボコにやられて帰ってくるなんてことはまずないだろう。

というか、そんなことがあれば地霊殿の全戦力が総動員されることとなってしまう。

『そういうわけだ、互いに親睦を深めでもしながらあいつを待とうじゃないか』

狐のお面を頭に乘せたところは真剣な（無）表情でこちらを見据えていた。

※

そして、話の話題も尽きてしまい現在に至る。

彼女は付喪神、予想はしていたがやはり人間ではなかった。

幻想郷はたしかに人間と妖怪の共生を目的としたまさに幻想郷なのだが、力量からして妖怪といった類の方が多いいのも事実。

俺の知人も人間は数えられるほどの数しかこの幻想郷にはいない。

「どうした青年？先ほどから無言が続いてるが」

「あ、ああ。話題がないなあって思っただけ」

なるほど、とこころが先ほど手渡したクッキーを両手で必死にハム

スターのように頬張りながら応える。

話題の提示を要求したいのだが、いかんせんここも対話自体が得意そうな人柄ではない。

大方こいし様に連れられることが多いのだろう。

そしてあちこちで騒動に巻き込まれて巻き込まれて巻き込まれて巻き込まれて……

「…… どうした青年、急に泣き出して」

「いや、お前も苦勞してるんだなあって思ったら、つい」

「そ、そうか」

若干引かれた気もしたが俺自身は決して気にしない。

慣れてるから、もう他人から白い目向けられたり引かれたりしてるなら慣れてるから!!

…… 言つて何だか悲しくなってきたな、さとり様だったら俺のこの心の叫びを聞いてもらえて会話にもなるのだが、目の前の少女はそうもいかなさそうだ。

首を傾げながら奇異な目でこちらを見つめている気がする。

「……………」

「……………」

と、とりあえずこのまま黙っていても仕方ないので何か話題を出そう。

こいし様もどこに行ったかもいつ戻ってくるのかもわからないわけだし。

「なあ、そういえばこいし様とはどうやって知り合ったんだ？」

「こいしとっ」

「うん。こいし様はこころも知ってると思うけど他人からは普段は認識されない。それなのにこころはこいし様と親しげにしていた、それなりに付き合えないとできない態度だ」

「…… こいしは普段からあんな感じだとは思うが」

「それだよ、普段から、ってことは頻繁に会ってるってことだろ？」

少なくとも俺が幻想郷にやって来たとき、いや、それ以前から付き合いがあったと考えた方が良さそうだ。

もしかしたら、いつもフラフラ〜とどこかに行ってるのもここに会いに行っているのかもしれない。

それならばどこかで無茶とか危ないことしてるかよりは安心だし、ざとり様の胃痛も良くなるかもしれない。

「青年はこいしと出会ってどのくらいなんだ？」

「俺は、半年ちよつとかな？」

幻想郷に流れ着いたのもそのくらいだし、馴染むのは長い時間を費やしたがそこは今は言わなくてもいいだろう。

「そうか、我々は一年くらい前だな」

「一年、か」

「うむ、それからはしつこく付きまとわれている。舞の練習中だろうが昼飯時だろうがお手洗いの時だろうが風呂に入ってる時だろうが、こいしはどこからともなく姿を現して私にスキンシップを求めてきた」

ここで僅かな変化が生じる、今の今まで無表情だったところの頬が僅かに、ほんの僅かにだが仄かに赤色になっていたのだ。

「ま、まあ、我々も退屈することなかったし、悪くなかったけどな」

——こころがデレた。

この場に守谷神社の巫女がいたなら、「キマシイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」とかいう奇声を上げ、暴れ回ること間違いないだろう。

俺もそのギャップに少しドキツとしてしまったのは内緒である。

「どうしたのだ青年？顔が赤いぞ??」

「な、何でもねエよ！」

お前も十分真っ赤だよ、と言おうと思ったのに別の言葉が出てしまった。

その顔で上目遣いはマジ反則だろうが、チクシヨウが！

幻想郷にやって来て少しは女性耐性が付いたと思ったが、どうやらまだまだらしいな俺。

ここにやってくるまでは女性と関わったことがほとんどなかったと思われる。

俺って今も昔もチキン野郎なんだなあ、とか思っていると目の前でこころが残ったクツキーをぼりぼりと小動物のようにまた食べ始めた。



二二／何をしても気分転換は必要なんだと思うんだ!!

どーも！お久しぶり！

え？俺が誰かって、やだなあ、忘れられちゃったの？

俺だよ俺、鏝蒼蔦君より後に幻想入りしてきた後輩で成り行きで紅魔館で咲夜ちゃんの下僕兼執事やってる鯨原浚で☆す！

……ちよ、ちよつと待つて待つて！ねえ、お願いだから閉じないで！

画面右上の赤枠で白いバツ印の付いたボタンをポチツとしないで！

今回はどうやら俺が主役みたいなんだよ、地霊殿じゃなくて紅魔館が舞台みたいなんだよ！

変に期待させちゃったらごめんね、でもこればかりは俺にはどうすることもできないから許して！

え、俺の名前の漢字が読めないからさよなら？よく言われるんだよ、これ。

ちなみに性がかどはら、名前がしゅんです。

覚えてくれたら嬉しいな！ていうかそれだったら蒼蔦君も普通に読めない漢字だよね？

俺並みに難しいし、普段使わない漢字だよね!?

理不尽だ、これが出演数の差というやつなのか、哀れ。

ちなみに今俺は咲夜ちゃんに言われて館の掃除をしています、ここはホントに馬鹿みたいに広くて未だにどこに何があるのかハッキリしないんだよね。

レミイちゃんが咲夜ちゃんに見栄はって内部だけでも広くして！とか言った結果らしいけど。

仕事仲間の妖精メイドちゃん達とキャツキャツしながら掃除していると屋敷の壁に穴が空いて奴が来た、うん。いつも通りだけど後でパチエちゃんからお叱りを受けるのもいいけど一応止めておこう。

「やあ、また来たのか魔理沙ちゃん」

「またお前か!?そこをどけ執事さん、私はパチエリーの本を借りに来ただけなんだぜ!」

「ははは、やっぱり?いつも通り魔理沙ちゃんらしいね!」

まあ予想はしてただけだね。

壁の修理は後でやらないと咲夜ちゃん怒るだろうな、とりあえず妖精メイドちゃんに罪はないからここから離れてもらおう。

「――ならば、俺を倒してからここを通るんだな」

「――ッ、望むところだ!」

フランちゃんと毎日のように弾幕ごっこはやってる、いつの間にかキユツとしてドカーン!が俺にとって快樂に変わりはじめたのはいつからだろう、その時から俺はどこかぶっ壊れてしまったのかもしれない。

魔理沙ちゃんが得物のミニ八卦炉を構え、箒に乗って突進してくる。

――遅い、この程度の速度なら避けるまでもなく、受け止めれる

!

「フツ」

「おい!そこは避けるよ!」

箒の先端が頭にぶつかって吹っ飛ばされてしまったけど一切気にしない、こんなの痛いうちに入らない。

そのまま吹っ飛びながら胸ポケットからスペルカードを取り出して詠唱する。

遊符「びつくり間欠泉」

ブウウウウン、と俺の足元から魔理沙ちゃんに向けて床に複数のエネルギーの塊が球状になり出現する。

クイ、と人差し指と中指を立てることで俺に近いエネルギー弾が天井に向かって光線となり上昇する。

「なっ!?この位置はマズイ!!」

「逃がさないよ〜」

ドン!ドン!ドン!とエネルギー弾は次々に光線と変わり魔理沙

ちゃんを追い詰める。

廊下は俺のスペルカードの範囲としてるので魔理沙ちゃんは必然的に壁から館の外に出ることになる。

魔理沙ちゃんは箒に乗れてるからいいけど、俺は歩きなのが辛いんだよね〜

ま、歩きもしないけど。そもそもこの位置から動くつもりないし。

「——ってオイ!?!追ってこないのかよ!!」

「俺はあくまでも魔理沙ちゃんをパチエちゃんから遠ざけるのが目的だからね。このままお帰りいただけると俺的にもありがたいんだよね」

「そうはいくか!」

星符「ポラリスユニーク」

館の外に出た魔理沙ちゃんがスペルカードを唱えると桃、青、緑、黄の四つの星型弾幕が飛んでくる。

飛んでくる弾幕に俺は迷わずに飛び込む、空は飛べないけど!

俺と激突した青い弾幕は弾けるように爆発し、更に小型の弾幕となり弾けた。中々の威力!

「お前今自分から当たりになかなかったか!」

「気のせいだ!弾幕が俺を呼んでた気がしたただけだ!」

「お前は一体何を言ってるんだ!」

つとと、危ない危ない。思わず空中に出ちゃったけど弾幕の衝撃で屋敷に戻ることができた。

なるほどね、弾幕の衝撃はこんな風に使うこともできるんだな、覚えておこう。

「どうすんの?まだやるー?」

「当たり前、だ、ぜー!」

恋符「マスタースパーク」

お、魔理沙ちゃんの得意技が飛んできたか。

直線上で軌道変化もなかっただデカイだけの砲撃、言えばそれだけで避けるのも容易いんだけど避けたら紅魔館に直撃しちゃうんだよね。

ここで紅魔館崩れたらレミイちゃんだけじゃなくて皆に怒られる

し、何より俺の住む場所と俺を拾って養ってってくれる方々に対して申し訳ない。

——ま、避ける気はないけどね。

マスターズパークは俺に直撃する、でも無傷。

執事服も破けてない。いくらスペルカードが非殺生設定だからってこれはおかしいって？

そんなことはないよ。だって俺は現にボロボロだし。

「なっ!? マスターズパークが直撃したのに何で立ってられるんだ!？」

自慢の技を放ってなお倒れなかった俺に驚きを隠せてない魔理沙ちゃん。

ま、正直言うところそろ騙してきた体が限界になってきたから決着つけさせてもらおうよ。

「じゃ、次は俺の番だ!」

快符「天国と地獄」

俺がスペルカードを魔理沙ちゃんに投げることで発動。

このスペルカードは少々特殊で俺の能力と併せることで初めて使える。

そう、俺の能力である「真偽を魅せる程度の能力」によって。

簡単に説明しよう、まず俺は攻撃を受けることで無傷というわけではない。

これが真実、そして攻撃を受けて無傷ということ偽り。

真実から偽り、偽りから真実を他者に魅せて俺自身には直接影響を与えられる能力。

だからわざわざ攻撃を受けないといけないし、真実を作り出す必要がある。

タダでは偽りの事象を作り出すことなんてできないのだ、この間知り合った天邪鬼ちゃんはそこんところやってのけちやうから色々とかしい。

とにかくだ、さつき俺が魔理沙ちゃんに投げたスペルカードには俺が受けた真実を偽りに変えた時の真実側のダメージを込めた。

そこんところの操作もできる分、この能力はかなり融通が利く。

さつきから難しいこと言ってるけど、簡単に言うからね。

俺が今まで受けたダメージを魔理沙ちゃんに向かって投げたってこと、テヘ☆

一応非殺生設定だから大丈夫でしょ、ドカーン！とすっごいデカイ爆発が起こったけど魔理沙ちゃんも割と頑丈だから大丈夫ってことで。

「チクショー！覚えてろー！」

「またのご来館お待ちしてま〜す」

瞬時に復活した魔理沙ちゃんは三下の捨て台詞を吐いて帰って行った。

撃退成功、と。さて、この壁早く直さないと咲夜ちゃんにナイフ持って追い掛け回されそうだ。

「ちよ、浚さん!?!何してるんですか!?!」

「おー、美鈴ちゃん!おはよー!」

「おはようございます。じゃなくて、みずずじゃなくてめいりんです！いい加減覚えやがれこのヤロー!」

「いやー、漢字は間違ってるからいいよね?」

「ていうかいつの間に魔理沙さん来てたんですか!?!また私が寝てたかと思われるじゃないですか、昼寝、じゃなくて休憩してただけなのに!」

「俺に聞かないでよく、こつちも咲夜ちゃんにいつ殺されるかってヒヤヒヤしてるんだからさー!」

「ほほう。覚悟は既にできてるんですね、それは結構なことです」

あ、手遅れだったか。

能力使って壁をさつきと直したいけど、生憎俺自身にしか能力は影響受けないんだよね。

となると、詰んだ。

「それと中国、どこに行こうとしてるんですか?さつきの話全部聞こえていますからご安心ください」

「逃げるぞ美鈴ちゃん!幻想郷の彼方まで!」

「行きましよう!逃避行です!」

「逃がすか！」

こうして俺と美鈴ちゃんの逃亡生活が始まったのであった。

咲夜ちゃんの能力は俺は防げたけど防げなかった美鈴ちゃんを見捨てた、すまない！見捨てるつもりはなかったんだ！

でも、あの局面じゃどうしようもなかったんだ！

「浚さんの薄情者ー！」

目指すは永遠亭！

後ろは絶対に振り返らない！！

二三／興味を持つのはいいことだけど、ほどほどにね  
!!

紅葉が散り、豊穰神姉妹が「私らの任期おーわり！ あとはよろよろ！ あ、来年は葡萄が食べたいな」とか言いながらも秋も終わりがあと思いに耽っている昼下がりに。

今日も地底は平和です。

体内時計がないと本当に時間がわからないなあ、ここ。俺じゃなかったら発狂して死んでるんじゃないかと思うよ、うん。

さとり様に荷物運びを手伝わされ、もとい雑用として扱われたお仕事もそろそろ終わる。この荷物をどかしてこの箱をさとり様の部屋に持つていけば終わりだ。

「さとり様ー、頼まれてたもの持つてきましたよ」

「ありがとうございます、そこ置いておいてください」

「？ わかりました」

なんかさとり様元氣ない？

「……なんでそういうところには敏感なんですか、貴方は」

「一緒に暮らして長いからじゃないですかね。ここに置いときますよ」

片腕とはいえ、機械化した腕の俺は普通の人間よりも力が出る。

パワードスーツのような役割もあるからだ、多分大抵のものは片手で持つことはできるだろうけど、バランスが悪くなりそうなのであまりしない。

「そ、蒼鷲さん」

「はいー？」

「……何がやっと俺のこと頼ってくれる気になったかですか、貴方のことは前から頼りにしてるでしょうに」

「……わざわざ口にする必要もないでしょ、恥ずかしい」

「あら、なら心の中で思うだけでなく口にしてくださってもよろしいのでは？」

—やっぱり敵わないな、この人には。

「…… 何故撫でられてるのですか？」

「さとり様には敵いませんよ、ホント」

「…… そうでしょう」

ない胸を張られるさとり様。 多分、そろそろパンチが飛んでくるだろうけど気にしない。

「それでなにかご用ですか？」

「ええ、実は少し気になる本が書齋から出てきまして、人里の方へと行きたいのですが—」

「お供すればいいんですね、わかりました」

「ええ、お願いします」

さとり様はデスクの上に置いてある一冊の本を手取る。 先程まで読んでいたように手の届く位置にあった。

「これが？」

「ええ、いわゆる妖魔本と呼ばれるものです。 西洋の文字ですので私には読めなくて」

「なるほど、俺も読めませんわ」

アルファベット、であるのは間違いないが英語はあまり詳しくない。 い。

そもそもアルファベット体系であるが、これが英語である確証もない。 い。

フランス語、ドイツ語、オランダ語、その他考えられるものはいくつがある。

「書齋の書物は全て把握してるつもりでしたが、まさかこのようなものが今になって出てくるとは思いませんでしたよ」

「ということとは、その妖魔本としての効力も内容もわからないんですか？」

「そうなります、あまり危険なものでなければいいのですが」

「危険なものならパチエリー嬢に引き取ってもらうのが最善でしょうな、さとり様以外に本を扱えるやつはうちにいなさそうなので」

「…… そうですね、この地霊殿にあつては危険かもですね」



想像してほしい。

こいし様が無意識のうちに本を失くして問題がこの幻想郷のどこかで発生する。

—大いにあり得る。

想像してほしい。

お空が危険なものならメガフレアで燃やしてしまえと地霊殿ごと崩壊させてしまおう。

—大変あり得る。

想像してほしい。

お隣が—

「……あれ、お隣は大丈夫そうだな」

「でも、あの子本に興味なんてあるんですかね？」

「ないですね」

どうやら地霊殿の面々に読書家は少ないようだ。かくいう俺もそこまで好きかわけというわけでもないが。

「たまには読んでみるのもいいと思います、何か貸しますよ」

「それじゃ、また読書したい気分になったらお願いしますね」

地霊殿の留守をお隣に任せて俺ときとり様は地上に向かった。

最後に地上に顔を出したときと比べて随分寒くなった。幻想郷の四季はハッキリしている。それぞれ四季を象徴し司る者達がいるからだろう。

人里も変わることなく賑わいを見せている。平和だ。

「それで、何故人里へ？ パチエリー嬢に預けるなら直接紅魔館へ向かえばいいのでは？」

「ついでですので貸本屋に行こうかと、鈴奈庵をご存知ですか？」

「いえ、全く」

「ふふ、そんな気はしてました」

とても心外だ。

「鈴奈庵には外の世界からの書物も扱ってるんですよ、娘さんの趣味らしいですけど」

「へえ、香霖堂以外にもそんなところがあったのか」

「それに彼女は妖魔本コレクターを自称してるほどです。この本について何かわかるかもしれないません」

少し興味が湧いてきた。

鈴奈庵は人里の中でも賑わうところにあるようで途中でおばちゃんからりんごを頂いたり、おにぎりを頂いたり、仙桃を頂いたり、文々。新聞なんかも頂いてしまった。

「暖かいところですね。妖怪である私まで構ってくださいるなんて」

「……多分ですけど、どっかの巫女や魔女のせいで妖怪の脅威が薄れてるんだと思いますぜ、うん。それか人里の結界が信用されてるか」

「そこは嘘でも私を励ますところなんじゃないですか？」

「変に嘘ついてもさとり様傷つくだけでしょ」

りんごを齧りながら他愛もない話をしながら、さとり様のペースに合わせて歩く。やがて一軒の木造小屋の前でさとり様が足を止めた。

「ここですか？」

「ええ、先客がいるようですがお邪魔しましょう」

※

「カエレ！」

「なんでお前にそんなこと言われなきゃいけないんだ！」

「あだ!？」

先客、霧雨魔理沙の脳天にチョップを入れる。もちろん右手で。

「お、お、なんだ、まるで鉄で殴られたみたいだ、ぜ」

「まったく、霖之助の教育は一体どうなってやがんだ。こんな奴を野放しにしとくとか正気の沙汰じゃねえ」

「散々な言われようだな、オイ!？」

パチエリー嬢の愚痴を聞く身にもなってほしい。

「あ、あのお、店内での大乱闘はごめんですよ？」

「これは失礼、俺としたことがマナーも守れない奴と同レベルになっちまうところだったぜ」

「おいおい、聞こえてるぜ？ それは私に向かっていつてんのか？」

「お前以外誰がいるんだ、自覚あんじゃねえか」

「やれやれ、これだから教育のなつてない自称魔女さんには困ったものだけだぜ。」

「用が済んだのか、魔理沙は捨て台詞を吐いてどっかへ行っちゃった。ガキじゃん。」

「それでさとり様と話してるこの子が例のコレクターさんか。」

「そうでしたね、蒼薦さんは初対面でしたね」

「さとり様に人里の知り合いがいたことにちよつと驚きです」

「まあ、ある伝手からですがね。少し興味があったものでして」

「もしかして、人間さん？」

「ああ、至つて普通の人間だよ」

「さとり様がジト目で見てくる、何故だ。」

「それで、わざわざ地底からどのようなご用件でしょうか？」

「そうでした。実はうちの書齋から妖魔本が見つかったので、見ていただこうかと」

「―お二人共、その椅子にお座りください！ 詳しくお伺いしましょう、あ、お茶淹れてきますね！」

「目の色が変わった……」

「促されるがまま座り、十秒もしないうちに戻ってきた。あ、茶柱立ってる。」

「あ、申し遅れました人間さん。私はこの鈴奈庵の本居小鈴と申します」

「俺は鍔蒼薦、よろしく」

「幻想郷で中々見ないまともそうな子だ、仲良くやれそうだ。」

「…… またもさとり様がジト目で睨んでくる、何故だ!？」

「それで！ かの地霊殿で！ 見つかったという！ 妖魔本は！ い！ ず！ こ！ に!？」

「近い近い近い近い！」

―前言撤回。やっぱりこの子も幻想郷の住人だわ。  
お茶が美味しい。

「ごちらに。念のため、お札で妖力を抑えてあります。危険はないと思いますがね」

「ほほう、これが―」

「……何の変哲もない本がギチギチと音を立てたり動いたりするはずもないんだけどなあ。」

小鈴ちゃんの簡易鑑定の結果、表紙に書かれたタイトルは『鳥獣戯画』というありきたりなタイトルだ。

「あれ、鳥獣戯画ってたしか巻物じゃなかったですか？ しかも西洋文体じゃないですよね？」

「ええ、原典はそうだと私も聞いております。しかし、ここは幻想郷。外の世界の道理は通じないのです」

「……説得力ありすぎですね」

地霊殿にあるにはらしいつちやらしい書物だ。

「ところでさとりさん、この本はどちらで？」

「それが、あまり覚えてないんですよ。何年も昔のことだったような気がしますし、最近譲ってもらったような気もして」

「少なくとも俺がお世話になる前ですね」

こんな怪しい本の受け渡しをしているところを見たら、それこそ忘れられないし嫌でも記憶に残ってる。

「……わかりました。念のため霊夢さんの協力の元調べてみます」

「お願いします。あと以前お借りしたものを返却しに来ました」

「ありがとうございます、返してくれるだけでありがたいです。いや、ほんとに」

「苦労してんだな」

主な原因はさつきまでいた白黒魔女と見た。

それにしても、外の世界の本か。たしかに見たことあるようなものもあるけど、いかんせん古すぎる。

俺が読んだことのあるものはなさそうだ。

「……蒼鷺さん」

「気にしないでください、さとり様。別に記憶もすぐに戻る必要も

ないんです、ゆっくり気長にお世話になりますよ」

お茶を飲み干し、小鈴ちゃんに挨拶をして鈴奈庵を後にした。

—鈴奈庵を取り巻く妖気のようなものが一層強まった気がしたが、さとり様の能力によってそれは杞憂に終わった。

興味本位で小鈴ちゃんが妖魔本の封を一つ剥がしただけだったのだから。

幸い、怪我も呪いもないとのことなので大丈夫だろう。

「……あの子、いつか呪いに喰われるんじや」

「私もそんな気がします」

訂正、少しだけ不安だった。

※

「あの、男オ、すずちゃんと仲良くキャツキャウフフしておつてからにイイイイイ!! 今に見てる! この俺が貴様を呪ってやる!

すずちゃんの隣に立つのは、この、俺、だ!!」

## 幕間／霊鳥路空の思うこと

どうも、空です。

みんなからはお空ってよく呼ばれてます！

今日はみんなお出掛けしてて、とても退屈です！

さとり様と蒼鳶は地上の人里、お燐は買い出し、こいし様は、相変わらずどこかへ行っちゃってる。

私はというと、バイトもないし、やることないしで、ひーまひましてる感じ。

地上に向けてメガフレアしちやおうかな？

核融合でドツカーンと花火打ち上げちやつてもいいかな、え、だめ？

お燐からはお留守番しててって言われてるけど、出掛けたい気持ちでいっぱいです。

うにゅ。

ちよつと前まで、蒼鳶は地霊殿にいたことが多かったのに、最近は何と出掛けることが多くて忙しそう。

さとり様とは難しい本の話してたし、こいし様の友達のこころちゃんとも会うことが増えたみたい。

お燐とも仲良くなさそうなのに実際はすっごく仲良しだし、嬉しいんだけど、ちよびつと寂しい。

お兄ちゃん、がいたらあんな感じなんだろうなあっていうのが蒼鳶。

みんなからもそんな感じだし、人間で一番年下なのに変な感じ。

さいぼうぐ、っていう種族みたいだけど、よくわからない。

蒼鳶に聞いても難しい話になっちゃうから、あまりこのことは話したくないの。

そういえば、お燐が蒼鳶を拾ってきたときは本当に死んじゃってるんじゃないかって思ったんだよ。

お燐は残念がってたけど、さとり様は悲しい顔してた。

わからないけど、私もそれで悲しくなった。

最初、蒼鳶はみんなと仲良くできてなかったから、私にとってはとても嬉しい。

でも、一番最初に仲良くなったのは、このお空なんだから、そのところみんなわかつてほしいな！

蒼鳶はバカに見えるけど、私より賢い。

いんてりってやつ、寺子屋で習った。

さとり様の書齋の本もよく読んでみたいだし、男の人ってだけで本は好きじゃないと思つてたんだけど、わからないなあ。

うにゆ、そういえば、お隣はいつになったら蒼鳶のことを名前で呼ぶのかな？

帰ったら、聞いてみよう。

あ、こいし様帰ってきた！

トタトタトタ、って足音がする。

「ただいまー！あれ、お空だけ？」

「おかえりー！みんな出掛けてるよ！」

むいしきを操るこいし様は気配を感じにくい。

やっと慣れてきたけど、最初は出掛けるときも、帰ってくるときも気づけなかった。

でも、わかるようになって嬉しい！家族だから！おかえりが言えるから！

「ねえねえ、こいし様」

「なに、お空？」

「こいし様は、蒼鳶のことどう思ってる？」

「蒼兄のこと？」

うーん、って悩んでるこいし様。

「よくわかんない！」

「そっか！」

ははははは、よくわからない！

「だつてさ、蒼兄人間なのに全然人間らしくないんだもん！」

「え、そうかな？」

「そうだよ！」

うーん、人間らしいっていうのもよくわからないかも。

「お姉ちゃんが蒼兄のことをあれだけ信用してるのも、蒼兄が蒼兄だからだと思ってるんだ」

「……………うにゅ？」

「普通の人間ならお姉ちゃんは地霊殿に蒼兄を住まわせない、普通の人間ならお姉ちゃんは蒼兄を頼りにしない、そういうことなんだよ」

う、うーん？

そ、そういうことなの？

「私は、もう目を閉じちゃったから蒼兄が本当は何を考えてるかわからないけど、お姉ちゃんは違う。その上でお姉ちゃんが蒼兄を傍に置くのはお姉ちゃんなりの信頼、私達さとり妖怪にとって怖いのはドス黒い本性なの」

「え、えと、えつと…??」

「要するに、お姉ちゃんは蒼兄のことが大好きってかだよ！」

「なるほど！私と一緒に！」

「お空だけじゃないよ、お隣も私も、蒼兄は家族だから大好きなの！」

そっか！

それなら私もわかる！

「それじゃそれじゃ、蒼鷺も私達のこと大好きだよね！家族だよね！」

「もちろん！」

よかった！

「……………なんでこんな話になったんだっけ？」

「うにゅ？」

「ま、いつか！」

こいし様はやっぱり凄いなあ、みんなのことちゃんと見て考えてる。

私も見習わないと！



「ただいまー！」

あ、さと子様と蒼鳶だ！

「おかえり！！」

—家族が帰ってきた！